

常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路拡幅工事に伴う常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

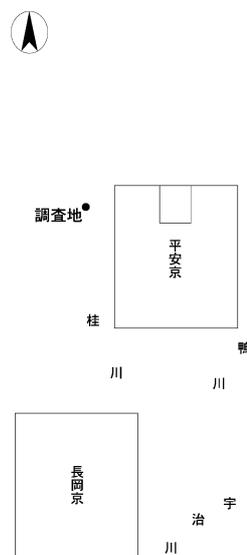
平成 23 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町他 地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2010年11月22日～2011年3月11日
- 5 調査面積 1,343 m²
- 6 調査担当者 高橋 潔・加納敬二・長戸満男・木下保明
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 1～3区の各調査区毎に、1番から通し番号とし、番号の前に遺構種類を付して呼称した。本書内では、番号の前に調査区を付け、例えば1区の土坑300は土坑1-300と表記することとした。
- 12 遺構規模 特に断わらない限り、遺構検出面での規模を記載する。深さも検出面からの深度を示す。
- 13 遺物番号 土器類・瓦類・石製品・土製品・金属製品・木製品ごとに通し番号を付し、土器類以外は番号の前に遺物種類を付して（例：瓦1）呼称し、写真番号も同一とした。
- 14 本書作成 高橋 潔・加納敬二・長戸満男・木下保明
- 15 執 筆 高橋 潔・加納敬二（分担は目次に記した）
- 16 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査の経緯	（高橋）	1
(1) 調査に至る経緯		1
(2) 調査の経過		1
2. 遺 跡	（高橋）	5
(1) 遺跡の位置と環境		5
(2) 周辺の調査		5
3. 遺 構		9
(1) 遺構の概要	（高橋）	9
(2) 1 区の遺構	（加納）	10
(3) 2 区の遺構	（加納）	13
(4) 3 区の遺構	（高橋）	15
4. 遺 物	（加納）	31
(1) 遺物の概要		31
(2) 1 区の遺物		32
(3) 2 区の遺物		35
(4) 3 区の遺物		36
5. ま と め	（高橋）	49
6. 付 章		53

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 区平面図（1：200）
図版 2	遺構	2 区平面図（1：200）
図版 3	遺構	3 区第 1 面平面図（1：200）
図版 4	遺構	3 区第 2 面平面図（1：200）
図版 5	遺構	3 区第 3 面平面図（1：200）
図版 6	遺構	1 1 区北半 第 1 面全景（北から）
		2 1 区北半 第 2 面全景（北から）

- 図版 7 遺構 1 1区南半 第1面全景(北から)
2 1区南半 第2面全景(北から)
- 図版 8 遺構 1 2区南半 第1面全景(北から)
2 2区南半 第2面全景(北から)
- 図版 9 遺構 1 2区北半 全景(東から)
2 3区南部 全景(北から)
- 図版 10 遺構 1 3区北部 第1面全景(北から)
2 3区北部 第1面中央部(集石遺構 3-316 周辺) 検出状況(東から)
- 図版 11 遺構 1 3区北部 第2面全景(北から)
2 3区北部 第3面全景(北から)
- 図版 12 遺構 1 土坑 1-114・200 検出状況(北東から)
2 土坑 2-68 検出状況(西から)
3 溝 3-149(北西から)
4 溝 3-149(調査区西壁) 断面(東から)
- 図版 13 遺構 1 集石遺構 3-316(東から)
2 土坑 3-913(北から)
3 溝 3-140 上層石垣検出状況(北東から)
4 溝 3- 9(東から)
- 図版 14 遺構 1 建物 3- 1(東から)
2 土坑 3-400(東から)
3 建物 3- 2・3- 3(北から)
- 図版 15 遺構 1 井戸 3-309(東から)
2 井戸 3-313(北から)
3 井戸 3- 3 断割 下層木柵検出状況(西から)
- 図版 16 遺構 1 土坑 3-538(北から)
2 土坑 3-1009(北東から)
3 竪穴住居 3-1139(北から)
- 図版 17 遺物 1・2区出土土器・軒瓦・埴
- 図版 18 遺物 3区出土土器
- 図版 19 遺物 3区出土墨書土器
- 図版 20 遺物 3区出土土器
- 図版 21 遺物 3区出土軒瓦
- 図版 22 遺物 3区出土土製品・石製品・金属製品・木製品

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	1・2区調査区配置図 (1 : 500)	2
図 3	3区調査区配置図 (1 : 500)	3
図 4	1区 調査前全景 (南から)	4
図 5	2区 調査前全景 (北から)	4
図 6	3区 調査前全景 (北から)	4
図 7	1区北半 作業風景 (南から)	4
図 8	2区南半 チャレンジ体験風景 (南東から)	4
図 9	3区 作業風景 (北から)	4
図 10	3区 現地公開風景 (西から)	4
図 11	3区 埋め戻し作業 (北から)	4
図 12	周辺調査地点図 (1 : 5,000)	6
図 13	1区西壁・北壁断面図 (1 : 100)	10
図 14	土坑 1-87 実測図 (1 : 50)	11
図 15	土坑 1-114・200 実測図 (1 : 50)	12
図 16	2区東壁・南壁断面図 (1 : 100)	13
図 17	土坑 2-68 実測図 (1 : 20)	14
図 18	柱穴列 2- 1 実測図 (1 : 50)	14
図 19	3区西壁断面図 (1 : 100)	16
図 20	建物 3- 5 実測図 (1 : 100)	18
図 21	柱穴列 3- a 実測図 (1 : 100)	19
図 22	井戸 3-67 実測図 (1 : 50)	19
図 23	溝 3-140 実測図 (1 : 50)	20
図 24	溝 3-149 断面図 (1 : 40)	21
図 25	溝 3-312 断面図 (1 : 40)	21
図 26	溝 3-150 断面図 (1 : 40)	22
図 27	集石遺構 3-316 実測図 (1 : 50)	22
図 28	土坑 3-913 実測図 (1 : 50)	23
図 29	建物 3- 1 実測図 (1 : 100)	24
図 30	建物 3- 2 実測図 (1 : 100)	24
図 31	建物 3- 3 実測図 (1 : 100)	25
図 32	建物 3- 4 実測図 (1 : 100)	25

図 33	井戸 3- 3 実測図 (1 : 50)	25
図 34	井戸 3-309 実測図 (1 : 50)	26
図 35	井戸 3-313 実測図 (1 : 50)	27
図 36	溝 3-824 西半実測図 (1 : 50)	28
図 37	土坑 3-400 実測図 (1 : 20)	28
図 38	土坑 3-538 実測図 (1 : 50)	29
図 39	土坑 3-685 実測図 (1 : 50)	29
図 40	土坑 3-1009 実測図 (1 : 50)	30
図 41	竪穴住居 3-1139 実測図 (1 : 50)	30
図 42	1 区出土土器実測図 1 (1 : 4)	32
図 43	1 区出土土器実測図 2 (1 : 4)	34
図 44	1 区出土瓦拓影・実測図 (1 : 4)	35
図 45	1 区出土石製品実測図 (1 : 8)	35
図 46	2 区出土土器実測図 (1 : 4)	36
図 47	3 区出土土器実測図 1 (1 : 4)	37
図 48	3 区出土土器実測図 2 (1 : 4)	39
図 49	3 区出土土器実測図 3 (1 : 4)	41
図 50	3 区出土土器実測図 4 (1 : 4)	42
図 51	3 区出土軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	44
図 52	3 区出土石製品実測図 (石 6・9・10 は 1 : 4、他は 1 : 8)	45
図 53	3 区出土土製品実測図 (1 : 2、1 : 4)	47
図 54	3 区出土金属製品実測図 (1 : 1、1 : 2)	47
図 55	3 区出土木製品実測図 (1 : 2)	47
図 56	3 区周辺遺構変遷図 (1 : 1,000)	50
図 57	広隆寺境内内外区別実測図および周辺調査位置図 (1 : 5,000)	52
図 58	X線透過写真	53
図 59	分析結果	54

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	7
表 2	遺構概要表	9
表 3	遺物概要表	31

常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

本調査は市道梅津太秦線限度額立体交差事業（通称：城北街道拡幅工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査は京都市建設局事業推進室から委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導の下、（財）京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

同事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、2008年度と2009年度に各2箇所（調査26～29）を実施しており、本調査は第3年度5次調査にあたる。

(2) 調査の経過（図1～3）

調査区の設定 本年度の調査対象地は、JR嵯峨野線北側に2箇所と南側に1箇所である（図1）。JR嵯峨野線の北側では、城北街道の東側、東西道である北嵯峨街道（現 下立売通）の北側を1区、南側を2区とした（図2）。また、JR嵯峨野線の南側では、城北街道の西側、東映太秦映画村の東前面の南半部に調査区を設定し、3区とした（図3）。

調査の目的 調査対象地は、古墳時代後期から飛鳥時代を中心とする集落遺跡である常盤仲之町遺跡の東端にあたる。さらに、北側の1・2区は古墳時代後期の群集墳である常盤東ノ町古墳群の分布域に含まれ、3区は飛鳥時代に創建された広隆寺旧境内の推定範囲に東接する位置にあっている。

これまでの周辺の調査成果より、1・2区では古墳時代後期から飛鳥時代、鎌倉時代から室町時代の2時期、3区では古墳時代後期

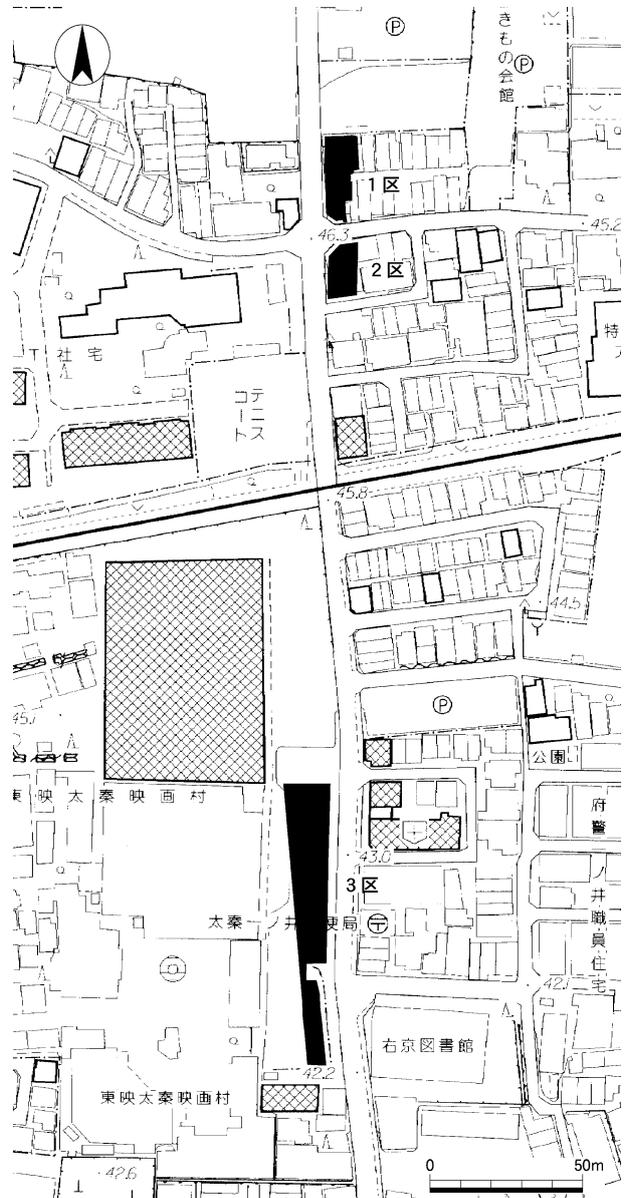


図1 調査位置図（1：2,500）

から飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代の3時代の遺構の検出が見込まれた。

常盤仲之町遺跡に関連する竪穴住居を主体とした集落関連遺構や常盤東ノ町古墳群の古墳痕跡、広隆寺旧境内に関連する飛鳥時代以降の寺院関連遺構の他、少なくとも中世までは遡る城北街道および北嵯峨街道に関連する遺構などの検出、解明を目的とした。

調査経過 調査は北側の1・2区より開始し、続いて南側の3区の調査に着手した。3区は全

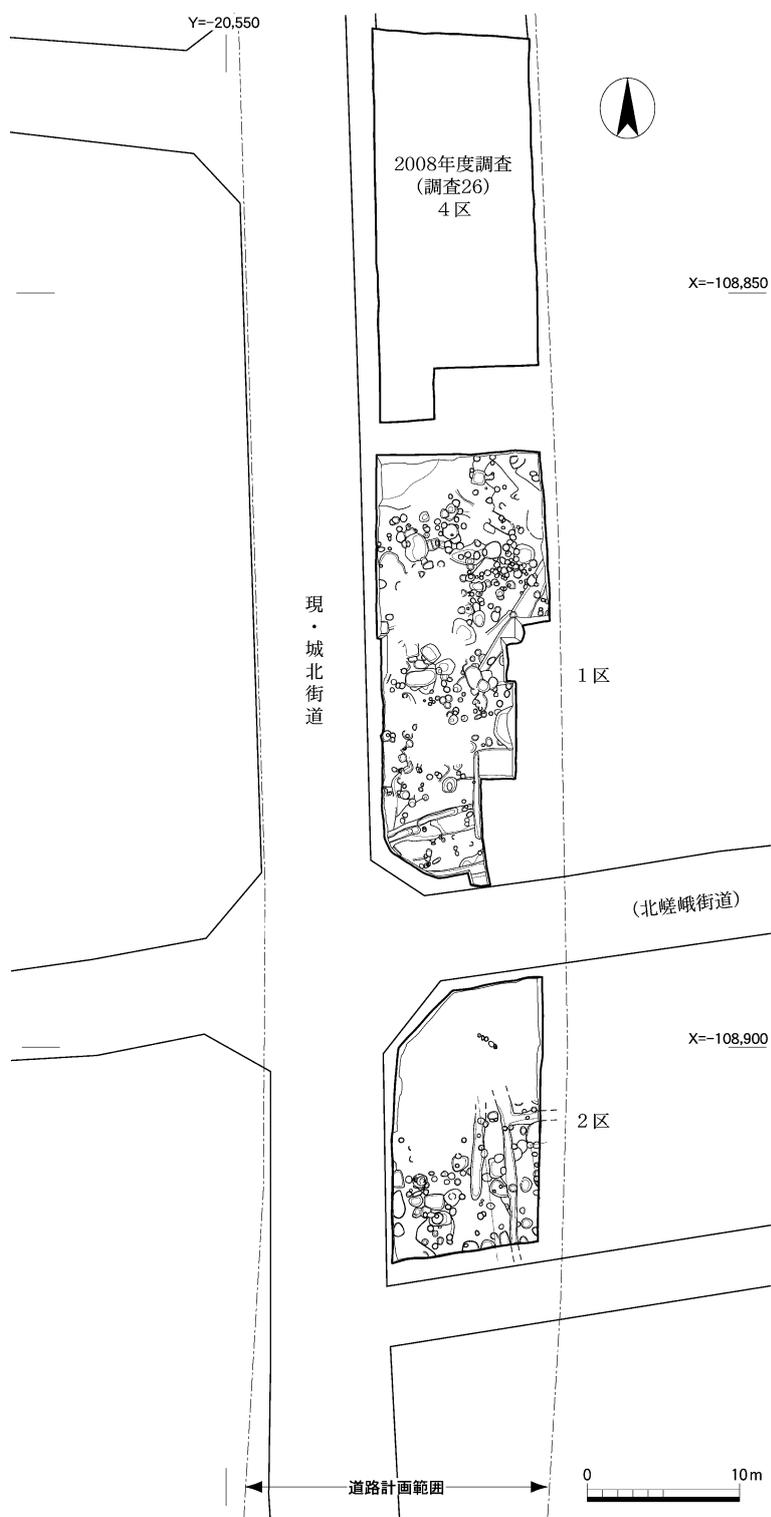


図2 1・2区調査区配置図 (1:500)

面アスファルト舗装されていたため、重機掘削に入る前に調査区範囲のアスファルトカッター切断作業を行った。1・2区は排土を場内に仮置きすることとしたため、排土置き場確保のため、それぞれ調査区を2分割し調査した。1区は北半の調査ののち南半の調査を行い、2区では南半の調査ののち北半の調査を行った。3区は重機掘削時の排土と人力掘削時の排土の一部は場外へ搬出・処分し、人力掘削時の排土の大半は先行して調査を終了した南部に仮置きをした。

いずれの調査区も重機掘削により現代層を除去し、以下の掘削は人力によって行った。遺構などの記録は、各遺構面ごとに平面図 (S = 1 : 20) を中心に適宜、断面図・個別図を併用した図面を作成し、各遺構面ごとに全景と個別遺構の写真撮影などを行った。なお、3区の平安時代の井戸の底部構造確認のための深掘りの際には重機を使用した。

1・2区の調査は12月末までに終了し、埋め戻しを行った。

1月以降は3区の調査に専念し、2月末までに調査を終了して、埋め戻した。なお、3区の埋め戻し土は場外より搬入し、改良剤を混入して地盤を安定させた。

各調査区とも各遺構面の完掘時ごとに合計10回、文化財保護課の臨検を受けた。また、検証委員である京都産業大学の鈴木久男教授、立命館大学の高正龍教授の視察を受けた。

調査の間、2010年11月30日には、京都市考古資料館の実施する「生き方探求・チャレンジ体験」の一環として、西京高校附属中学校2年生7名を受け入れ、現場において短時の発掘作業を行った。また、2011年2月19日には、地元向けの現地説明会を開催し、現場を公開するとともに、調査の成果を地域住民の方々へ公表し、約150人の参加を得た。

なお、調査中、京都大学の西山良平教授には現地へお越し願ひ、中世の遺構の状況の評価についてご指導頂いた。また、3区で出土した小型銅鏡については、京都国立博物館の久保智保氏にご教示頂いた。記して謝意を表します。

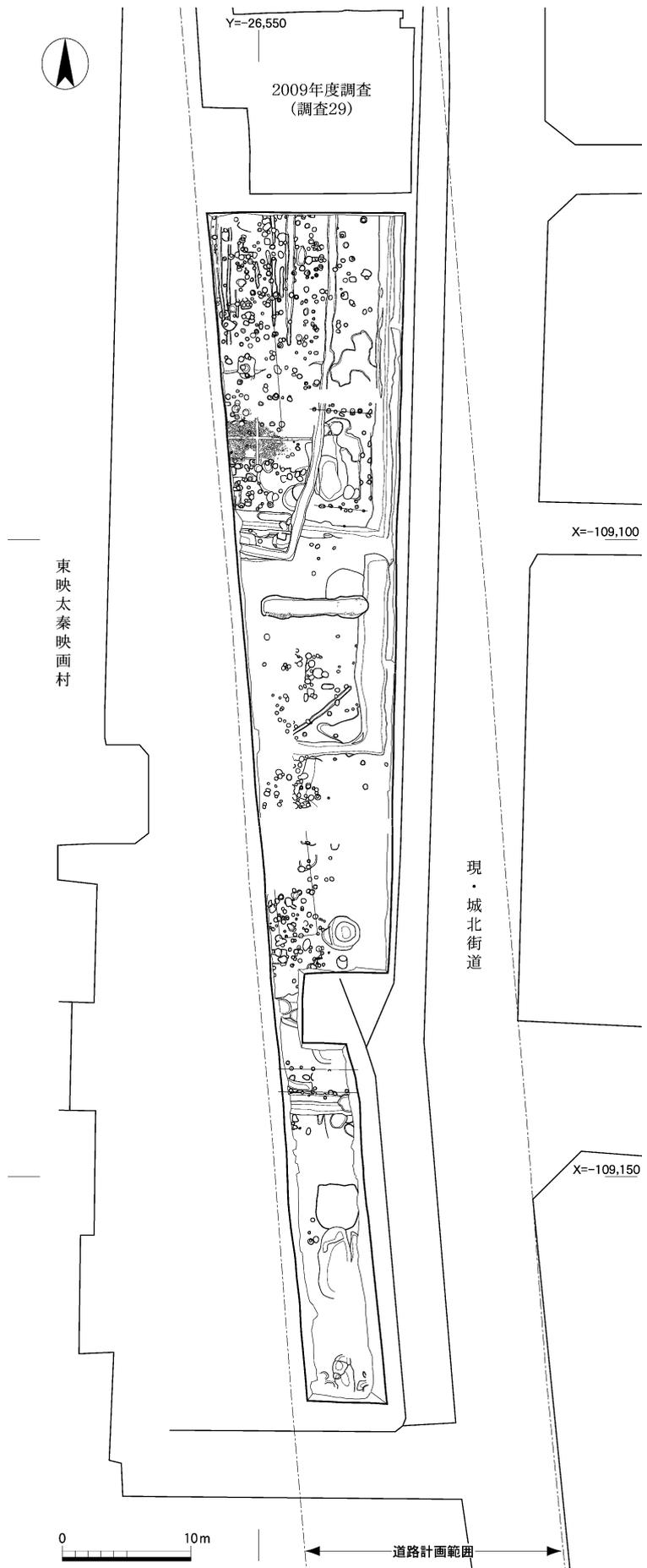


図3 3区調査区配置図 (1:500)



図4 1区 調査前全景（南から）



図5 2区 調査前全景（北から）



図6 3区 調査前全景（北から）



図7 1区北半 作業風景（南から）



図8 2区南半 チャレンジ体験風景（南東から）



図9 3区 作業風景（北から）



図10 3区 現地公開風景（西から）



図11 3区 埋め戻し作業（北から）

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地周辺は京都盆地北部の平野部北西にあたり、桂川の左岸に広がる嵯峨野といわれる地域である。北は丹波山系の南端にあたる北山（標高 200 ～ 300 m）から続く北嵯峨丘陵が画し、丘陵裾から南西を流れる桂川へ向けて、北東が高く、南西へ低くなる緩傾斜地となっている。この間、丘陵の前面には高燥な低位段丘が広がり、段丘の裾には北山から供給される小河川の活動により切り込まれた谷底低地と、それに伴う扇状地が幾重にも展開する。さらに南の桂川に沿った地域は帯状に一段と低くなり氾濫原や後背湿地となっている。

調査地の北東には 1941 年に国の名勝に指定されている標高 116 ～ 78 m の三つに峰が南北に並ぶ雙ヶ岡（双ヶ丘）が聳え、その西の裾を北西の鳴滝・宇多野より南東方向へ御室川が流れる。調査地が含まれる常盤仲之町遺跡および常盤東ノ町古墳群は、古御室川が形成した扇状地上に立地する。

調査地周辺は、おおよそ半世紀前までは市街地の西郊の田園地帯として、丘陵裾から桂川にかけての広大な範囲に田畑が広がっていた。しかし、高度経済成長以降、開発の波に晒されて、現在では住宅やマンションが密集する市街地となり、田畑は大幅に減少している。また、現・広隆寺の東には東映太秦映画村があって、京都・嵯峨野地域の観光地の一つとして賑わっている。

(2) 周辺の調査（図 12、表 1）

調査地は渡来系氏族である秦氏が本拠地の一つとした葛野・太秦にあたり、古墳時代後期から飛鳥時代の集落遺跡である常盤仲之町遺跡の東端部に位置している。特に本調査 3 区は、飛鳥時代に秦氏によって創建されたとされる広隆寺（広隆寺旧境内）の東限に隣接している。また、式内社の一つであり、秦氏との関連で重視される木嶋坐天照御魂神社（蚕の社）が南東に位置している。当地周辺では縄文時代以降、特に古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした集落や古墳・古墳群、寺院などの遺跡が展開している。

縄文時代 北に位置する村ノ内町遺跡で土坑が検出され、中期末葉（北白川 C 式）の土器が出土した（調査 31）。また、少量であるが、晩期の土器片も出土している。

弥生時代 村ノ内町遺跡では中期の遺構が確認されている。発掘調査（調査 23・24）では竪穴住居が 1 棟（畿内第Ⅱ様式）、立会調査（調査 11・15）では土坑や流路・遺物包含層が確認されている。また、南東の和泉式部町遺跡でも発掘調査で中期（畿内第Ⅳ様式）の竪穴住居 1 棟が検出された（調査 16）。御室川を遡った北西約 2.5 km の梅ヶ畑の丘陵（梅ヶ畑遺跡）では、埋納されていた中期の銅鐸 4 個体が見つかっており、¹⁾ 関連が注目される。

古墳時代 和泉式部町遺跡では、前期の竪穴住居が 14 棟、中期の竪穴住居が 7 棟検出された（調査 16）。中期の竪穴住居には L 字状に曲がる長い煙道を備えたものがあり、また初期須恵器や韓式系土器などが出土するなど、朝鮮半島との強い関連が窺える。



図12 周辺調査地点図 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	「平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅰ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅰ』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺子院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-Ⅰ』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	弁天島経塚の調査。平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	『日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査』『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡一右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要一』昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘鋳造遺構	『広隆寺跡』『京都府遺跡調査概報』第5冊-2（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	『和泉式部町遺跡』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	『広隆寺旧境内1』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	『広隆寺旧境内2』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	『広隆寺旧境内』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構など	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳～飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-17（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘	2008.11.10～ 2009.03.17	古墳後期～飛鳥の竪穴住居、古墳後期の横穴式石室ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-20（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009年
27	2008	発掘	2009.01.20～ 2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の土坑・溝・落込みほか	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-21（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009年
28	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.03.12	飛鳥の竪穴住居、平安の区画施設・溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-16（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010年
29	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.02.02	飛鳥の竪穴住居、鎌倉～室町の上坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-18（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010年
30	2010	発掘	2010.05.06～ 2010.06.22	平安中期～後期の土坑・溝・柱列、中世の土坑・溝など	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-4（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010年
31	2010	発掘	2010.05.06～ 2010.06.10	縄文中期の土坑、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・土坑、中世の建物・柱列・土坑など	『村ノ内町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-3（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010年

※ Noは図12の調査地点の数字と対応

常盤仲之町遺跡（調査5・9・12・21・22・25・28・29）や村ノ内町遺跡（調査31）では、後期から飛鳥時代にかけての竪穴住居が多数検出されている。やや遺跡の範囲を広げてみると、西方の上ノ段町遺跡、多藪町遺跡、西野町遺跡などでも同時期の竪穴住居が多く検出されており、後期以降に嵯峨野地域において人口の急増がみられる。

嵯峨野地域では古墳の築造の開始が、同じ山城北部における他の地域にくらべて遅れることが知られており、西方にある中期末葉の垂箕山古墳²⁾が最初とされる。これ以降、嵯峨野地域の首長墓と考えられる大型の古墳は当地の周辺に展開する。特に後期後葉の双ヶ岡1号墳は当地周辺を一望できる双ヶ岡の最も高い一ノ丘に築かれた円墳（直径44m）で、巨石を用いた横穴式石室は当地周辺の南西方向に向けて開口している³⁾。また、後期には北嵯峨丘陵の南斜面を中心に多くの群集墳（円墳直径10～20m、横穴式石室）が営まれ、当地周辺では先の双ヶ岡においても二ノ丘から三ノ丘にかけて双ヶ岡古墳群が、平地部にも東ノ町古墳群が展開する。東ノ町古墳群は、同時期の集落遺跡である当・常盤仲之町遺跡に隣接しており、これまでに少なくとも円墳16基の存在が知られている（調査2・3・10・26）。広隆寺旧境内においても後期の埴輪が採取されており、古墳が壊され埋没している可能性が考えられる（調査9）。

上述した、和泉式部町遺跡の中期の集落における朝鮮半島との関連を示す遺構・遺物の存在、嵯峨野地域の集落遺跡にみる後期以降の人口の急増、中期末葉の垂箕山古墳に始まる首長墓の系譜と後期に北嵯峨丘陵に展開する夥しい数の群集墳などは、当地周辺を本拠とした渡来系氏族・秦氏の当地への進出やその後の展開を考える上で示唆的である。

飛鳥時代 これまで調査例が少なく、その実態は不明であるが、当期に創建されたと考えられる広隆寺旧境内がある。同じ葛野郡内にやや先行して建てられた北野廃寺（北区北野白梅町）とともに、文献にみえる「広隆寺」の前身とされる「蜂岡寺」や「葛野秦寺」との関連が指摘されている。広隆寺旧境内の北東部は先に触れた常盤仲之町遺跡に含まれており、現境内の調査（調査9・12・22～24）においても古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居が多数検出されており、寺院の建立との関連で注目される。当期の遺構は建物の基壇とみられる遺構（調査6）の他、溝・柱穴・土坑など（調査17）などがある。

奈良時代以降 当地周辺では遺構検出例は多くないものの、この時期の状況は徐々に明らかになりつつある。常盤仲之町遺跡では、奈良時代の掘立柱建物（調査27）、平安時代の区画施設や建物・土坑・溝など（調査5・22・28・29）、また、鎌倉時代から室町時代の柱穴群や土壙墓群（調査27～29）が検出されている。また、広隆寺旧境内遺跡でも平安時代以降の遺構が多数検出されており（調査6・12・13・17・19・21）、調査7では旧境内南東部にあった平安時代後期の「弁天島経塚」が調査された。西方の一ノ井遺跡は、明確な遺構は検出されていないが、平安時代以降の遺物散布地として知られている。広隆寺を中心としたこの地域独特の遺構の広がりが認められる。

しかし、江戸時代には、徐々に耕地化が広がり、やがて広大な田園地帯を形成することになる。

註

- 1) 田辺昭三・佐原真「京都市梅ヶ畑出土の銅鐸」『日本考古学協会昭和39年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1964年
- 2) 垂箕山古墳は、中期末葉に位置付けられる全長67m前方後円墳で、盾形の周濠・周堤を伴い、残存状況は良好である。仲野親王陵高島墓に指定されており、宮内庁管理である。片平大塚古墳ともいわれる。
- 3) 1980年度に名勝公園として整備されるにあたり、発掘調査が実施された後、現地にて石室内に土囊などを詰めて埋め戻され保護・保存されている。『名勝双ヶ岡保存整備事業報告』昭和55年度、京都市文化観光局、1981年。

3. 遺 構

(1) 調査の概要 (表2)

本年度の調査では、1～3区の3箇所の調査区の調査を実施した。1・2区は排土置場をそれぞれ敷地内で確保したため、調査区を北と南に分割して反転調査を行った。3区は重機掘削時の排土のすべてと人力掘削の一部の排土を搬出処分し、残りは先行して終了させた南部に仮置きをした。調査面積は1区が250㎡、2区が163㎡、3区が930㎡で、総計1,343㎡であった。

1・2区では、周辺の調査などから想定されたとおり、飛鳥時代と鎌倉時代から室町時代の遺構を検出した。両調査区とも飛鳥時代の遺構はごく少数で、大半は鎌倉時代から室町時代の遺構、特に柱穴が密集した状況であった。道路用地となる直前まで宅地であったため、大型の攪乱があり、建物としてのまとまりは不明であったが、両調査区の間を東西に通る北嵯峨街道（現 下立売通）に沿った中世の活発な土地の利用状況を示している。

3区でも想定した古墳時代から飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代の3時期の遺構面

表2 遺構概要表

調査区	遺構面	時 代	主要遺構
1区	第1面	鎌倉時代～室町時代	柱穴、溝、土坑、土壇墓、井戸
	第2面	飛鳥時代	土坑、柱穴列
2区	第1面	鎌倉時代～室町時代	柱穴、土坑、溝
	第2面	飛鳥時代以前	溝、流路
3区	第1面	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物、柱穴列、柱穴、井戸、溝、土坑、土壇墓、集石遺構
	第2面	平安時代	掘立柱建物、柱穴、井戸、溝、土坑、土壇墓
	第3面	飛鳥時代以前	竪穴住居、土坑

あったものが、耕作地として形成される際、段状に削平されたと考えられる。現地表面の標高は北端で約 47.0 m、南端で約 46.1 m と約 0.9 m の高低差がある。

1) 第 1 面 (図版 1・6・7)

鎌倉時代から室町時代の遺構は柱穴、溝、土坑、土壇墓、井戸などがある。柱穴は多数検出した。建物としてまとまるものは不明であるが、底部に礎石を入れたものもある。溝は斜め方向の溝 1-150 や東西方向の溝 1-280 と南端で検出した東西方向の溝 1-344 がある。溝 1-344 は北嵯峨街道の北側溝にあたとみられる。また、土坑 1-12・87・230・234・237・304・346 など墓とみられるものが多数ある。井戸は調査区南半東壁際に円形掘形の井戸 1-325、方形掘形の井戸 1-335 がある。以下にそれら主要遺構について概述する。

土坑 1-12 調査区北端で検出した。平面形は一辺約 1 m の方形で、深さ 0.4 m である。底面から土師器皿 2 枚と瓦質土器鉢が出土した。埋土には炭化物が多く、鉄釘なども含まれていた。

土坑 1-68 調査区北半の東端で検出した。溝 1-150 と重複し、東側は他の遺構に削平を受けていた。平面形は不定形で規模は南北 0.4 m、東西 0.4 m、深さ 0.1 m である。埋土から焼締陶器甕が出土している。

土坑 1-87 (図 14) 調査区北半の東壁際に検出した。北側は削平を受け、西側は調査区外に延びているが、平面形は楕円形とみられる。残存規模は南北 2.1 m、東西 1 m、深さ 0.2 m である。長径 0.2 m 大の角礫が集石していた。埋土には炭化物が多く、鉄釘なども含まれていた。

土坑 1-211 調査区北西端で検出した。大規模な土坑である。規模は東西 4.5 m、南北 3 m、深さ約 1 m である。底面は砂礫層の上面で止まっていることから、上層の粘土層を採取した土坑と考えられる。

土坑 1-230 調査区の中央部西側で検出した。平面形は楕円形を呈する。南北 0.6 m、東西約 1 m、深さ 0.12 m である。埋土には炭化物を含み、土師器皿が多数出土した。

土坑 1-234 調査区のほぼ中央部、土坑 1-230 北西側で検出した。平面形は一辺約 1 m の方形で、深さ 0.2 m ある。埋土には炭化物を含み、土師器皿が多数出土した。

土坑 1-237 調査区の中央部西側で検出した。平面形は長方形である。東西約 2 m、南北約 1 m、深さ 0.4 m である。土坑内の埋土には鉄釘・炭化物・礫が多く含まれていた。

土坑 1-304 調査区のほぼ中央部で検出した。平面形は円形である。規模は径 0.9 m、深さ 0.4 m である。炭化物や礫とともに焼締陶器甕が出土している。

土坑 1-346 調査区の中央部東側で検出した。南西隅は土坑 1-304 と重複している。平面形は楕円形とみられる。残存規模

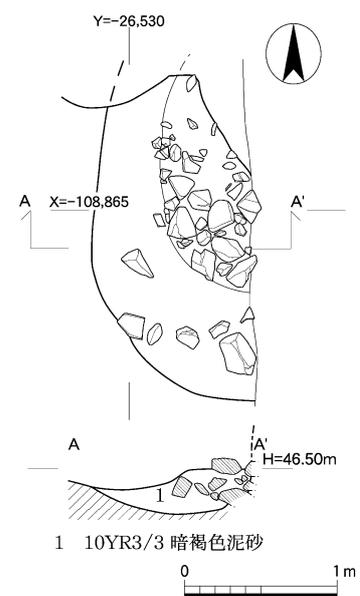


図 14 土坑 1-87 実測図 (1 :

は南北 0.6 m、東西 0.7 m、深さ 0.4 m である。土坑内には角礫が多くみられ、埋土からは炭化物や鉄釘が出土した。

井戸 1-325 調査区南半の東壁際で検出した井戸である。ほとんどが調査区外の東に広がり、掘形のみを検出した。掘形の規模は南北約 3 m、東西 1.4 m、深さ 2 m である。

井戸 1-335 井戸 1-325 と重複して検出した。井戸の掘形と考えられるが、ほとんどが調査区外の東に広がる。規模は南北約 2 m、東西 2.7 m、深さ 2.07 m である。埋土の下層からは鎌倉時代の土師器皿片が出土している。

溝 1-150 調査区北半で検出した北東から南西方向の溝である。規模は幅 1.1 ~ 0.7 m、深さ 0.5 ~ 0.1 m で、延長約 7.5 m 分を検出した。北東へはさらに調査区外へ延長する。

溝 1-344 調査区南端で検出した東西方向の溝の北肩部である。南肩部は調査区外である。規模は幅 1.3 m 以上、深さ 0.4 m で、肩部は段状に南に下がる。溝の方位は調査区外に南接する北嵯峨街道に一致する。

柱穴群 1- 1 調査区全体で底部に石を据えた柱穴を 22 基検出した。柱穴は円形を呈し、規模は径 0.3 ~ 0.5 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m である。

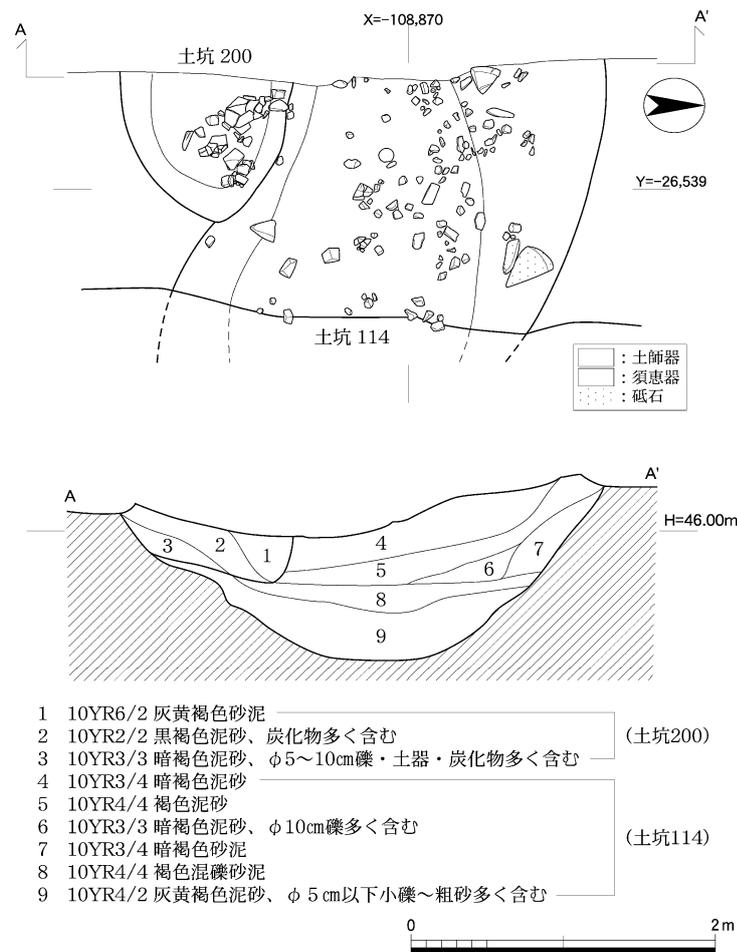


図 15 土坑 1-114・200 実測図 (1 : 50)

2) 第 2 面

飛鳥時代以前の遺構は土坑 1-114・200、柱穴列 1- 1 を検出した。いずれも飛鳥時代の遺構である。土坑 1-114 は大型の土坑で、土器類が多く出土した。

土坑 1-114 (図版 12、図 15) 調査区北半の西壁際で検出した。東側の一部は攪乱により削平を受け、南側は土坑 1-200 と重複し、西側は調査区外に広がる。平面形は円形とみられ、規模は南北 3.2 m、東西 2 m 以上、深さ 1.1 m である。土坑内からは投棄された礫とともに土師器甕・鍋・高杯や須恵器杯身・鉢などが出土している。

土坑 1-200 (図版 12、図 15) 調査区北半の西壁際で土坑 1-114 と重複して検出した。調査区外西に広がる。平面形は楕円形で、規

横は南北 0.9 m、東西 1 m 以上、深さ 0.2 m である。埋土から土師器碗・甕などが出土している。

柱穴列 1-1 調査区北半で検出した。掘建柱建物の南西隅で、南北 1 間、東西 1 間分を検出した。柱間は南北 1.8 m、東西 2.4 m である。全体規模は不明であるが建物方位は座標北に対して約 20° 西に振れる。柱穴内の埋土は土坑 1-114・200 と類似する。

(3) 2 区の調査

北嵯峨街道を挟み 1 区の南に位置する。調査は 1 区と同様、まず南半の調査を行い、反転して北半の調査を行った。

遺構には柱穴、土坑、溝などがある。全体では柱穴と土坑が多数を占める。遺構面は、後述する 1 面であるが、時期別に振り分け、鎌倉時代から室町時代の遺構を第 1 面、飛鳥時代以前の遺構を第 2 面とした。

基本層序 (図 16) 基本層序は現代盛土、中世以降の遺物包含層が 2 層 (図 16 の 1・2 層) あり、黄褐色砂礫層・明黄褐色泥砂層のいわゆる地山となる。遺構は地山上面で検出した。北半は現代の建物基礎により深く掘削を受け、遺構はほとんど残存しなかったが、攪乱の間に島状に残された地山面で古墳時代後期から飛鳥時代と考えられる溝を検出した。南半は鎌倉時代から室町時代の遺構群を検出した。

1) 第 1 面 (図版 2・8)

鎌倉時代から室町時代の遺構には、柱穴・土坑・溝などがある。土坑には焼土や炭を含む土坑 2-30 や焼締陶器甕を据えたとみられる土坑 2-68 などがある。溝には南北方向の溝 2-47 がある。溝の西側に並行して、底に礎石を据えた柱穴列 2-1 が伴うことから、区画のための

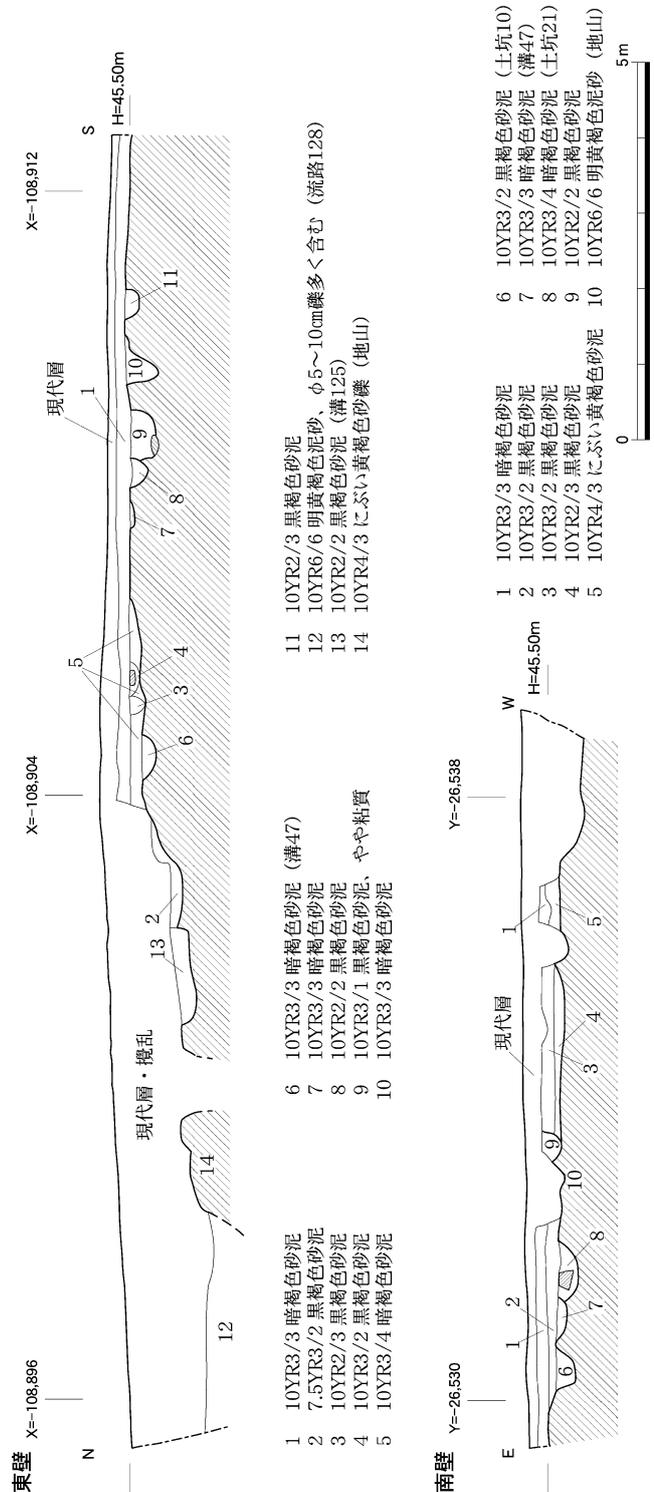


図 16 2 区東壁・南壁断面図 (1:100)

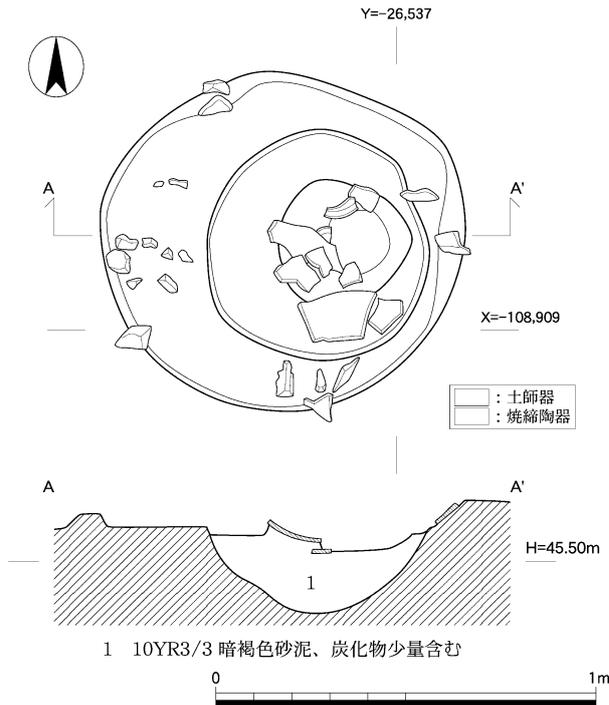


図17 土坑 2-68 実測図 (1 : 20)

施設とみられる。

土坑 2-30 南半西寄りで検出した土坑である。平面形は長方形である。東西 1.3 m、南北 0.9 m、深さ 0.3 m である。埋土は炭化物や礫を含み、瓦器羽釜が 2 個体出土した。

土坑 2-68 (図版 12、図 17) 南半西寄りで検出した土坑である。上部が大きく削平を受けていたが、基底部分が残存していた。掘形の平面形はほぼ円形で、土師器皿と焼締陶器甕片が出土し、甕を据えていたとみられる掘り込みを検出した。掘形の径は 0.95 m、掘り込みの径 0.55 m、深さ 0.25 m である。埋土には炭化物を含む。

溝 2-47 南半東寄りで検出した南北方向の溝である。幅は 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m で、南北約 9 m 分を検出した。北延長は大きな攪乱により削平を受け失われていた。南延長は調査区外に延びる。溝の方位は北で西へ振れる。北端で標高 45.20 m、南端で標高 45.35 m あり、南流していたことがわかる。また、調査区南端より北へ約 8 m の地点で東に東西溝が取り付く。東西溝の幅は 0.8 m で、深さは 0.3 ~ 0.5 m である。

柱穴列 2-1 (図 18) 南半の東寄りで溝 2-47 に並列して検出した。溝 2-47 の西約 1 m に設置された柵状の柱穴列と考えられ、4 間分を検出した。溝 2-47 と同様に北延長は削平を受けていたが、南延長は調査区外に延びるとみられる。柱間は 2.1 m (7 尺) と 1.5 m (5 尺) 間隔である。

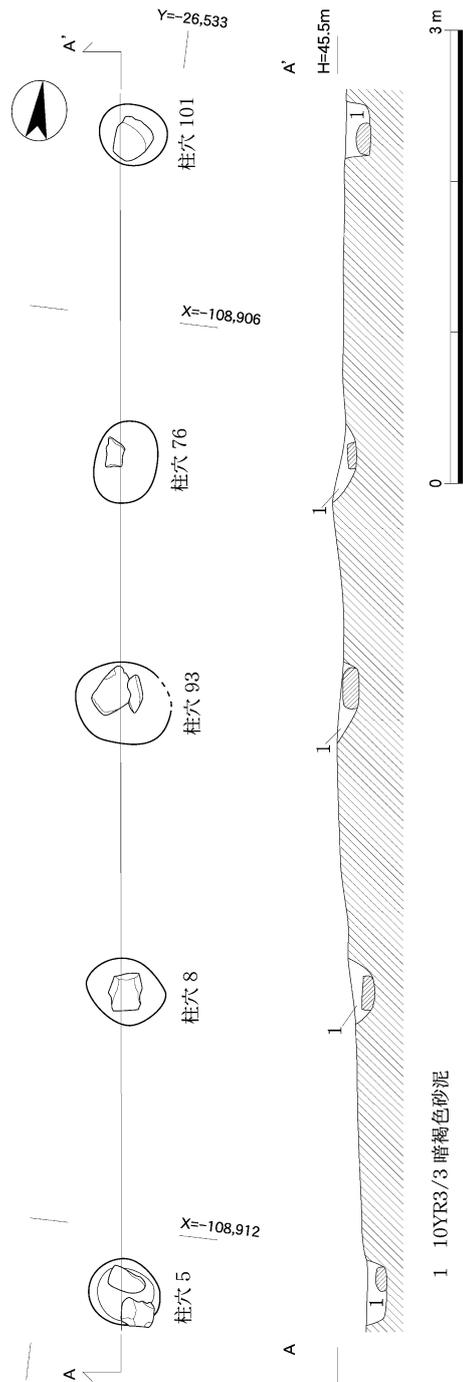


図18 柱穴列 2-1 実測図 (1 : 50)

柱穴の底にはいずれも上面が平坦な礎石が据えられている。柱穴列の方位は座標北に対して約6°西に傾く。

柱穴群 2-1・2 柱穴群 2-1は南半の西寄りで見出した。底に礎石を据えた柱穴を6基見出した。柱穴の径は0.3～0.4mで、いずれも柱穴底面に上面が平坦な石を据える。柱穴群 2-2は南半の東壁際で見出した。底に礎石を据えた柱穴を4基見出した。形状・規模は柱穴群 2-1と同様で、調査区外の東に広がる。

柱穴 2-119 南半の西寄りで見出した。土坑 2-68と重複して見出した柱穴である。規模は径0.3m、深さ0.4mである。柱穴内からは鎌倉時代後半の土師器皿(図46-30)が出土している。

2) 第2面(図版2・9)

飛鳥時代以前の遺構には溝、流路がある。いずれも調査区の北半で見出した。溝 2-125は弧状を呈する溝で、周辺の調査などから古墳(円墳)の周溝の可能性が高い。流路 2-128は南肩を見出しており、北西から南東に流れる自然流路である。

溝 2-125 調査区北半の東側で見出した。北半は建物基礎などにより削平を受けていた。残存規模は幅約1m、深さ0.2mで、弧状に断続しながらも5m分見出した。北延長は攪乱により削平されていたが、東延長については調査区外に延びる。出土遺物はなく時期は確定できないが、埋土は1区の調査で見出した飛鳥時代の土坑の堆積土と同一の黒褐色系の砂泥層である。

流路 2-128 北端で見出した流路南肩部である。規模は幅3.5m以上、深さ0.5m以上である。埋土は砂層と砂礫層である。北西から南東に流れをもつ。

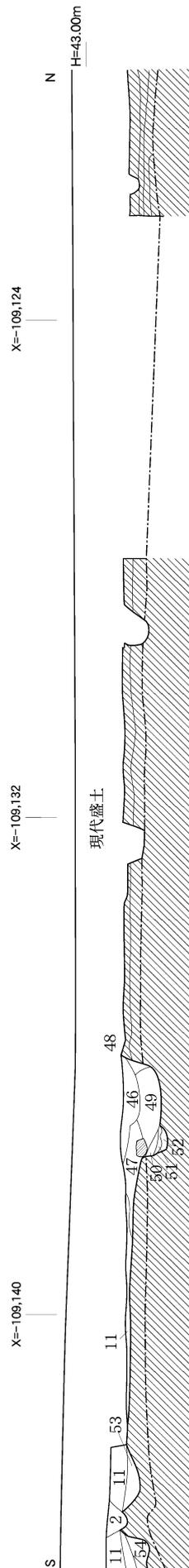
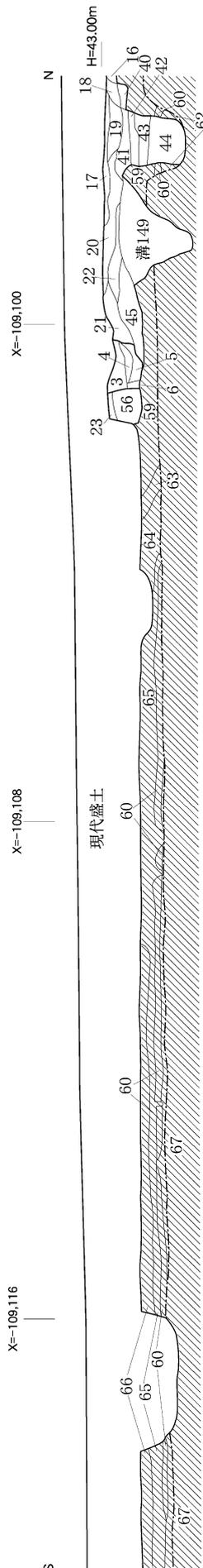
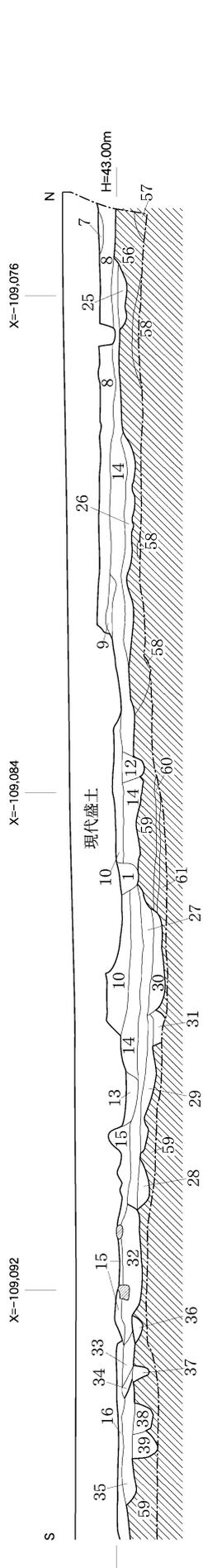
(4) 3区の遺構

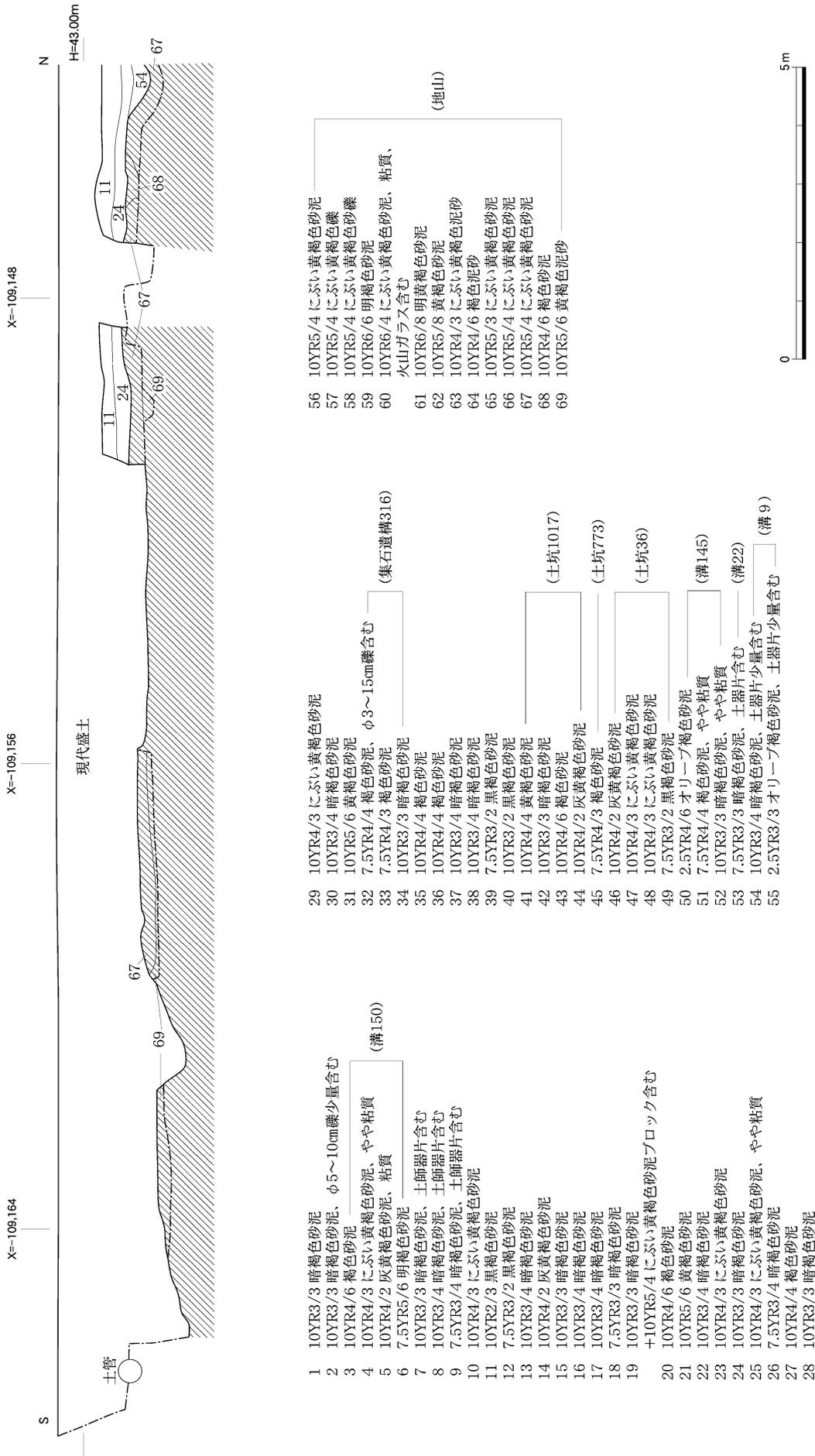
調査区は城北街道に西接し、南北に長く約93mに及ぶ。現地形は概ね北から南への緩やかな傾斜地であるが、東西では城北街道に向かって傾斜し、東に低くなっている。

調査前までは東映太秦映画村前面の駐車場として利用されていたため、全面がアスファルトに覆われていた。アスファルト・碎石・現代盛土を除去した下層の遺構面の残存状況は、全体としては攪乱が多く、駐車場にされる前の利用形態によって異なるが、遺物包含層・遺構面の残存状況は良くなかった。想定した3時期の遺構面が良好に遺存している箇所は北部の西寄りと、南部の一部のみであった。それ以外では現代盛土を除去すると、いわゆる地山となり、深く削られ、遺構の残存しない箇所もみられた。

見出した遺構の時期は、鎌倉時代から室町時代、平安時代、古墳時代から飛鳥時代の3時期であり、遺構数では圧倒的に鎌倉時代から室町時代のもが多く、平安時代と古墳時代から飛鳥時代のもは少数であった。

基本層序(図19) 層序は残存状況の良い北部(X=-109,100付近以北)の西寄りでは、上面よりアスファルトと碎石(厚さ約0.2m)、現代盛土(約0.3m)、鎌倉時代から室町時代の遺物包含層(約0.3～0.5m、8・10・14～22層)、以下はいわゆる地山となる。また、南部は現代盛





- | | | | | | |
|----|----------------------------|----|---------------------------|----|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 29 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 56 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ5~10cm礫少量含む | 30 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 57 | 10YR5/4 にぶい黄褐色礫 |
| 3 | 10YR4/6 褐色砂泥 | 31 | 10YR5/6 黄褐色砂泥 | 58 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 4 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、やや粘質 | 32 | 7.5YR4/4 褐色砂泥、φ3~15cm礫含む | 59 | 10YR6/6 明褐色砂泥 |
| 5 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、粘質 | 33 | 7.5YR4/3 褐色砂泥 | 60 | 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥、粘質、火山ガラス含む |
| 6 | 7.5YR5/6 明褐色砂泥 | 34 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 61 | 10YR6/8 明黄褐色砂泥 |
| 7 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、土師器片含む | 35 | 10YR4/4 褐色砂泥 | 62 | 10YR5/8 黄褐色砂泥 |
| 8 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、土師器片含む | 36 | 10YR4/4 褐色砂泥 | 63 | 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 |
| 9 | 7.5YR3/4 暗褐色砂泥、土師器片含む | 37 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 64 | 10YR4/6 褐色泥砂 |
| 10 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 38 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 65 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 11 | 10YR2/3 黒褐色砂泥 | 39 | 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | 66 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 12 | 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | 40 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 67 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 13 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 41 | 10YR4/4 黄褐色砂泥 | 68 | 10YR4/6 褐色砂泥 |
| 14 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 42 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 69 | 10YR5/6 黄褐色泥砂 |
| 15 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 43 | 10YR4/6 褐色砂泥 | | |
| 16 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 44 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | | |
| 17 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 45 | 7.5YR4/3 褐色砂泥 | | |
| 18 | 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 | 46 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | | |
| 19 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 47 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | | |
| 20 | +10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥ブロック含む | 48 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | | |
| 21 | 10YR4/6 褐色砂泥 | 49 | 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | | |
| 22 | 10YR5/6 黄褐色砂泥 | 50 | 2.5YR4/6 オリーブ褐色砂泥 | | |
| 23 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 51 | 7.5YR4/4 褐色砂泥、やや粘質 | | |
| 24 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 52 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質 | | |
| 25 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 53 | 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、土器片含む | | |
| 26 | 7.5YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、やや粘質 | 54 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、土器片少量含む | | |
| 27 | 10YR4/4 褐色砂泥 | 55 | 2.5YR3/3 オリーブ褐色砂泥、土器片少量含む | | |
| 28 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | | | | |

図 19 3 区西壁断面図 (1 : 100)

土が南ほど厚く、0.5～1.5 mに及ぶが、残存状況の良い箇所（X=-109,140～109,150）では鎌倉時代から室町時代の遺物包含層（厚さ0.5 m、11・24層）が遺存しており、その下はいわゆる地山に達する。地山は、全体として黄褐色系の砂泥層で、部分的に砂礫がみられる。X=-109,084～109,120間では、標高42.50 m前後の高さで厚さ約0.1 mの粘質のにぶい黄褐色砂泥層（60）を確認した。本層の下半には始良T n（AT）由来とみられる火山ガラス細片が多く含まれていることが判明した。本層にはラミナがみられ、水流による二次堆積層であるが、堆積の時期の上限が始良T n（AT）降灰（約25,000年前）であることがわかる。

遺構面は、鎌倉時代から室町時代の遺物包含層の上面を第1面、この遺物包含層を除去した、いわゆる地山上面を第2面および第3面とした。鎌倉時代から室町時代の遺構は第1面および地山上面、平安時代以前の遺構は地山上面で検出した。

1) 第1面（図版3）

第1面は鎌倉時代から室町時代の遺構群であるが、出土遺物などの検討から室町時代に主体があったと考えられる。遺構面は上述の遺物包含層の上面と考えるが、土壌化の影響などにより上面で検出できない遺構もあって、遺物包含層を除去したいわゆる地山上面でも遺構を検出した。

検出した遺構には、掘立柱建物1棟、柱穴列1条、柱穴多数、井戸2基、溝3条、土坑、土壇墓、集石遺構などの他に、耕作に伴う溝と考えられる小溝群などがある。

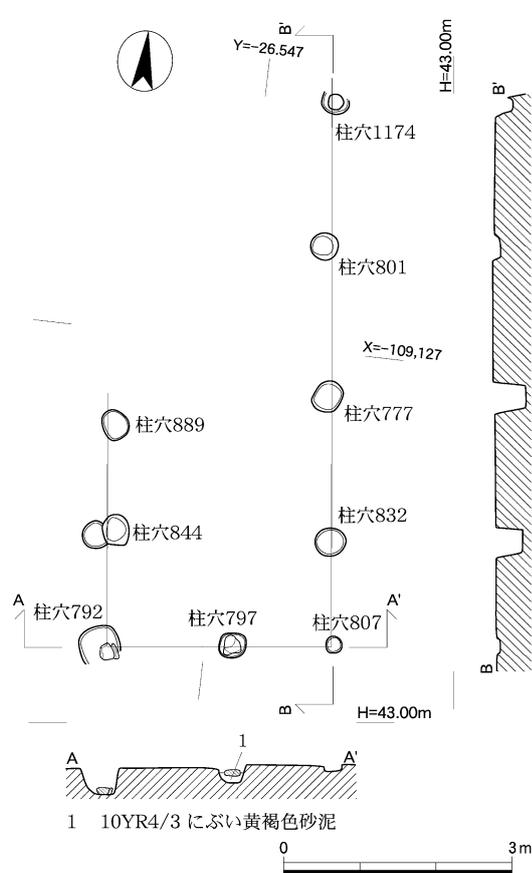


図20 建物3-5実測図（1：100）

当期の柱穴は多数検出した。ほとんどのものは直径0.3 m前後の円形掘形であるが、柱痕跡は明瞭でない。掘形の底に柱を受けるため、長径0.2 m程度の礎石を入れるものが多くみられる。これらのうち、建物・柱穴列として認識できたものが2例ある。

建物3-5（図20）南部で検出した2間×4間以上（東西3 m、南北7.2 m以上）、南北棟の掘立柱建物である。建物南辺の柱穴3-792と柱穴3-797では礎石を検出した。建物の方位は座標北に対して西に約6°振れる。

柱穴列3-a（図21）北部で確認した南北方向の柱穴列である。南北8間、13 m以上の柵状の遺構とみられ、柱間は1.3～2.2 m、礎石を入れるものと入れないものが交互に並ぶ。主軸の方位は座標北に対して約4°西に振れる。

当期の井戸と考えられる遺構は、南半部で井戸3-33・3-67の2基を検出した。

井戸3-33 南部の調査区北東角で、南西部の一

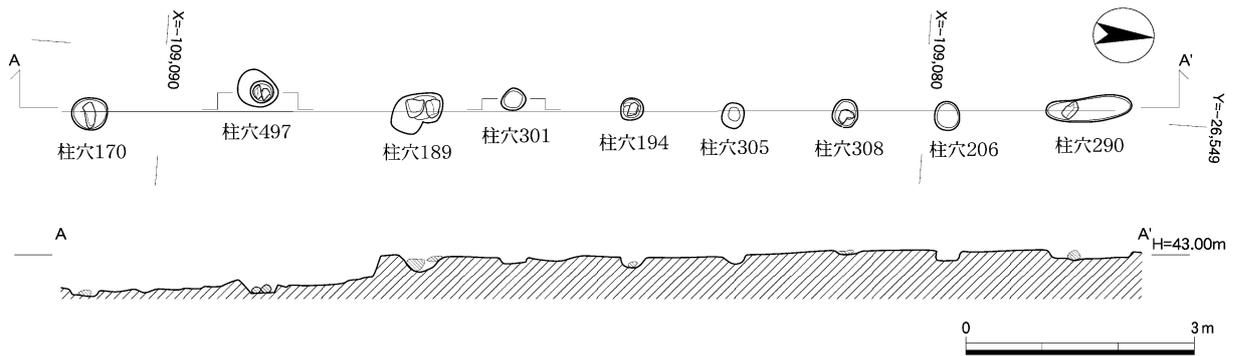


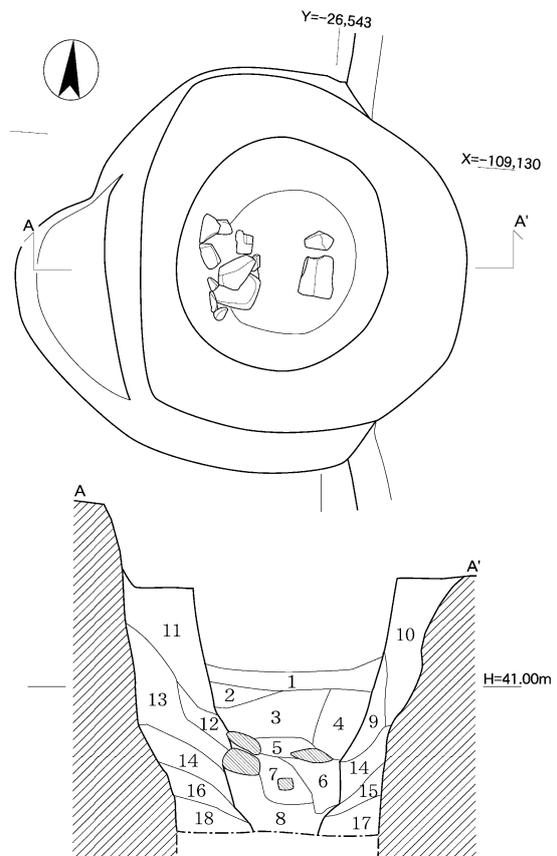
図 21 柱穴列 3- a 実測図 (1 : 100)

部を検出した。東西 2.5 m 以上、南北 1 m 以上の円形掘形の井戸と考えられる。1.5 m まで掘削を進めたが、遺構の大半が調査区外へ広がることと壁面の崩落などの危険が予想されたため、以下の掘削は断念した。掘削した範囲では、構造の判明する手がかりはない。

井戸 3-67 (図 22) 南部東寄りで見出した。径 2.5 ~ 3 m のやや歪な円形掘形の井戸と考えられる。井戸枠の痕跡とみられる中央の直径 1.5 m 円形の落込みの埋土には、長径 0.2 ~ 0.3 m の垂角礫が多く含まれており、石組みの井戸であったとみられるが、廃棄の際に壊して埋めたと推測される。深さ 2 m まで掘削を行ったが、底面に至らず、底部の構造は不明である。

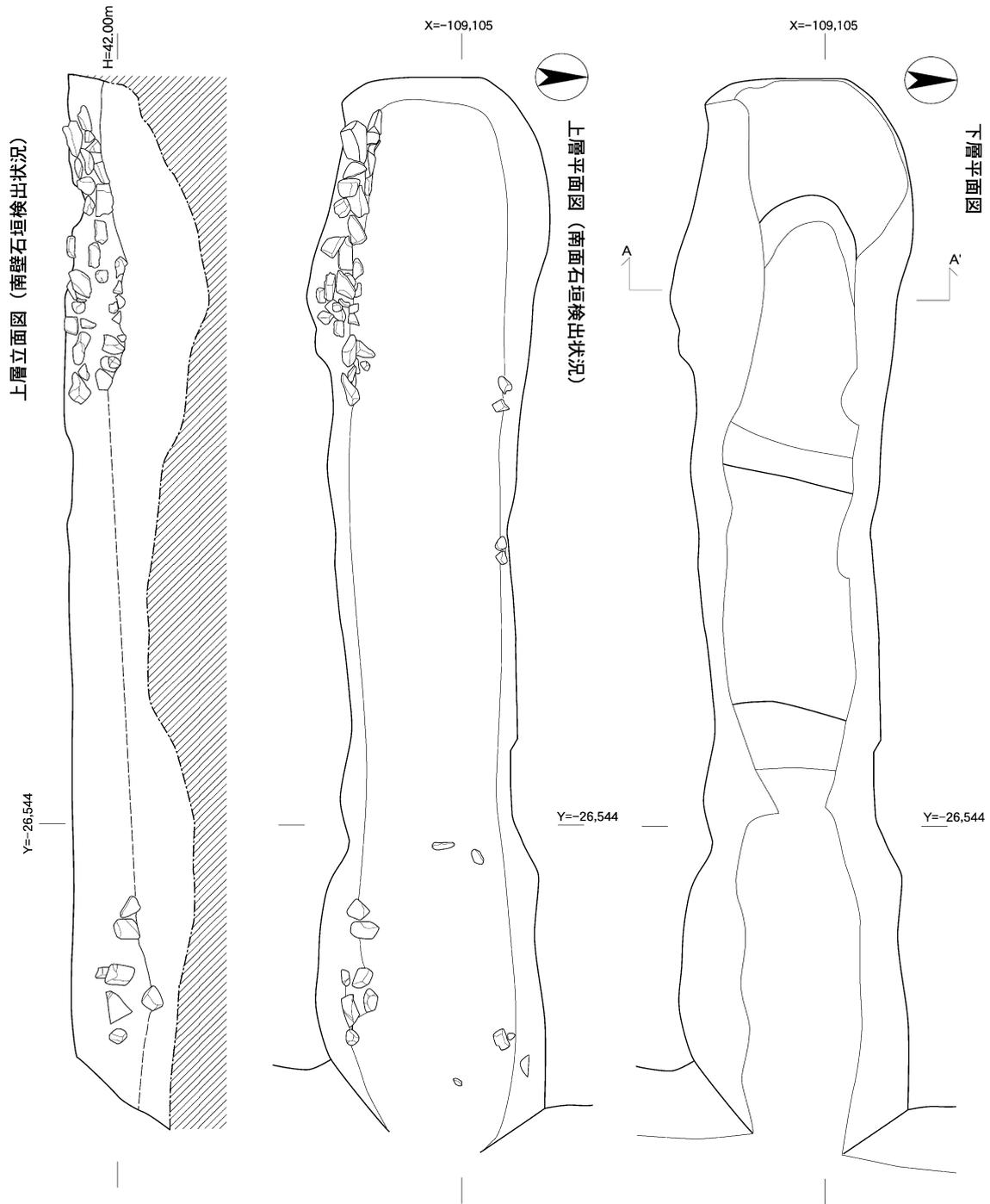
溝はいずれも区画に伴うと考えられる溝を検出した。

溝 3-140 上層 (図 23) 中央で見出した東西方向の溝である。本来平安時代に掘削されたもの (溝 3-140 下層) であるが、当期には底面をある程度埋めて平坦に整形した後に北壁と南壁に石垣を施したとみられる。南壁に一部石垣状の石積みが残存する。東端が攪乱に切られて現存長



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥、粘質
- 2 2.5Y4/2 暗灰褐色粘土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘土
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粘質
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、φ3~15cm礫含む
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土、φ5~20cm礫含む
- 8 2.5Y5/3 黄褐色粘土
- 9 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質、φ2~8cm礫含む
- 10 7.5YR4/4 褐色砂泥 やや粘質、φ1~4cm礫多く含む
- 11 7.5YR5/2 灰褐色泥砂、やや粘質、φ2~3cm礫含む
- 12 10YR6/3 にぶい黄橙粘質土、粗砂含む
- 13 10YR7/2 にぶい黄橙粘質土、粗砂含む
- 14 10YR6/4 にぶい黄橙粘質土、粗砂含む
- 15 10YR7/4 にぶい黄橙粘質土
- 16 10YR5/6 黄褐色粘質土
- 17 2.5Y5/2 暗灰黄粘質土
- 18 2.5Y5/4 黄褐色粘質土、粗砂含む

図 22 井戸 3-67 実測図 (1 : 50)



- 1 10YR4/4 褐色砂泥
+10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック、土師器片を含む
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭化物・土師器片を含む
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭化物・土師器片を含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭化物・土師器片を含む
- 5 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭化物・土師器片を含む
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭化物・土師器片を含む
- 7 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭化物・土師器片を含む
- 8 10YR5/8 灰黄褐色砂泥、炭化物・土師器片を含む
- 9 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、粘質、炭化物・土師器片を含む
- 10 10YR5/8 黄褐色砂泥、礫質
- 11 2.5Y5/6 黄褐色礫
- 12 10YR6/8 明黄褐色砂泥
- 13 10YR3/3 暗褐色砂泥

南北方向断面図

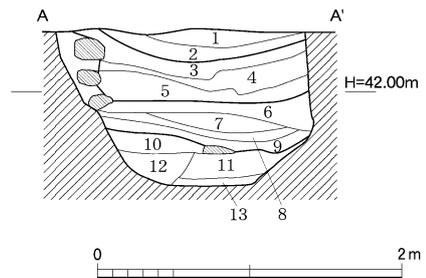
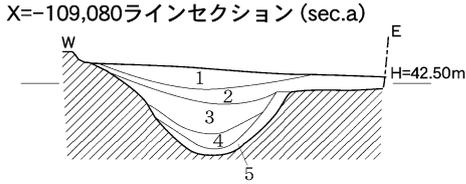
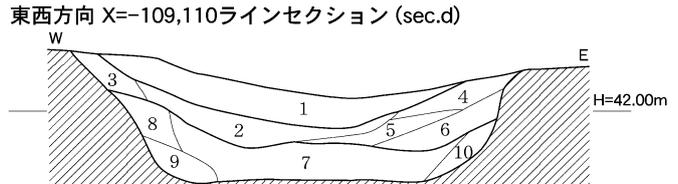


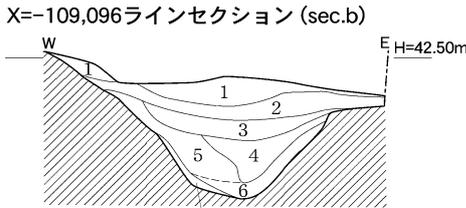
図 23 溝 3-140 実測図 (1 : 50)



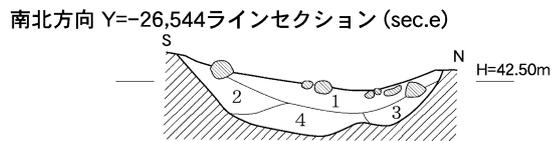
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、φ1~5cm礫含む
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 3 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、φ5~10cm礫含む
- 4 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
- 5 2.5Y6/2 灰黄色砂泥



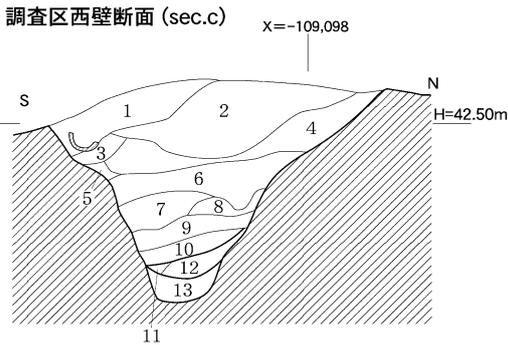
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、粗砂含む、φ3~10cmの礫中量含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、やや粘質
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ2~5cmの礫少量含む
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、粗砂含む
- 5 10YR4/1 褐灰色砂泥
+10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥ブロック含む
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ3~7cmの礫少量含む
- 7 10YR4/1 褐灰色粘質土、細砂含む
- 8 10YR4/2 暗灰黄色砂泥、φ1~5cmの礫少量含む
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、粗砂含む
- 10 10YR4/2 暗灰黄色砂泥



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ3~10cm礫含む
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ10cm礫含む
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 6 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
- 7 2.5Y5/4 黄褐色砂泥



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、φ3~15cmの礫含む
- 2 10YR4/4 褐色砂泥
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、粗砂含む、φ2~5cmの礫少量含む



- 1 2.5Y4/2 暗黄灰色砂泥、やや粘質、φ6~8cm礫少量含む
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質
+10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥ブロック多く含む
- 3 7.5YR4/3 褐色砂泥
+10YR4/6 褐色砂泥ブロック
- 4 10YR3/4 暗褐色砂泥、土師器微量
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥~シルト
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、やや粘質
- 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 9 7.5Y4/2 灰黄褐色シルト
- 10 10YR4/4 褐色砂泥、粘質
- 11 7.5YR4/4 褐色砂泥、やや粘質
- 12 5YR5/8 明晰褐色砂泥と
10YR5/4 にぶい黄褐色シルトの互層、ラミナ明瞭
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト、ラミナ明瞭

※断面図位置は図版3の平面図に明示。

図24 溝3-149断面図(1:40)

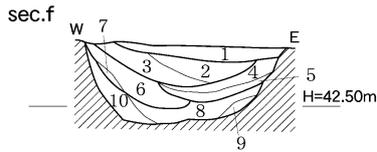
※断面図位置は図版3の平面図に明示。

図25 溝3-312断面図(1:40)

8.3 mほどであるが、それ以上東に延びず、本来東壁も立ち上がる溝状の大型土坑とみられる。中央部の幅は1.3 m前後とやや細く、東西両端では幅1.7 ~ 1.8 mとやや幅広になる。下層を0.2 ~ 0.5 m埋めて(断面図6 ~ 9層)平坦面を作り出し、壁面に3段ほどの石積みを施す。本来壁面全面に施されたものか、部分的なものかはわからないが、西端と東端の南壁面で検出した。石積みは粗く、崩れたように見える。用途は不明である。

溝3-149(図24) 調査区の東端に沿うように、北端からまっすぐ南に延びて、座標 X=-109,100 辺りで直角に折れて西の調査区外へ延びる、断面V字状を呈する溝である。東辺の北延長部は北側で行った2009年度の調査28で検出した溝5にあたり、当期

の城北街道の西側溝である。東辺部は、ほぼ現・城北街道の西側溝と重なっており、上部が削られてしまっている。東辺北端では幅1.2 m、底部の標高42.15 m、東辺南端では幅1.5 m、底部の標高41.63 m、南辺西端では幅1.7 m、底部の標高41.60 mとなっている。東辺と南辺のコーナー部分は後世の攪乱によって上部が削られているが、底部の標高はやや西が低いことから、東辺は



- 1 10YR4/4 褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 4 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
+10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック含む
- 6 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 7 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥



※断面図位置は図版3の平面図に明示。

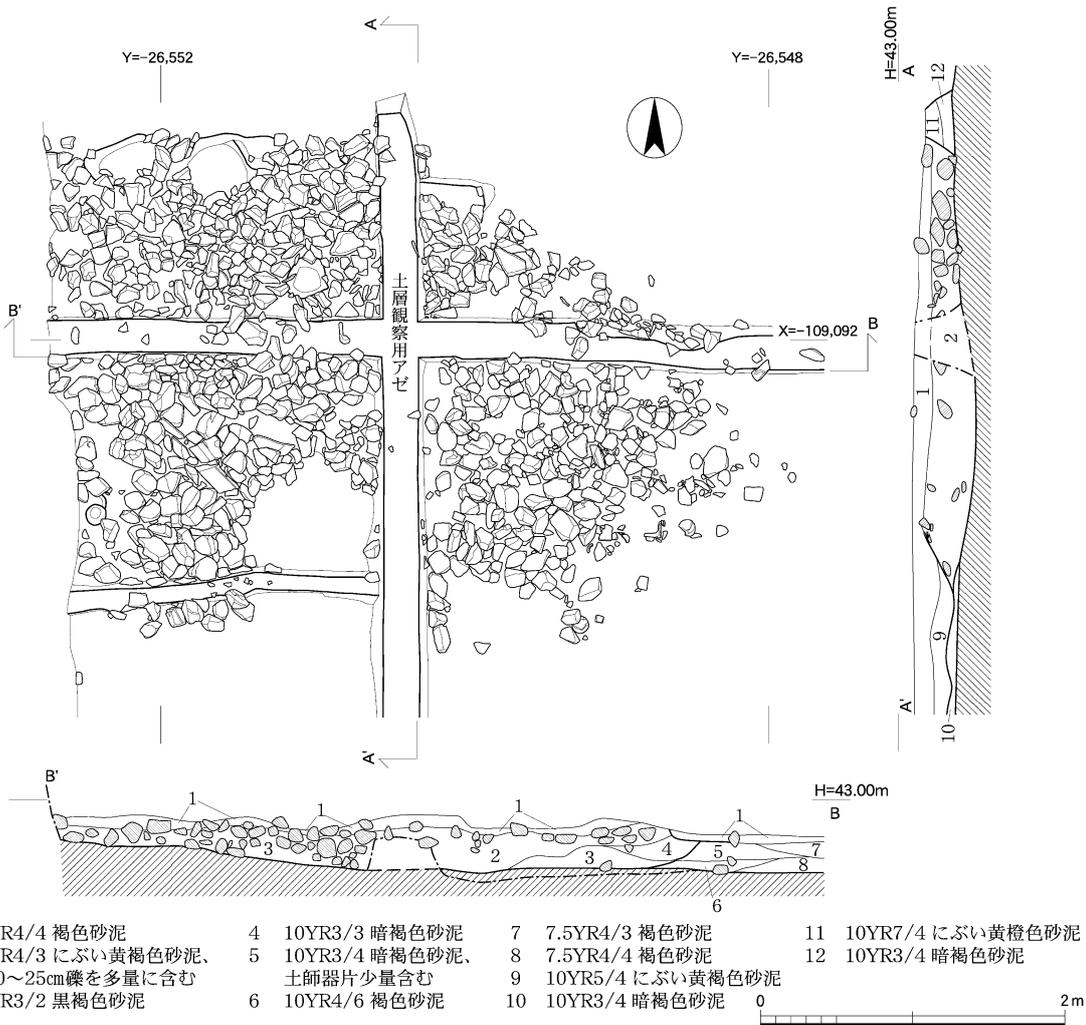
図26 溝3-150断面図(1:40)

2~2.4mで、深さ0.6~0.7mの底面の幅広い断面U字形である。南辺部分は幅1.4m前後、深さ0.3mと浅いU字形である。先の溝3-149と異なって、底面の標高は南辺の西側で42.30m、南辺と東辺の交点辺りで41.70m、東辺の底面はほぼ平坦で標高41.70~41.60mで、西から東

南へ伸びず、立ち上がり、西へ水を流すように作られていたと考えられる。底部近くの堆積層には流水による堆積(ラミナ)がみられ、水路として機能していたことがわかる。したがって、この溝の東辺は城北街道の西側溝であるが、西へ折られて北西部を囲い込むような区画施設であったとみられる。

上部の堆積は廃絶後、後世に埋められたものである。

溝3-312(図25) 先述の溝3-149のコーナー部の約1m南から調査区の東端に沿うように南へ伸びて、座標X=-109,117辺りで直角に西に折れ曲がる溝である。溝3-149と同様に東辺部分は城北街道の西側溝にあたる。南辺の西の延長部分は攪乱によって、失われている。東辺部分は幅



- | | | | |
|--|------------------------------|--------------------|---------------------|
| 1 10YR4/4 褐色砂泥 | 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 7 7.5YR4/3 褐色砂泥 | 11 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥 |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、
φ10~25cm礫を多量に含む | 5 10YR3/4 暗褐色砂泥、
土師器片少量含む | 8 7.5YR4/4 褐色砂泥 | 12 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 3 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 6 10YR4/6 褐色砂泥 | 9 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | |
| | | 10 10YR3/4 暗褐色砂泥 | |

図27 集石遺構3-316実測図(1:50)

へ水が流れていたと考えられる。東辺の底部には粘質土が堆積しており、滞水していたことがわかる。

溝 3-9 南部で検出した東西方向の溝である。幅 1.7 m で、深さは北側が 0.3 m と一段浅く、南側が 0.5 m と深くなっている。北肩に接して東西方向の柱穴列 3-b を検出した。柱間は 1 m 前後である。この北 1.8 m には、対応すると考えられる柱穴列が並行している。北側に 2 条の柱穴列を伴う溝と考えられる。

溝 3-150 (図 26) 北半部で検出した溝である。北端中央から南へ延び、やや西へ逸れながら、 $X=-109,100$ 辺りで直角に折れ曲り、西へ延びる。深さ 0.4 m 前後の断面 U 字形で、底面の標高は東辺の北端で 42.70 m、東辺と南辺の屈曲部で 42.30 m、南辺の西端で 42.30 m、北から南、そして西へ水を流していた。途中、 $X=-109,096$ 付近の溝内で長径 0.2 m 前後の礫を 5・6 石まとまって検出した。流水を調節するために用いられた施設と考えられる。先述の溝 3-149 の埋没後に掘削されており、室町時代後半以降の耕作に伴う溝と考えられる。

集石遺構 3-316 (図 27) 北半の西壁寄りで東西 4 m 以上、南北 3.3 m、深さ 0.5 m 前後土坑を検出した。土坑内には多量の礫を検出した。礫は長径 0.2 ~ 0.3 m の砂岩やチャート亜角礫が主体である。規則的に並んだり、積み重ねられた痕跡もなく、中には少量ながら加工痕を残すものがあることなどから、不要な礫の廃棄坑であったとみられる。土師器や須恵器、丸瓦・平瓦なども混在して出土した。

土坑 3-286 北半東寄り、溝 3-149 のコーナー部分北西部で検出した、東西 4 m、南北 6.5 m の大型の土坑である。深さは 0.5 m 前後で、土坑の中心に向かってなだらかに下がっている。土師器皿類を中心とした多量の土器類を含む厚さ 0.05 m 程度の堆積層を 2 ~ 3 層確認した。使用後に不要となった土器類の廃棄坑と考えられる。なお、土坑の北・東・南辺に小柱穴による長さ 4 m 前後の柱列をそれぞれ 1 条検出した。廃棄坑である本土坑に対する目隠し的な機能があったのではないかと推測される。

土坑 3-2 南半で検出した、東西 2.5 m、南北 5.5 m の大型土坑である。深さは 0.5 m 前後で、土坑の中心に向かってなだらかに下がっている。底部より 0.2 m ほど埋まった段階で、土師器皿類を中心とした多量の土器類の廃棄が行われ、厚さ 0.05 m 前後堆積する。土坑 3-286 と同様に土器類の廃棄坑と考えられる。

土坑 3-913 (図 28) 北半部、土坑 3-286 完掘後に南東肩部で検出した。東西 1.5 m、南北 2.1 m の楕円形掘形、深さは 0.7 m である。形状や既往の調査例などから土壙墓と考えられる。底部中央の西寄りに長径 0.7 m 大の礫を据え、周辺に長径 0.2 ~ 0.3 m 大の礫数個と長径 0.1 m 前後の小礫を多数入れる。

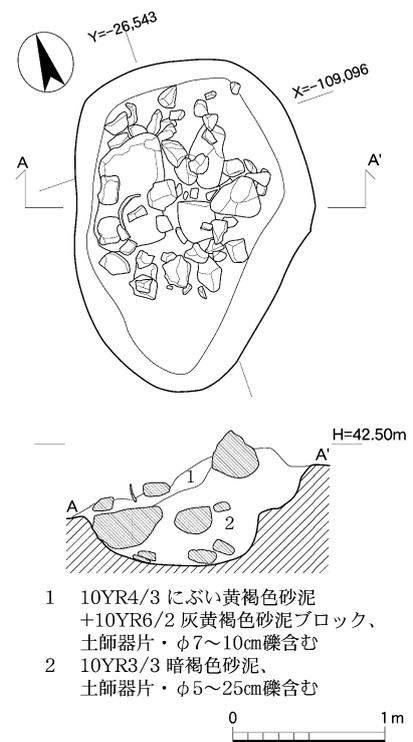


図 28 土坑 3-913 実測図 (1 : 50)

2) 第2面 (図版4)

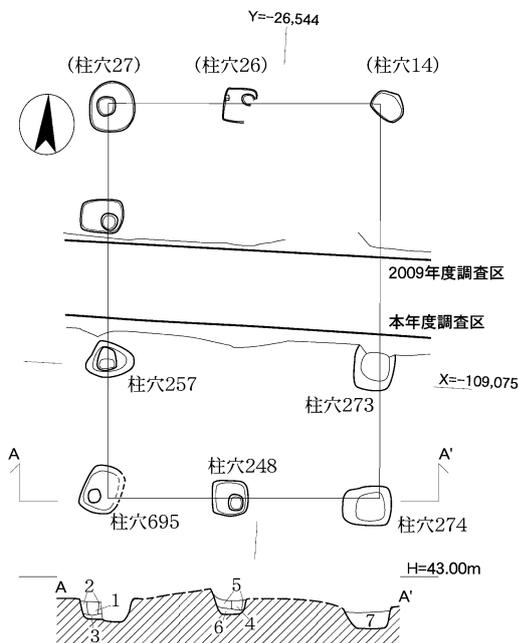
第2面は、地山上面で検出した平安時代の遺構である。検出した遺構には掘立柱建物4棟、井戸3基、溝、土坑、土壇墓などがある。前期から後期までのものがあり、中期のものが主体である。

掘立柱建物は4棟を確認した。おおむね4棟とも中期に属する。

建物3-1 (図29) 北部北端で検出した掘立柱建物である。北側で行った2009年度の調査29で検出した建物1の南半部に相当する。東西2間(3.5m)、南北3間(5.2m)の南北棟の建物と判明した。柱穴はいずれも一辺0.5m前後の隅丸方形の掘形で、柱間は1.7m前後、柱痕跡は直径0.2mの円形である。建物の方位は座標北に対して約3.5°西へ振れている。

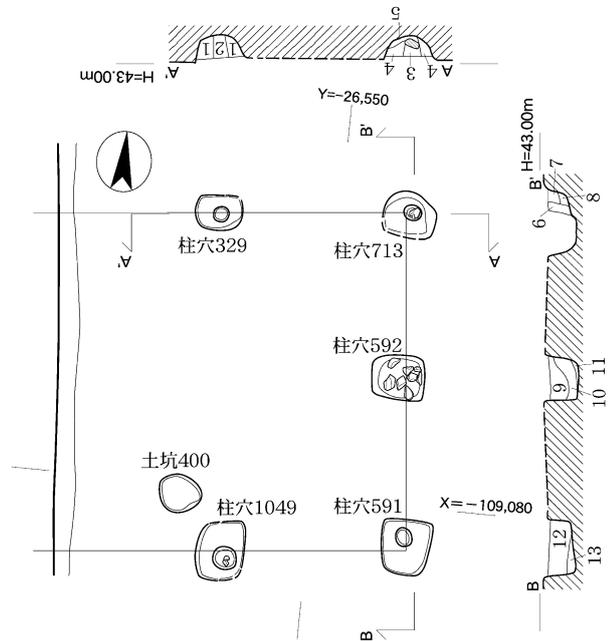
建物3-2 (図30) 北半西寄りで検出した掘立柱建物である。南北2間(4.5m)、東西1間(2.4m)以上の東西棟の建物、西は調査区外へ延びている。柱穴は一辺0.7m前後の隅丸方形の掘形で、柱痕跡は径0.25m、柱間は東西が2.4m、南北が2.2mと本調査で検出した他の掘立柱建物と比べて、規模が大きい。建物の南辺に土師器の小型甕を埋納した土坑3-400があり、本建物に関連する地鎮遺構と考えられる。

建物3-3 (図31) 北半西寄りで検出した掘立柱建物である。南北2間(3.7m)、南北1間(1.85m)以上の東西棟の建物と考えられ、調査区外西へ延びる。柱穴はいずれも一辺0.5m前後の隅丸方形の掘形で、柱痕跡は円形で、径0.2mである。建物の方位は座標北に対して約5°西へ振れる。



- 1 10YR4/4 褐色砂泥
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 7 10YR3/4 暗褐色砂泥

図29 建物3-1実測図(1:100)



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 2 10YR4/4 褐色砂泥
- 3 10YR2/2 黒褐色砂泥
- 4 7.5YR3/4 暗褐色砂泥
- 5 10YR4/4 褐色砂泥
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 7 10YR2/2 黒褐色砂泥
- 8 10YR4/4 褐色砂泥
- 9 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 11 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 13 10YR3/4 暗褐色砂泥

図30 建物3-2実測図(1:100)

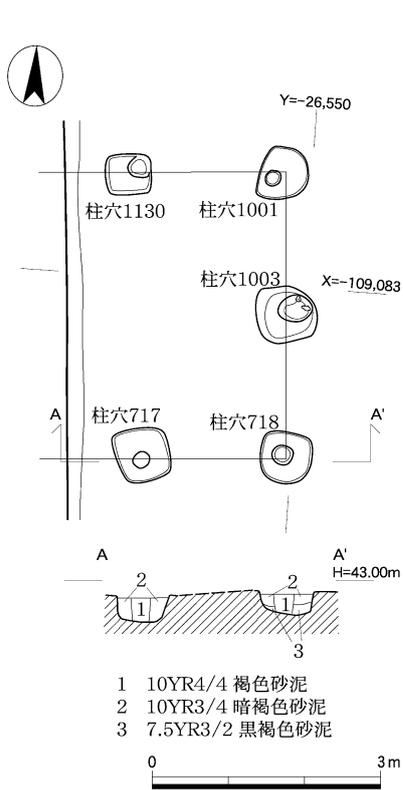
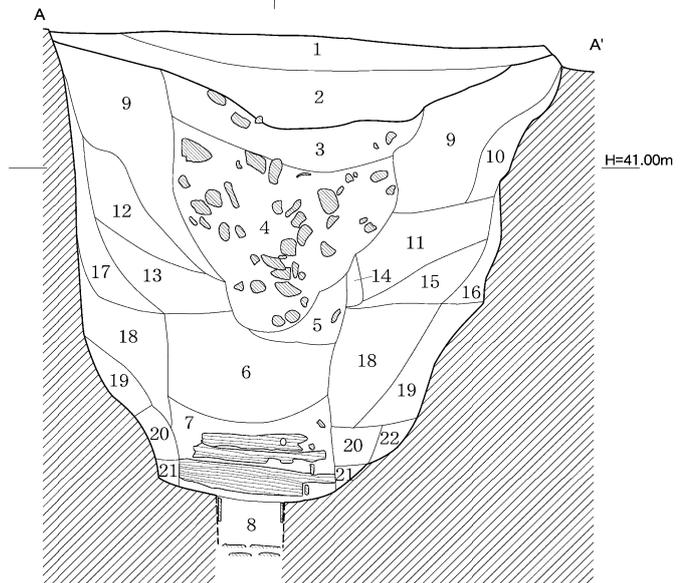
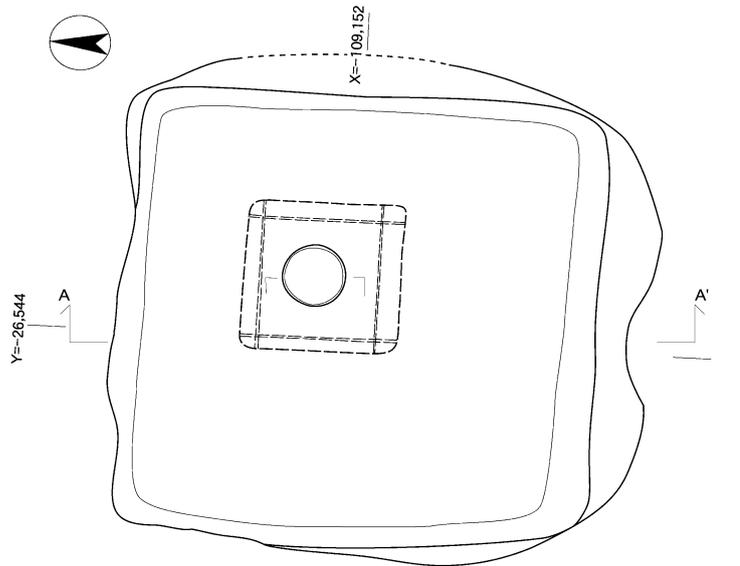


図 31 建物 3- 3実測図 (1 : 100)



- 1 10YR3/4 暗褐色泥砂、φ5cm以下の小礫まばら・土器片多く含む (中世埋土)
- 2 10YR4/4 褐色泥砂、φ10cm以下の礫まばら・土器小片少量含む
- 3 10YR3/3 暗褐色泥砂、φ10~20cm礫含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ20cm前後の礫多量・土器まばらに含む
- 5 10YR4/4 褐色砂泥
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 7 10YR4/1 褐灰色泥土
- 8 5Y4/1 灰色粘質土
- 9 10YR4/4 褐色砂泥、10YR5/6 黄褐色砂泥含む、土師器小片・φ5cm以下小礫~粗砂多く含む
- 10 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ5cm以下小礫~粗砂多く含む
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ5cm以下小礫~粗砂多く含む
- 12 10YR4/4 褐色砂泥、10YR5/6 黄褐色砂泥含む、土師器小片・φ5cm以下~粗砂多く含む
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ5cm以下小礫~粗砂多く含む
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 15 10YR4/4 褐色砂泥、10YR5/6 黄褐色砂泥含む、土師器小片・φ5cm以下小礫~粗砂多く含む (掘形埋土)
- 16 7.5YR3/3 暗褐色泥土、粗砂礫含む
- 17 7.5YR4/3 褐色泥土、粗砂礫含む
- 18 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 19 7.5YR3/3 暗褐色泥土
- 20 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、やや粘質
- 21 10YR3/2 黒褐色泥土
- 22 10YR5/1 褐灰色砂泥、φ7cmの礫含む

図 33 井戸 3- 3実測図 (1 : 50)

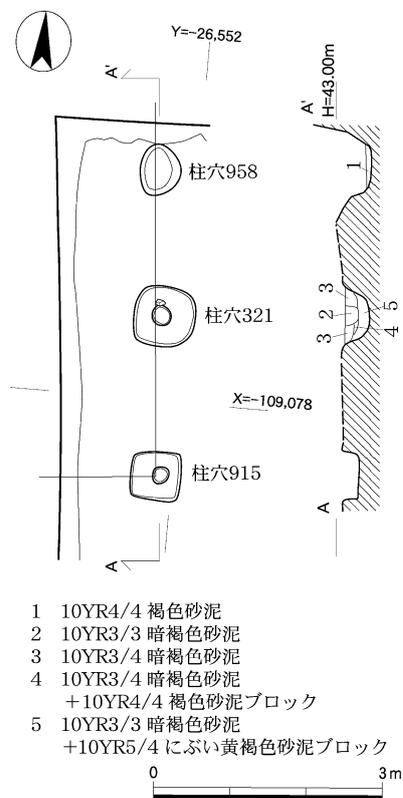


図 32 建物 3- 4実測図 (1 : 100)

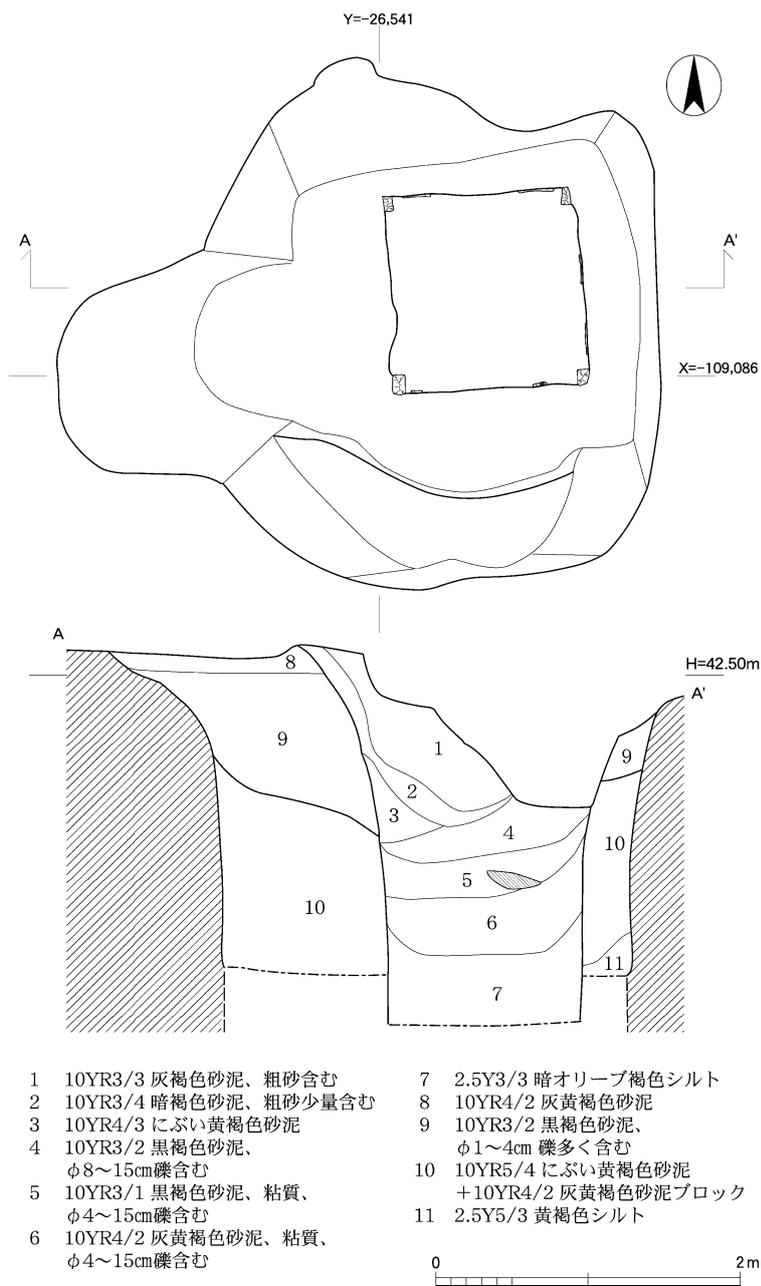


図34 井戸3-309実測図(1:50)

が生じているが、トーンで示した範囲が掘形と考えられる。一辺3mの方形の掘形で、井筒部分は一辺1m前後の方形であったと想定される。井筒の井戸枠は廃絶時に撤去されて礫を多く含んだ土で埋められており、構造は不明である。掘形は湧水層とみられる淡灰緑色の砂礫層に達する約3mの深さまで掘り下げられている。底面のやや北東寄りを直径0.4m、深さ0.5m掘りくぼめ、底に長径0.1m前後の扁平な石を2段に重ねて入れて、上部には曲物を据え、水溜めを設けている。さらに長さ0.9m、幅0.2mの板材を井桁に2段積んで水溜め上部の土留めとしている。水溜め部の下層、扁平な石の上面で木製品(図55-木1)が出土した。

井戸3-309(図34) 北半東寄りで見出した。上部は南北方向の溝3-149に柵平を受ける。掘形は一辺3mの隅丸方形で、西辺は1.2~1.4mの幅で西へ1mほど突出する。上部より井筒部分

建物3-4(図32) 北半北西端で見出した掘立柱建物である。東西2間(4.0m)の柱穴列であるが、北西へ展開する建物の一部と考える。柱穴は一辺0.7m前後の隅丸方形の掘形で、柱痕跡は直径0.2m前後である。建物の方位は座標北に対して約5°西へ振れる。建物3-2と重複するが、先後関係は不明である。

井戸は3基見出した。いずれも調査区の東側、現・城北街道に沿った位置で見出している。井戸3-3が前期から中期、井戸3-313・309が中期に属する。

井戸3-3(図33) 南半で見出した。深さ2mまでは人力で掘削を行ったが、以下については記録をとりながら重機によって掘り下げ、完掘した。図示した断面図は、当初設定したセクションの位置と実際の井筒が北東に偏っていたために、上半と下半の図面を反転合成したものである。このため図面に不整合

と掘形埋土の境界が明瞭で、一辺 1.3 m の方形の井筒がやや北西寄りに設けられる。深さ 2 m ほど掘り下げた段階で井戸枠の木材が遺存していた。四隅に断面方形の柱を据え、横棧を施す。一辺に幅 0.3 m 前後の縦板を 3 ~ 4 枚並べ、井戸側としている。以下については、作業の安全上から人力での掘削は危険と判断し、重機によって掘り下げ、底面の標高はおよそ 39.70 m であることが判明したが、底部の詳細な構造などについては十分確認することができなかった。

井戸 3-313 (図 35) 北半中央東寄りで検出した。南側の上層は溝 3-140 に切り込まれる。掘形は東西 4 m、南北 4.5 m と南北に長い円形である。上面から 1.5 m までは廃絶時に壊され埋められており、1.5 m 以下では、掘形と井筒部分が確認できた。井筒部分は東西 1.9 m、南北 1.5 m の方形で、掘形のほぼ中央に設置されている。四隅に丸太様の円形の柱を立て、各辺には幅 0.3 m の縦板を並べ、横

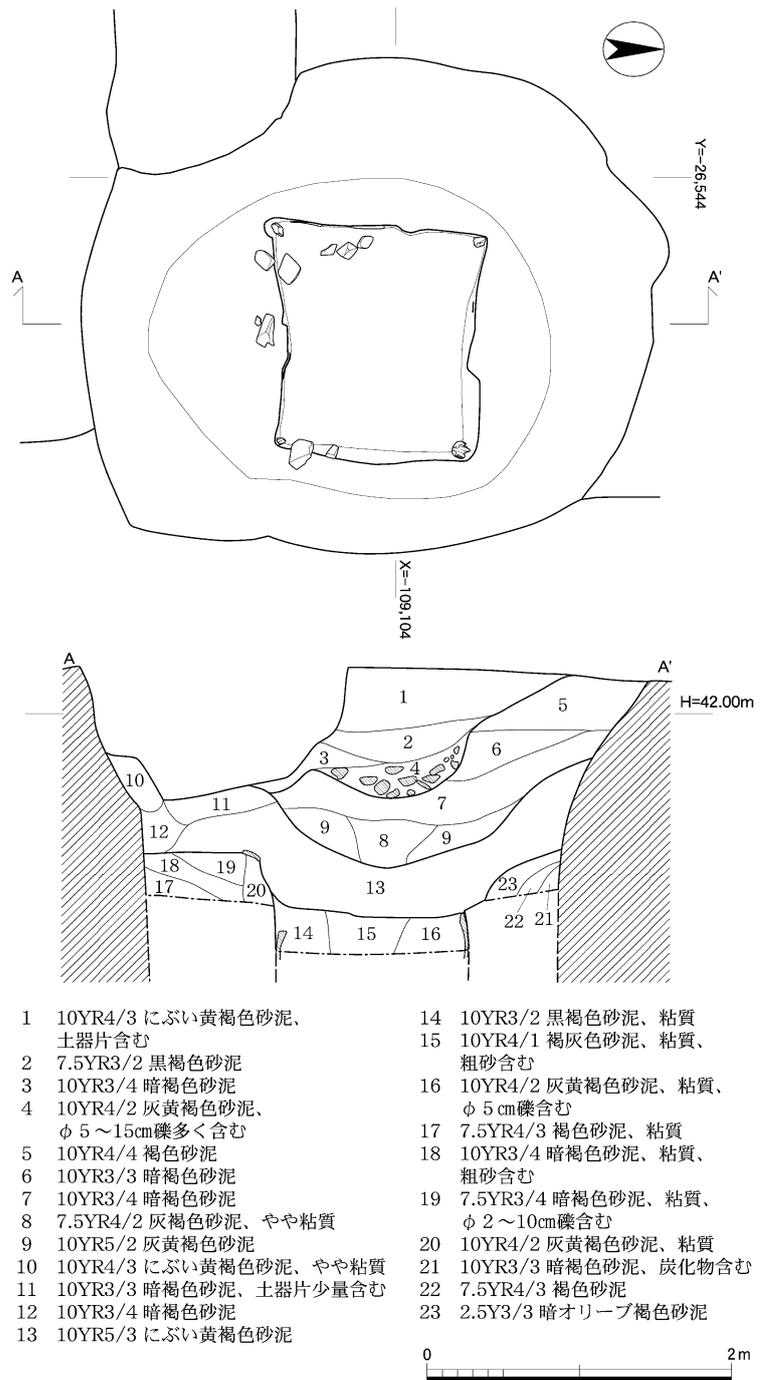


図 35 井戸 3-313 実測図 (1 : 50)

棧を施す形式である。井戸 3-309 と同様に、以下の掘削は重機によって行い、底面の標高は 39.50 m 前後であることを確認した。同じく、底部の構造などについては十分確認することができなかった。

溝は 3 条検出した。いずれも東西方向の溝である。

溝 3-140 下層 (図 23) 長さ 8.2 m の東西方向に長い溝状遺構である、中央部の幅が 1.3 m、東西両側では幅 1.7 m とやや太くなる。底部は平面の形状に対応するように、中央部が深さ 0.6 m、東西両側の最深部では 1 m となる。先述したように、後世に再利用される (溝 3-140 上層) が、当初は中期に掘削されたと考えられる。用途は不明である。

溝 3-523 北半東寄りで検出した東西溝である。後世の遺構に削られて、残存状況は良くないが、幅 1.3 m、深さ 0.1 m、断面が扁平な U 字形の溝である。東西 3 m 分を検出した。前期の土器類がまとまって出土した。

溝 3-824 (図 36) 北半北部で検出した。幅は 1.8 m 前後、東半部は土坑 3-685 や井戸 3-309 に切り込まれるが、東端は井戸 3-309 により削平を受けた辺りでおさまる様である。西は調査区外に延びる。土坑 3-685 の西側、約 7 m 分は深さ 0.5 m とやや深くなっている。この部分の西 3 m の範囲では北肩部分に焼土塊や炭化物を多く含む砂泥層 (図 36 の 2 層) で埋められていた。北側から何らかの焼土を伴う施設の廃棄行為があったと考えられる。

主要な土坑は 4 基あり、土壙墓と考えられるものも含めた。

土坑 3-400 (図 37) 北半北西部の建物 3-2 の範囲内で検出した。直径 0.5 m 円形、深さ 0.55 m の掘形、底面から 0.25 m までを長径 0.1 m 前後のチャートを中心とした垂角礫で埋め、その上に小型の土師器甕を正位に据える土器埋納遺構である。検出位置から、建物 3-2 に伴う地鎮に関する遺構であると考えられる。正位に据えた土師器甕の口縁に蓋は検出できなかった。土師器甕の内部には砂泥が充満しており、埋設時の内容物の有無を確認するため、すべての土壌を水洗し

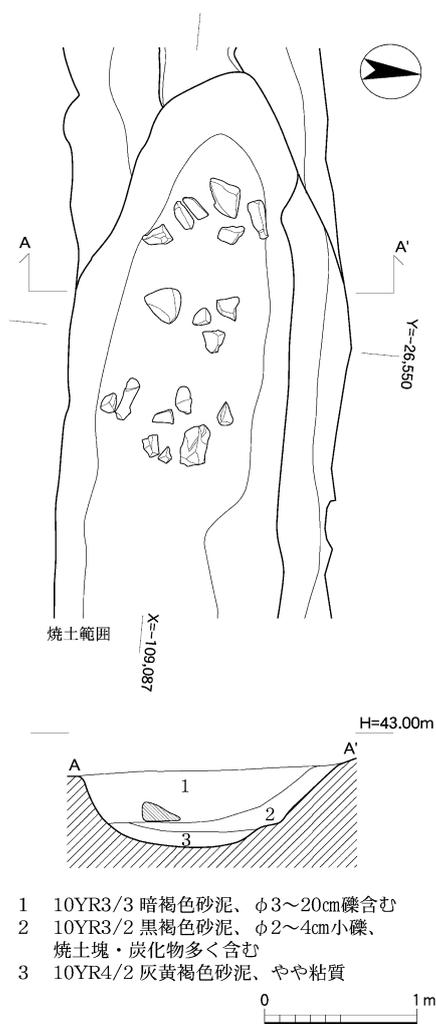


図 36 溝 3-824 西半実測図 (1 : 50)

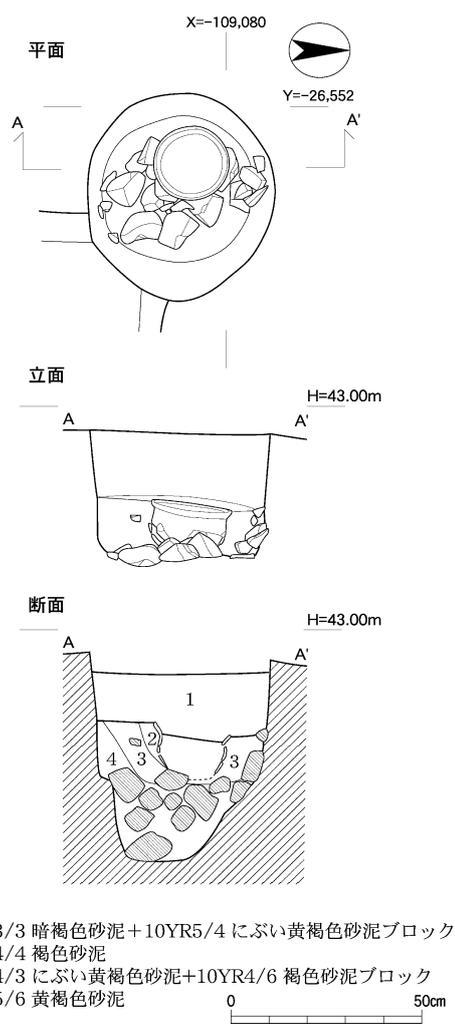
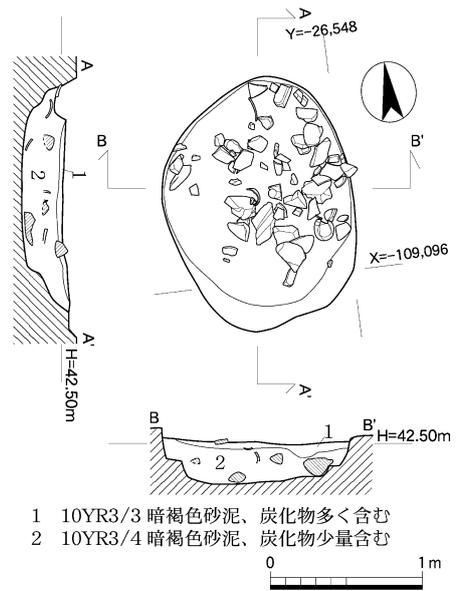


図 37 土坑 3-400 実測図 (1 : 20)

フローテーション法と篩選別法を併用して内容物の検出に努めたが、全く検出されなかった。

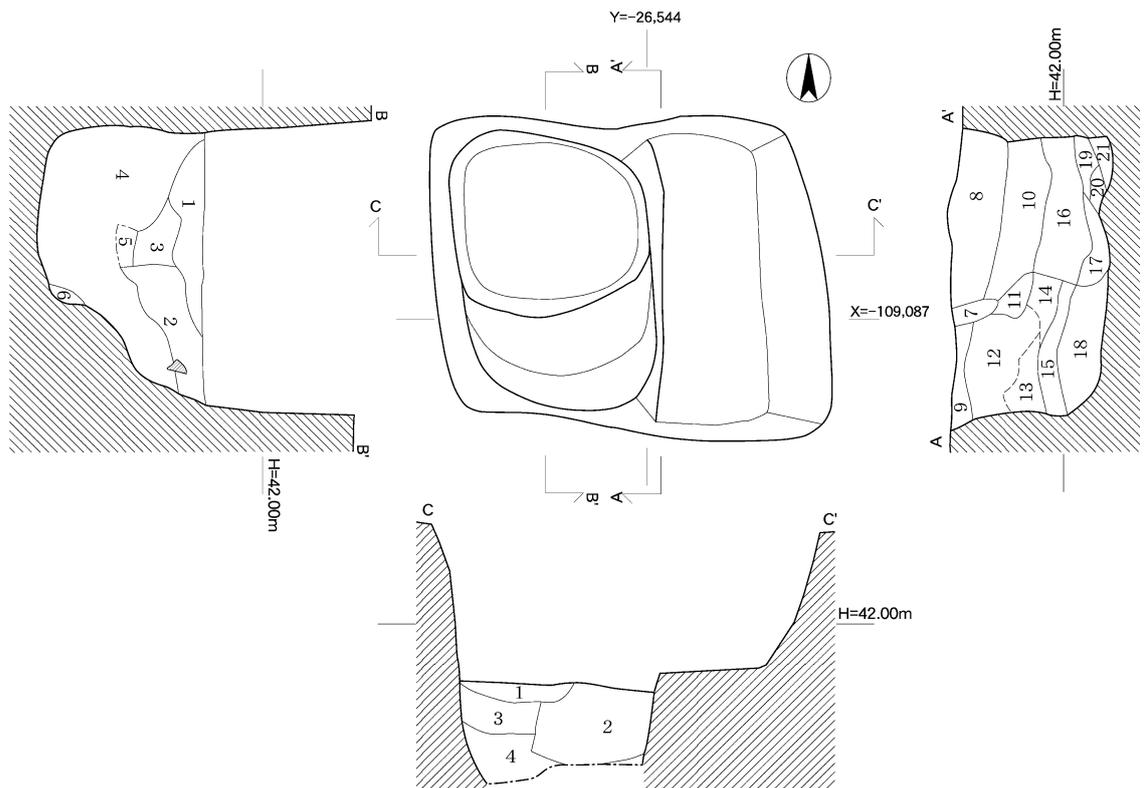
土坑 3-538 (図 38) 北半中央で検出した、南北 1.7 m、東西 1.2 m、深さ 0.3 m の楕円形掘形の土坑である。長さ 0.4 m 前後のチャート、砂岩などの垂角礫と、土師器皿や白磁椀、瓦器皿、灰釉陶器壺、須恵器甕などの破片が混在する。石を埋土とする土壙墓の可能性が考えられる。

土坑 3-685 (図 39) 北半北寄りで検出した。東西 2.6 m、南北 2.0 m の隅丸方形の土坑である。深さ 1 m まで掘削した後、西半分をさらに深く掘削する。徐々に西半の北部分のみを掘り下げ、深さ 2.1 m に達する。形態が特殊な土坑であるが、北西部の最深部は湧水の礫層に達していることから、素掘りの井戸と考えられる。



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭化物多く含む
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭化物少量含む

図 38 土坑 3-538 実測図 (1 : 50)



- | | | |
|---|--|---------------------------------------|
| 1 10YR4/6 褐色砂泥、粘質 | 9 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 | 17 10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥
+10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、
φ2~8cmの礫多く含む | 10 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 18 10YR5/6 黄褐色砂泥、粗砂含む |
| 3 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥、
炭化物・φ2~4cmの礫多く含む | 11 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 | 19 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥
+10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
+10YR4/4 褐色砂泥の混成土 | 12 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥 | 20 10YR2/3 黒褐色砂泥 |
| 5 10YR3/4 暗褐色シルト | 13 10YR5/6 黄褐色砂泥 | 21 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 6 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 | 14 10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥 | |
| 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、
粗砂含む | |
| 8 10YR6/8 明黄褐色砂泥 | 16 10YR3/3 暗褐色砂泥
+10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、
φ5~10cm礫少量含む | |

図 39 土坑 3-685 実測図 (1 : 50)

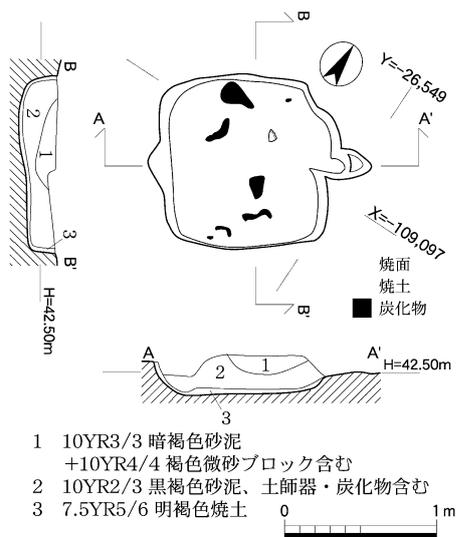


図 40 土坑 3-1009 実測図 (1 : 50)

土坑 3-1009 (図 40) 北半中央西寄りで検出した。一辺 1.0 ~ 1.1 m の隅丸方形、深さは 0.25 m、底面は平坦である。北東辺と南西辺の中央が張り出す。座標北に対しておおよそ 30° 西に振れる。底面と四周の壁面がよく焼けており、何らかのものを焼成したと思われる。

3) 第 3 面

第 3 面は地山上面で検出した飛鳥時代以前の遺構である。竪穴住居の他、不定形な土坑が数基と、予想していたよりも遺構数および、明確な遺構が少なかった。

竪穴住居 3-1139 (図 41) 南半北寄りで検出した。

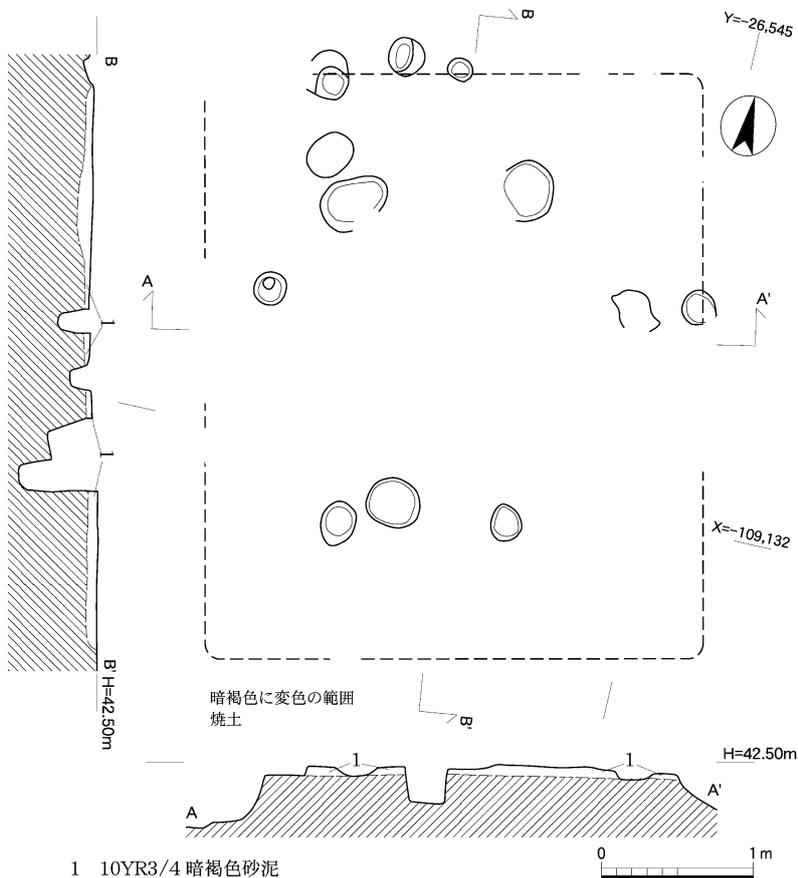


図 41 竪穴住居 3-1139 実測図 (1 : 50)

壁溝はなく、遺構としての掘込みもすでに失われて、東辺中央に竈の痕跡とみられる焼土面が残存しており、平面図に示したトーンの範囲が周辺に比べやや汚れた暗褐色に変色していた。この範囲を南北 3.9 m、東西 3.3 m の方形の竪穴住居の残欠と判断した。支柱穴は南北に並ぶ 2 基か、ほぼ並行する西側の 2 基を合わせた 4 基と想定している。出土遺物はなかった。

この他に、北半北部で検出した土坑群があるが、いずれも輪郭が不定形で、掘込みも不明瞭な凹み状の遺構である。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

出土した遺物は整理箱で130箱、遺物整理・報告書作成段階で抽出し、土器については接合などを行ったため、最終的には表3に示したように13箱増えて、総計143箱となった。

1区の出土遺物は整理箱に19箱ある。遺物の時期は飛鳥時代から江戸時代までで、時期別にみると鎌倉時代から室町時代のものが多くを占め、次いで飛鳥時代のものがある。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがあるが、土器類が最も多く、次いで瓦類が多い。

2区の出土遺物は整理箱で6箱ある。遺物の時期は鎌倉時代から江戸時代までで、時期別にみると鎌倉時代から室町時代のものが多くを占める。遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などがあるが、土器類が最も多い。

3区の出土遺物は整理箱で118箱である。遺物の時期は飛鳥時代から江戸時代までで、時期別にみると平安時代が多くを占め、次いで鎌倉時代から室町時代のものが多くみられる。遺物には

表3 遺物概要表

調査区	時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
1区	飛鳥時代	土師器、須恵器、石製品		土師器8点、須恵器4点、石製品2点		
	鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦質土器、軒瓦、磚		土師器12点、焼締陶器2点、瓦質土器1点、軒丸瓦1点、磚1点		
	江戸時代	土師器、施釉陶器				
	合 計		19箱	31点 (2箱)	17箱	0箱
2区	鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器		土師器3点、瓦器2点		
	江戸時代	土師器、施釉陶器				
	合 計		6箱	5点 (1箱)	5箱	0箱
3区	飛鳥時代 以前	土師器、須恵器、瓦、石製品		土師器1点、須恵器11点、軒丸瓦1点、石製品2点		
	奈良時代	金属製品		小型銅鏡1点		
	平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦器、瓦、石製品、土製品、金属製品、木製品		土師器28点、須恵器9点、緑釉陶器6点、灰釉陶器3点、黒色土器4点、輸入白磁4点、瓦器5点、軒丸瓦10点、軒平瓦3点、土製品1点、金属製品1点、木製品1点		
	鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦質土器、瓦、石製品、土製品、金属製品、木製品		土師器7点、瓦器2点、輸入白磁2点、瓦質土器1点、軒丸瓦1点、石製品6点、土製品2点、金属製品1点		
	合 計		118箱	113点 (10箱)	108箱	0箱
総 計			143箱	149点 (13箱)	130箱	0箱

※ コンテナ箱数の総計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より13箱多くなっている。

土器類、瓦類、金属製品、石製品、木製品などがあるが、土器類が最も多く、次いで瓦類が多い。

以下、各調査区ごとに主要な出土遺物について概説する。

(2) 1区の遺物

1) 土器類 (図版 17、図 42・43)

土器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器などがある。以下では、飛鳥時代と鎌倉時代から室町時代の主要な出土土器について概述する。

また、飛鳥時代の土器については当該期以降の遺構から出土した土器も掲載している。

飛鳥時代の土器類 (図版 17、図 42)

土坑 1-114 (図版 17、図 42) 1・2は須恵器である。1は杯身で、口径 10.6 cm、器高 3.3 cm である。底部はヘラ起こしの後、軽く回転ヘラケズリし、内外面は回転ナデにより調整している。

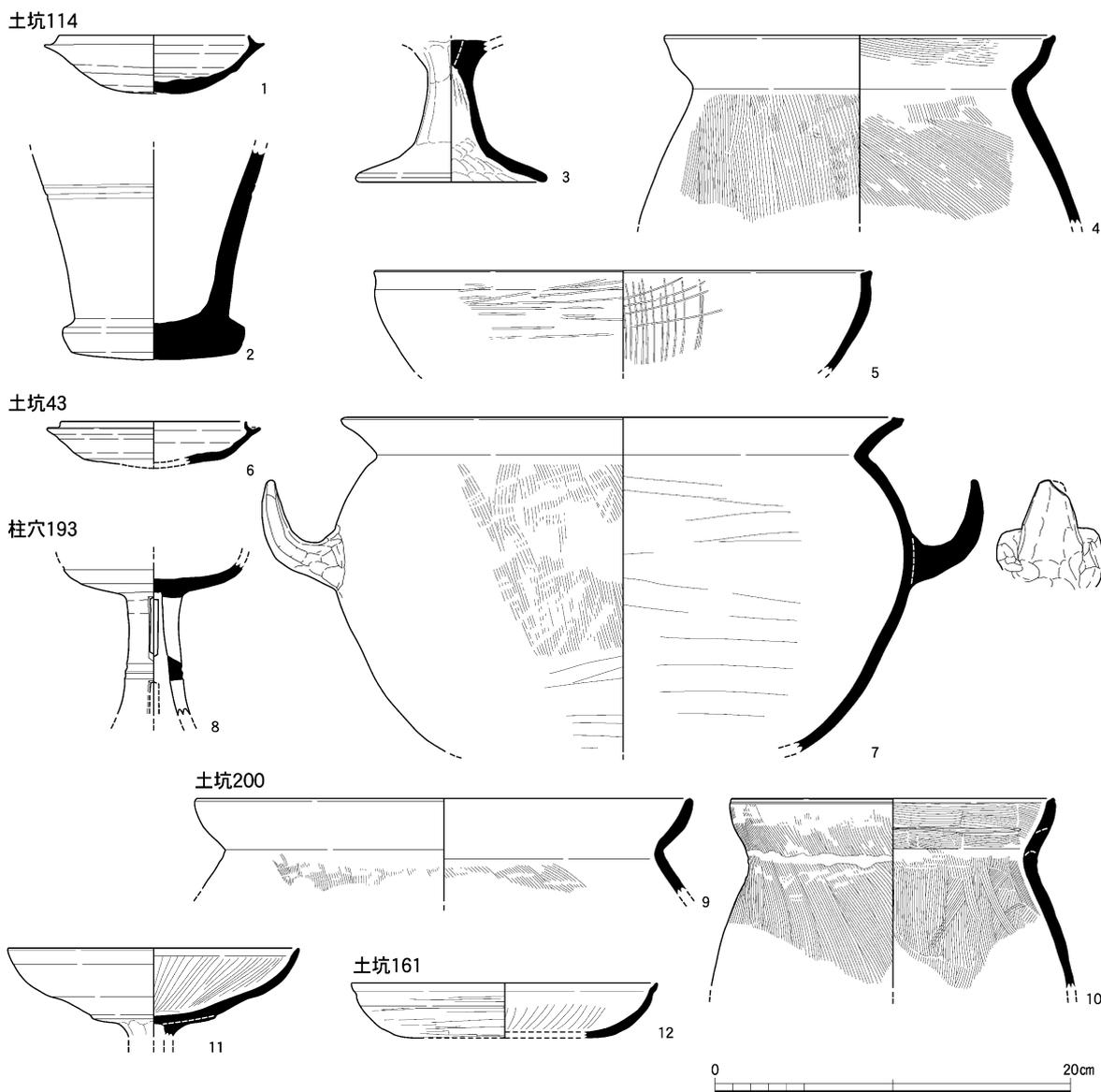


図 42 1区出土土器実測図1 (1:4)

受け部の立ち上がりは低い。7世紀前半から中葉に比定される陶邑古窯址群 TK217 型式¹⁾に属する。2は搦鉢の下半部である。底径 9.2 cm、残存高 11.9 cmである。厚い底部から体部が立ち上がる。底部外面はヘラケズリし、体部はナデにより調整する。

3～5・7は土師器である。3は高杯の脚部と裾部で、杯部が欠損している。脚部内面に絞り目が認められる。外面は磨滅が著しい。4は甕の口縁・体部である。口径 21.8 cm、残存高は 10.7 cmである。頸部は屈曲し、やや内側に内湾する。口縁部は内傾する端面をつくる。体部内外面はハケメにより調整している。5は鉢の口縁部である。口径 27.8 cm、残存高 5.8 cmである。内面に縦方向のヘラミガキ後、横方向にもヘラミガキがみられる。外面には横方向のヘラミガキを施す。口縁端部は内傾した面をもつ。7は鍋である。口径 30.6 cm、残存高 18.9 cmである。球形の胴部に広口が付く、胴部最大径付近に取手を貼り付けている。体部外面はハケメを施す。

土坑 1-43 (図 42) 6は須恵器杯身である。口径 10.8 cm、残存高 2.4 cmである。底部はヘラ起こしの後、軽く回転ヘラケズリし、内外面はナデにより調整している。受け部の立ち上がりは低い。7世紀前半から中葉に比定される陶邑古窯址群 TK217 型式に属する。

柱穴 1-193 (図 42) 8は須恵器高杯の脚部と杯部である。残存高は 8.7 cmである。脚部は長く長方形の透かしが2段2方向にみられる。内外面ともに回転ナデを施す。脚部内面には絞り目が残る。

土坑 1-200 (図版 17、図 42) 9～11は土師器である。9・10は甕である。9は口径 27.7 cmの大型の甕である。内外面ともにハケメにより調整している。10は口径 18 cm、残存高 10.8 cmである。長胴型を呈し、屈曲する頸部はやや内側に内湾する。口縁部は内傾する端面をつくる。体部内外面はハケメにより調整している。11は高杯の杯部である。口径 16.4 cm、残存高 5.0 cmである。椀状の杯部で内面には放射状の暗文を施す。外面はナデで調整している。脚との接合部にはオサエ痕が残る。

土坑 1-161 (図版 17、図 42) 12は土師器杯である。口径 17.2 cm、残存高は 3.1 cmである。丸みをもった器形で、外面はヘラケズリ、内面に放射状暗文を施す。

鎌倉時代から室町時代の土器類 (図版 17、図 43)

井戸 1-335 (図 43) 13は土師器皿である。口径 9.2 cm、器高 1.8 cmである。底部から斜め上方に緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。鎌倉時代後半の京都VI期中から新段階²⁾に属する。

土坑 1-230 (図 43) 14～16は土師器皿である。14は口径 7.8 cm、器高 1.6 cmの小型皿で、体部外面下半にはオサエによる指圧痕が明瞭に残る。15・16は口径 9.6 cm・9.8 cm、器高は 1.6 cm・2.0 cmの中型皿である。いずれも口縁部は斜め上方に開く。18は歪みが大きい。いずれも体部外面下半はオサエ調整である。室町時代後半の京都IX期中から新段階に属する。

土坑 1-234 (図版 17、図 43) 17～22は土師器皿である。17～20は口径 6.7～7.2 cm、器高 1.6～1.8 cmの小型皿で、内面中央部を突起させた、いわゆるへそ皿である。17・18は胎土の色調が白色系、19・20は褐色系である。21・22は口径 8.8 cm・9.0 cm、器高は 2.1 cm・1.9 cmの中型皿

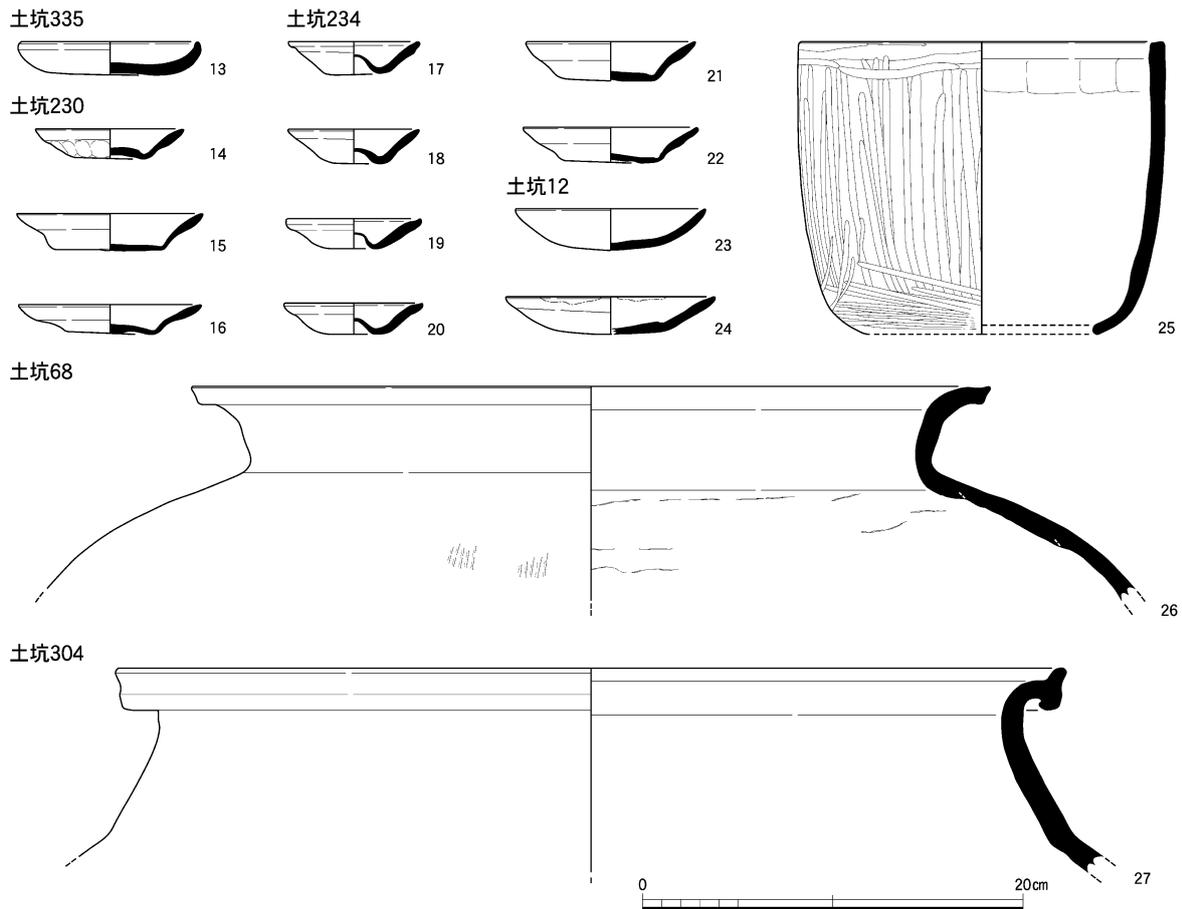


図43 1区出土土器実測図2 (1:4)

である。いずれも体部外面下半はオサエで調整している。室町時代後半の京都IX期新段階に属する。

土坑 1-12 (図版 17、図 43) 23・24 は土師器皿である。23 は口径 9.9 cm、器高 2.2 cm、24 は口径 10.9 cm、器高 2.0 cm のいずれも中型皿である。24 の底部内面には圈線が巡る。また口縁部内外面に油煙が付着している。室町時代末期の京都X期古段階に属する。

25 は瓦質土器鉢である。口径 19.0 cm、残存高 15.5 cm である。底部は平底とみられ、体部は口縁部にかへ直立して延び、口縁端部は水平面をもつ。体部外面はヘラミガキを施す。

土坑 1-68 (図 43) 26 は焼締陶器甕である。口径 42.0 cm、残存高は 11.4 cm である。口縁部は屈曲し端部は角張る。肩部外面にタタキ痕が残る。内面には粘土接合痕がみられる。

土坑 1-304 (図 43) 27 は焼締陶器甕である。口径 49.0 cm の大型品である。残存高は 10.0 cm である。口縁端部は上下に拡張され肥厚する特徴をもつ。常滑産とみられる。

2) 瓦類 (図版 17 図 44)

瓦類には軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼などがある。瓦類全体では丸瓦、平瓦が多い。軒瓦は軒丸瓦が 1 点、また塼が出土している。いずれも第 1 面上面からの出土である。

巴文軒丸瓦 (瓦 1) 右巻きの三巴文である。頭部は離れ、尾部は界線に接する。外区は小粒の珠文が密に巡る。瓦当部裏面の先端に浅い溝を付け、丸瓦を接合する。それらの特徴から鎌倉時

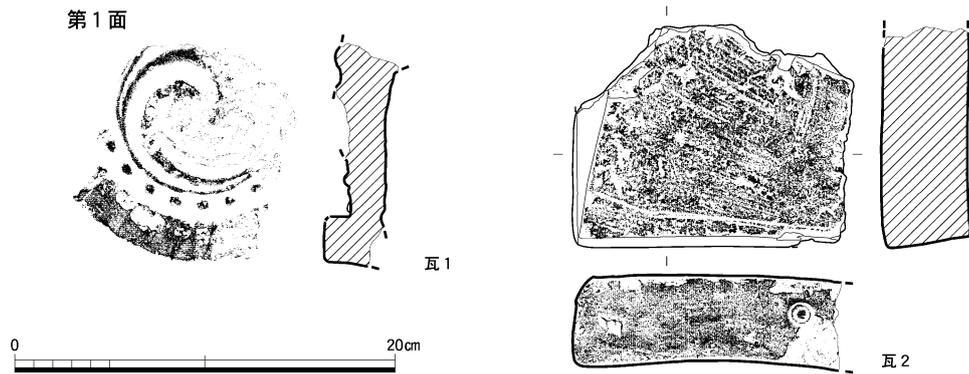


図44 1区出土瓦拓影・実測図（1：4）

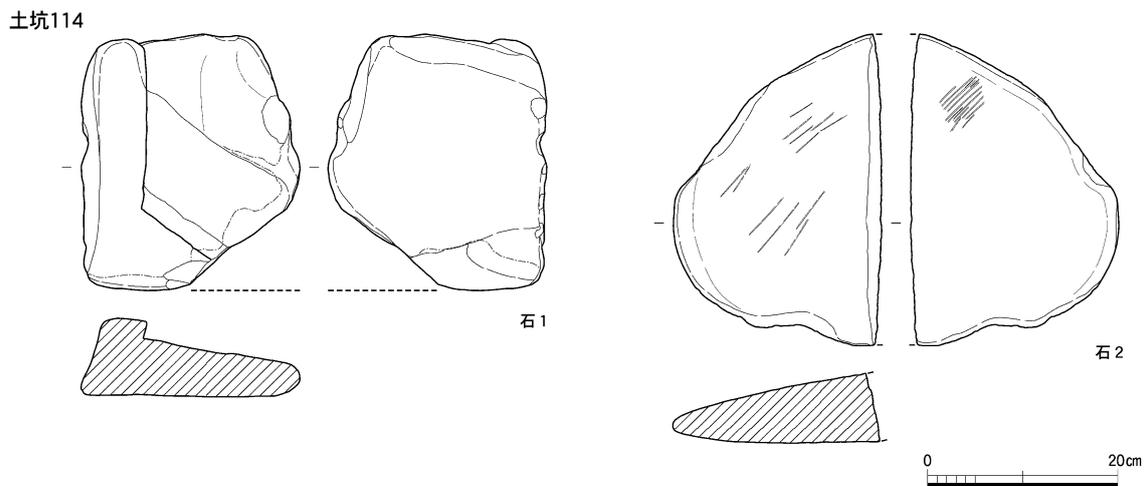


図45 1区出土石製品実測図（1：8）

代から室町時代のものとみられる。

罫（瓦2） 残存長から一辺 14.2 cm 以上の方形で、厚さ 4.7 cm の罫である。胎土は精良で焼成は良好で硬質である。側面に刻印「◎」がみられる。

3) 石製品（図45）

石1・2 石1は長さ 23.0 cm、幅 27.2 cm、厚さ 8.6 cm、重量 5.8 kg である。形状は不定形で片面端は突起しており、平坦部は被熱を受け何らかのものを研磨した擦痕もみられる。下面は平坦面で同様の擦痕もみられる。用途は不明である。砂岩製。石2は叩石である。長さ 22.0 cm、幅 33.0 cm、厚さ 7.4 cm、重量 5.5 kg である。楕円形を半截した形状である。両面とも敲打痕跡が上面に残る。砂岩製。いずれも土坑 1-114 から出土した。

（3）2区の遺物

1) 土器類（図版17、図46）

土器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器などがある。以下では鎌倉時代から室町時代の主要な出土土器について概述する。

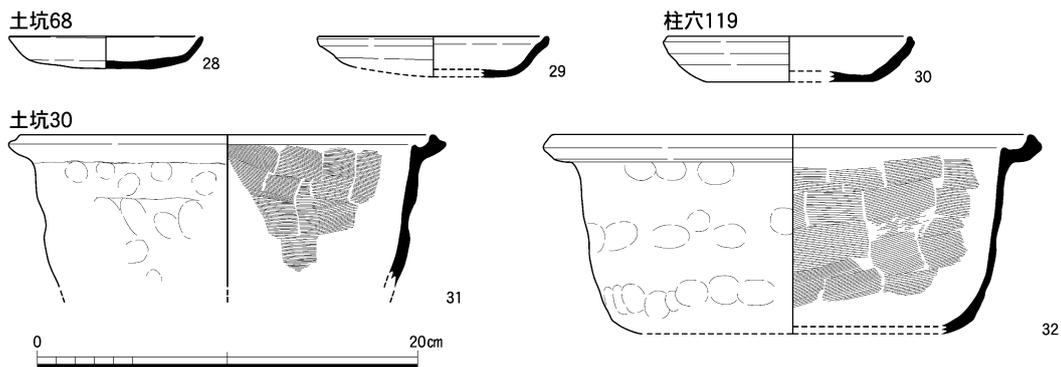


図46 2区出土土器実測図(1:4)

土坑2-68(図版17、図46) 28・29は土師器皿である。28は口径10.1cm、器高1.7cmの中型の皿である。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整を施す。29は口径12.2cm、器高2.15cmの中型の皿である。体部は斜め上方に延び、口縁部はやや屈曲しながら端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整を施す。鎌倉時代後半にあたる京都VI期中から新段階に属する。

柱穴2-119(図46) 30は土師器皿である。口径12.7cm、器高2.4cmの中型の皿である。体部は斜め上方に延び、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整を施す。鎌倉時代後半にあたる京都VI期新段階に属する。

土坑2-30(図版17、図46) 31・32は瓦器鍋である。31は口径25.4cm、残存高10.6cm、32は口径21.8cm、残存高は8.0cmである。受け部はともに「く」の字形を呈する。体部外面はオサエ調整時の指痕跡が残る。内面は丁寧にハケメで調整している。それらの特徴から室町時代前半とみられる。

(4) 3区の遺物

1) 土器類(図版18～20、図47～50)

土器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器などがある。以下に飛鳥時代から室町時代までの主要な土器について概説する。

飛鳥時代の土器類(図版18、図47)

33は土師器杯である。口径10.0cm、器高3.0cmである。丸みをもった器形で、外面上半に密なヘラミガキを施す。内面は磨滅が著しい。7世紀後半代とみられる。土坑3-1057から出土した。34～36は須恵器杯蓋である。34は口径8.9cm、器高3.0cmの小型品である。体部は丸みもち天井部外面は平坦である。口縁端部は直立する。35は口径11.4cm、器高3.3cmの中型品である。天井部外面はヘラケズリで面取りし、ほかは内外面ともにナデを施す。口縁端部はやや外方に延びる。36は天井部が欠損している。口径12.4cm、残存高は2.9cmである。内外面ともに回転ナデを施す。口縁端部はやや尖り気味である。34は土坑3-932、35・36は土坑3-1086から出土した。37～39は須恵器杯身である。37は口径12.4cm、残存高2.9cmである。38は口径12.8cm、

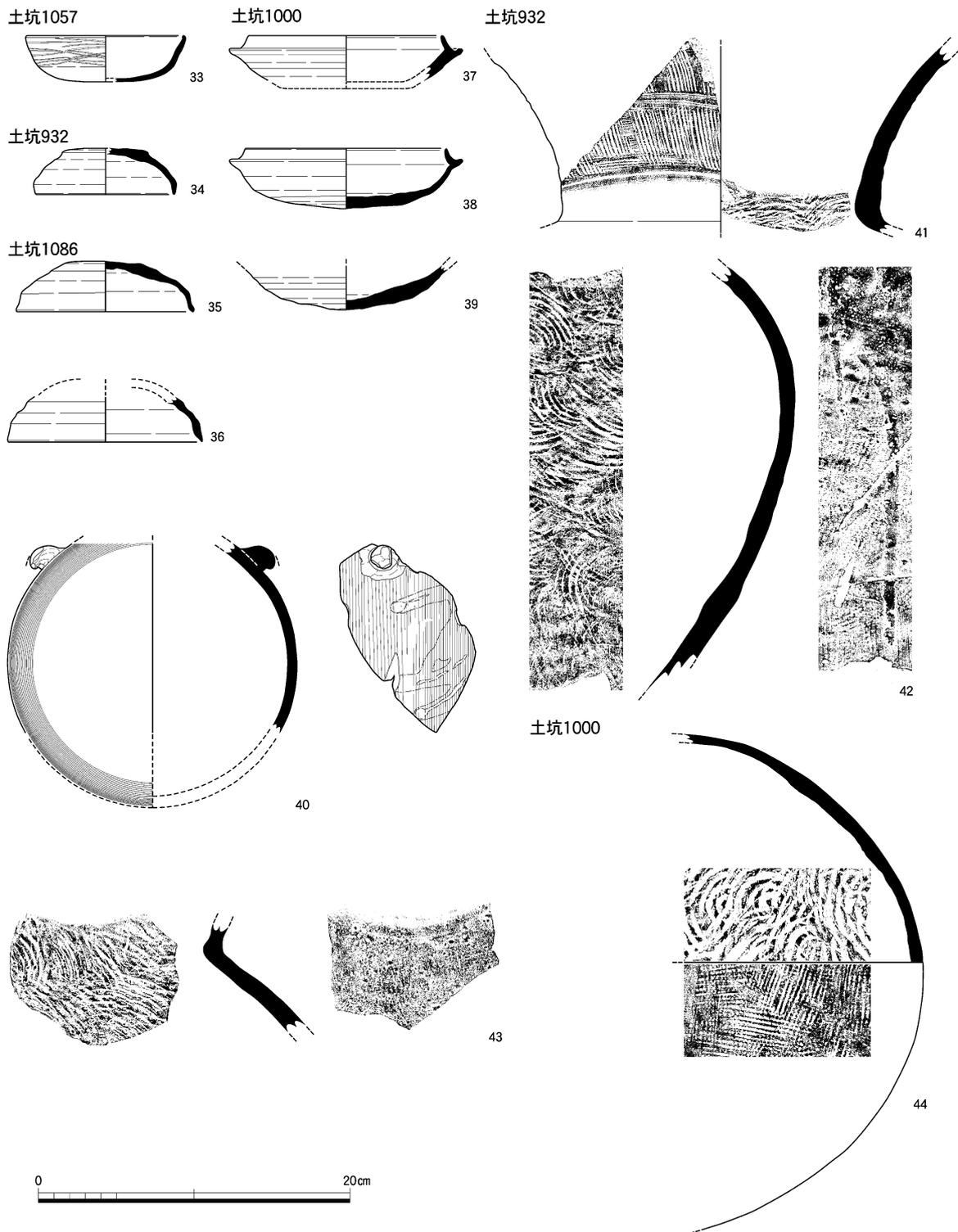


図 47 3区出土土器実測図1 (1 : 4)

器高 3.9 cm で、いずれも口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は受け部先端と同様に丸くおさめる。底部外面はヘラケズリで、ほかは内外面ともにナデ調整を施す。39 は口縁部が欠損しているが、底部外面はヘラケズリを施し、内面は回転ナデで調整している。いずれも 7 世紀前半から中葉に比定される陶呂古窯址群 TK217 型式に属する。いずれも土坑 3-1000 から出土した。

40 は須恵器提瓶の体部上半である。肩部上半に円形突起が左右対称に 1 対付く。内外面ともに

回転ナデを施す。41～43は須恵器甕である。41は甕の頸部で斜め上方に延びる。内面には同心円文の充て具痕跡が残る。外面には縦方向のカキメと一部、ハケメもみられる。横方向の沈線が2条みられ、カキメの単位が分かれる。42は甕の肩部と体部である。内面には同心円文の充て具痕跡がみられ、体部外面にはタタキが施される。肩部外面から体部には緑灰色の自然釉が垂れる。43は甕の肩部である。内面には同心円文の充て具痕跡が残る。外面はタタキを施した後、ナデで調整する。40～43はいずれも土坑3-932から出土した。44は須恵器横瓶の底・体部の破片である。内面には同心円文の充て具痕跡が明瞭に残る。外面は格子状のタタキが施される。土坑3-1000から出土した。

平安時代の土器類（図版18～20、図48・49）

溝3-523（図版18、図48）45～50・52は土師器である。45～48は椀である。45～47は口径12.6～13.6cm、器高3.7cm前後で、いずれも外面をヘラケズリで調整する。48は口径15.2cm、器高4.2cmと、前者に比べやや大型である。外面はヘラケズリで丁寧に調整している。49・50は皿である。49は口径18.0cm、器高2.3cmである。口縁端部は斜め上方に延びる。50は口径18.3cm、器高1.7cmである。口縁端部は丸くおさめる。いずれも外面はヘラケズリされる。平安時代前期にあたる9世紀中頃の京都Ⅰ期新段階に属する。52は甕の上半部である。口径11.7cm、器高5.4cm以上である。口縁部は「く」の字状で端部外面に沈線が巡る。内外面をハケメ調整する。

51は須恵器杯である。口径15.5cm、器高3.0cmである。底部は平底とみられる。内外面ともにナデ調整している。体部外面の上半に「西」と描かれた墨書がある。

井戸3-3（図版19、図48）53は黒色土器椀A類である。口径16.7cm、器高4.7cmである。内面は横方向のヘラミガキを施し、簡略化された暗文がみられる。外面はオサエ後にナデで調整する。底部外面に墨書がみられる。

54～56は灰釉陶器椀である。54は口径14.4cm、器高4.2cmである。体部は緩やかに外反する。底部外面に墨書がみられる。55は口径13.8cm、器高6.4cmである。体部はやや丸みをもつ。底部外面に「大」と描かれた墨書がみられる。56は底部の破片である。高台端部は内傾する。底部外面に墨書の一部がみられる。

土坑3-400（図版18、図48）57・58は土師器である。57は皿である。口径13.4cm、器高1.8cmである。口縁部は外反し器壁は薄い。平安時代前期の京都Ⅱ期古～中段階に属する。58は甕である。口径19.2cm、器高15.0cmである。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。体部下半の器壁は薄く、内面はハケメ調整している。外面には体部から底部にかけて葉脈状のタタキ痕が残る。

土坑3-928（図版18、図48）59は須恵器二面風字硯である。残存長は12.6cm、幅8.4cm、厚さ2.4cmである。粘土板の縁を上方に折り曲げ堤部とし、内面には突起がみられる。裏面は脚の剥離痕が残る。内外面ともにヘラケズリ調整している。内面は平滑で、片面には朱痕がみられる。

井戸3-309（図版19、図48）60は須恵器杯Bの底部である。残存高2.2cm、低径7.8cmである。底部外面は糸切り後、高台を貼り付ける。内外面ともに回転ナデで調整している。底部外面に「子也」と描かれた墨書がみられる。61～63は黒色土器椀である。61は口径14.5cm、器高

溝523



45

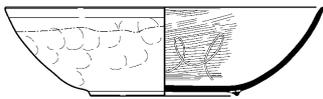


46



47

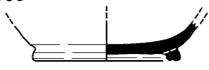
井戸3



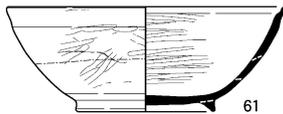
53



井戸309



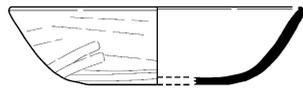
60



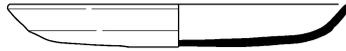
61



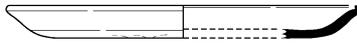
62



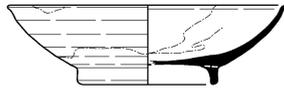
48



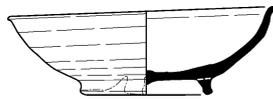
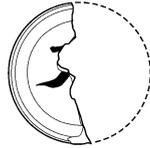
49



50



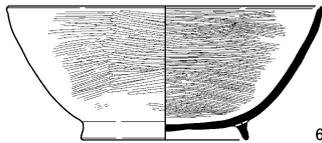
54



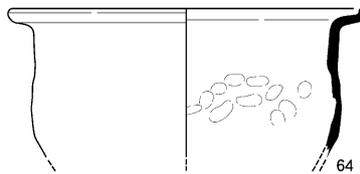
55



56

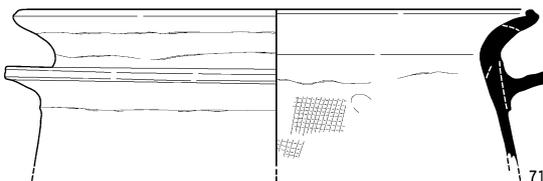


63



64

柱穴781



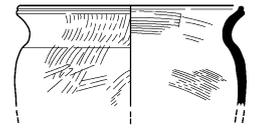
71



72

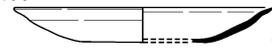


51

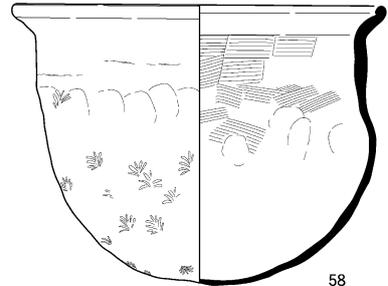


52

土坑400

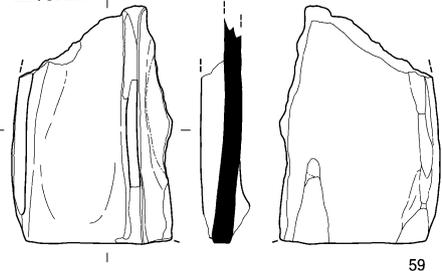


57

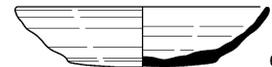


58

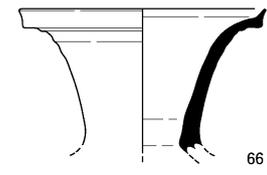
土坑928



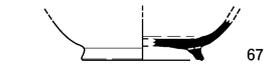
59



65



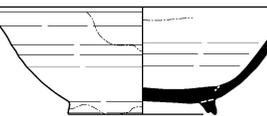
66



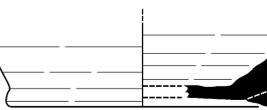
67



68



69



70



图 48 3区出土土器实测图 2 (1 : 4)

5.6 cmである。63は口径16.4 cm、器高7.0 cmである。いずれも内面と外面上半部は黒色化し、横方向のヘラミガキで調整している。B類に属する。62は口径15.2 cm、器高4.3 cmである。内面はヘラミガキが密で黒色化している。A類に属する。64は土師器甕である。口径18.6 cm、残存高8.0 cmである。口縁端部が上方に、やや肥厚する。内面体部には指オサエ痕がみられ、外面はナデ調整である。65・66は須恵器である。65は杯である。口径13.2 cm、器高3.5 cmである。口縁部は斜め上に延び、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。66は壺の口頸部である。口径13.0 cm、残存高は7.7 cmである。口縁部は斜め外方に延び、端部はやや直立する。内外面ともにナデ調整している。67～69は緑釉陶器碗である。67・68は高台部である。67は底径6.9 cm、68は底径8.8 cmである。いずれも底部外面を糸切り後、高台を貼り付けている。69は口径16.3 cm、器高5.7 cmである。内外面に濃緑色の釉を全面に施釉している。底部外面は糸切り後に高台を貼り付けている。いずれも近江産とみられる。70は灰釉陶器鉢の底部である。底径14.5 cmである。高台は貼り付けている。全体的に灰白色の釉が施される。71は土師器羽釜である。口径27.0 cm、残存高8.4 cmである。口縁部は斜め上方に延び、端部はさらに上方に延び、内傾する。体部外面に鏝を貼り付け後、ナデにより調整する。内面はハケメで調整する。

柱穴3-781（図48）72は須恵器甕の破片である。外面は横方向のタタキ後に円形花文の押印が施されている。

溝3-140（図版20、図49）73～82は土師器皿である。73は口径9.7 cm、器高1.6 cmの小型皿である。口縁部は外反し内外面ともにナデ調整している。口縁端部には油煙が付着する。74～79は口径9.8～10.2 cm、器高1.3～1.7 cmの小型皿である。いずれも器壁が厚く、口縁部は屈曲する。内外面ともにナデで調整している。80～82は口径15.1～15.6 cm、器高は3 cm前後の大型皿である。いずれも口縁部は斜め外方に延び、端部は丸くおさめる。口縁部の外面は二段ナデで調整している。平安時代中期の後半にあたる京都IV期中から新段階に属する。83～86は瓦器碗である。口径13.8～15.6 cm、器高は4.7～6.0 cmである。いずれも内外面ともにヘラミガキで調整している。内面の口縁部下に沈線を巡らす。83・84は内面底部に暗文がみられる。いずれも楠葉産とみられる。87・89は白磁碗である。87は口径13.6 cm、器高3.8 cmである。体部は内湾し、口縁端部は上方に丸くおさめる。89は口径15.5 cm、残存高5.4 cmである。口縁部を玉縁状におさめる。88は灰釉陶器碗である。口径14.4 cm、器高4.5 cmである。体部は内湾し、口縁端部は斜め上方に延び、丸くおさめる。体部外面の上半に筋を入れ輪花としている。底部外面は糸切り後、高めの高台を貼り付ける。内面に灰白色の釉が施される。

柱穴3-654（図49）90は土師器皿である。口径10.4 cm、器高1.6 cmである。器壁が厚く、口縁部は屈曲する。内外面ともにナデで調整している。平安時代中期の後半にあたる京都IV期中から新段階に属する。

土坑3-538（図版20、図49）91～96は土師器皿である。91～93は9.0～10.7 cm、器高1.4～2.3 cmの小型皿である。いずれも口縁部が屈曲する。93は器壁が薄く、やや古い要素がみられる。94は口径11.0 cm、器高1.9 cmである。扁平な体部で口縁部の端部は内側につまみ上げる。95は

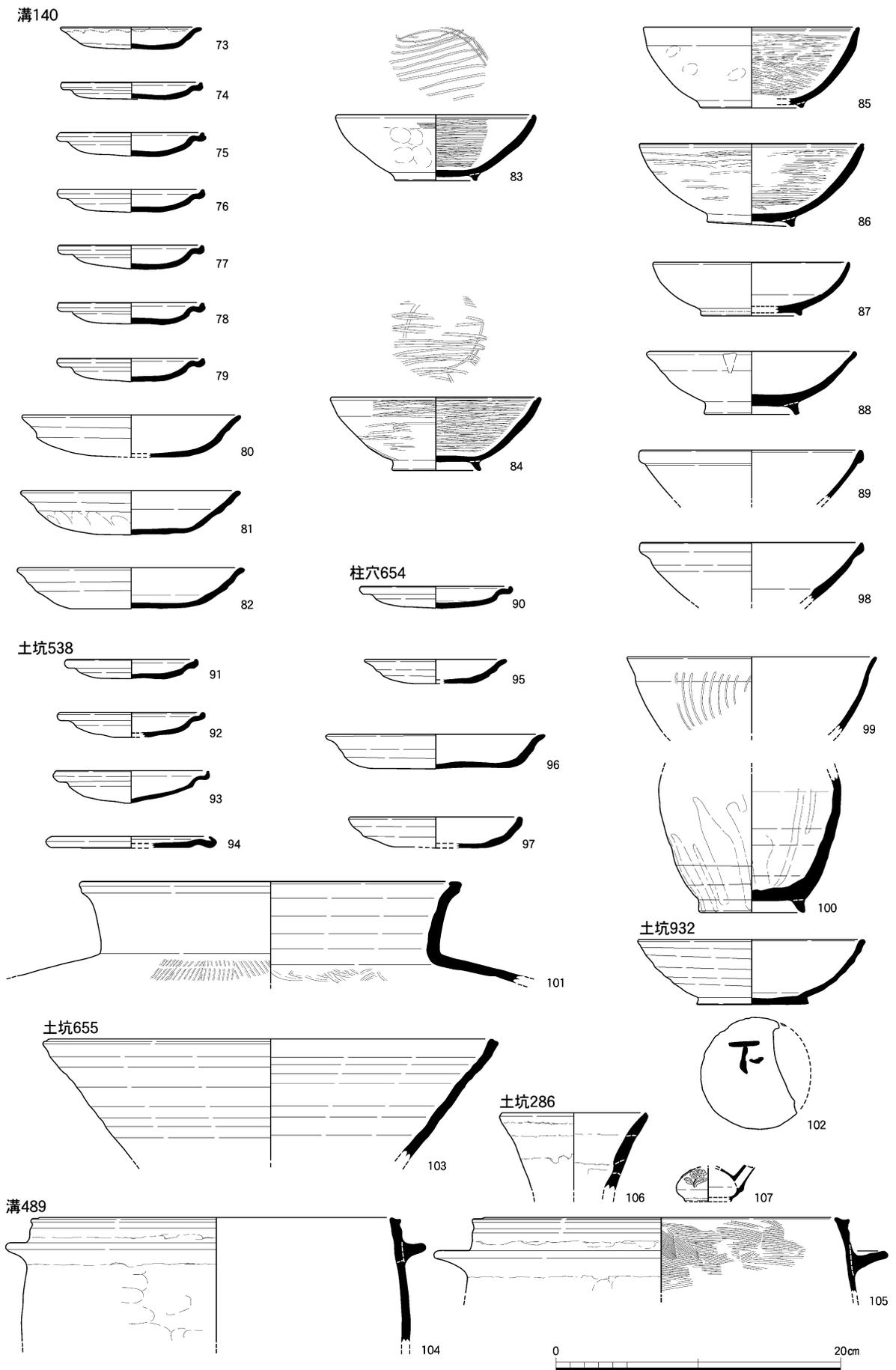


图 49 3区出土土器实测图 3 (1 : 4)

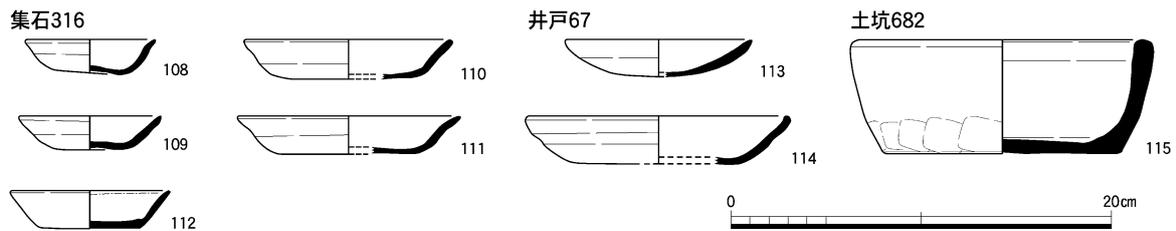


図50 3区出土土器実測図4 (1:4)

口径 9.8 cm、器高 1.7 cmの小型皿である。96 は口径 15.0 cm、器高 2.4 cmの大型皿である。いずれも口縁端部は外反し、外面は二段ナデで調整している。平安時代中期後半の京都IV期中から新段階に属する。97 は瓦器皿である。口径 11.9 cm、器高 2.2 cmである。内外面ともにナデ調整している。98・99 は白磁椀である。98 は口径 15.5 cm、残存高 4.2 cmである。口縁部は玉縁状におさめる。99 は口径 17.4 cm、残存高 5.4 cmである。体部はやや内湾しながら、斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面に連弁状の文様が密に描かれている。100 は灰釉陶器壺の体・底部である。底径 7.3 cmで糸切り後、高い高台を貼り付ける。体部内外面ともに灰緑色の釉が施される。101 は須恵器甕の口縁部である。口径 26.4 cm、残存高 7.2 cmである。外面はタタキ成形で、内面には同心円状の充て具の痕跡が残る。

土坑 3-932 (図版 19、図 49) 102 は須恵器椀である。口径 16.0 cm、器高 4.7 cmである。体部は内湾しながら斜め上方に延び、端部は丸くおさめる。体部外面の下半はヘラケズリし、高台は削り出す。底部外面は糸切り痕が残る平底で、墨書で「下」とかかかれている。

土坑 3-655 (図 49) 103 は須恵器鉢の上半部である。口径 31.0 cm、残存高は 9.4 cmである。体部は外上方に延びる。口縁外面端部には沈線が巡る。

鎌倉時代から室町時代の土器類 (図 49・50)

溝 3-489 (図 49) 104・105 は瓦器羽釜の口縁・体部である。104 は口径 20.8 cm、残存高 8.8 cmである。鰐は短く斜め上方に延びる。内面はナデで調整している。体部外面はオサエ痕が残り、表面には煤が付着している。105 は口径 24.5 cm、残存高 5.4 cmである。鰐は長く斜め上方に延びる。内面はハケメで調整している。体部外面はオサエ痕が残る。

土坑 3-286 (図版 20、図 49) 106 は土師器鉢である。口径 10.8 cm、残存高 5.5 cmである。体部は大きく開く。内外面ともにナデで調整している。粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭に残る。107 は白磁水注である。底径 3.3 cm、器高 2.4 cmの小型品である。口縁・底部は欠損している。内湾する体部に斜め外方に延びる注口が取り付け。肩部外面には花文を施す。

集石 3-316 (図版 20、図 50) 108～111 は土師器皿である。108・109 は口径 7 cm前後、器高 2 cm前後の小型皿である。ともに体部は外反し、内外面ともにナデで調整している。110・111 は口径 11 cm前後、器高 2 cm前後の大型皿である。ともに体部は外反し端部は斜め上方に延びる。111 は口縁端部が、やや肥厚する。いずれも室町時代前半の京都VII期中から新段階に属する。112 は白磁椀である。口径 8.3 cm、器高 2.0 cmの小型椀の完形品である。体部は外反し口縁端部は、やや角張る。全面に灰白色の釉を施すが、口縁端部は剥ぎとられる。

井戸 3-67(図 50) 113・114 は土師器皿である。113 は口径 9.8 cm、器高 2.0 cmの小型皿である。体部は外反し、端部は尖り気味である。体・底部はオサエ、他はナデで調整する。114 は口径 13.5 cm、器高 2.6 cmの大型皿である。体部はやや屈曲しながら外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面は横ナデ、体部外面はオサエで調整している。室町時代前半の京都Ⅶ期中から新段階に属する。115 は瓦質土器鉢である。口径 16.0 cm、器高 6.0 cmである。体部はほぼ直線に延び、口縁端部はやや丸みをおびる。底部は平底である。体部外面下半はヘラケズリで調整している。

2) 瓦類 (図版 21、図 51)

出土した瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。その内、軒丸瓦・軒平瓦は集石 3-316 や土坑 3-841 などから多く出土した。時期別にみると平安時代後期から鎌倉時代のもが多くを占める。他に飛鳥時代、平安時代中期、鎌倉時代のものもみられる。ここでは図示できた軒瓦について概述する。

軒丸瓦 (図版 21、図 51)

素弁六葉蓮華文 (瓦 3) 中房には 1 + 4 の蓮子を配する。弁間文は細く延び、先端で分かれる。胎土は硬質である。溝 3-140 から出土した。飛鳥時代。

複弁八葉蓮華文 (瓦 4) 中房はやや盛り上がり、1 + 6 の蓮子を配する。蓮弁は盛り上がり子葉もみられる。間弁は撥形で一つおきに配する。外区には大粒の珠文が密に巡る。胎土は硬質である。井戸 3-309 から出土した。栗栖野産。平安時代中期。

単弁八葉蓮華文 (瓦 5) 全体に磨滅著しい。中房は花弁形で平坦、圏線が巡る。蓮子数は不明。単弁には子葉はない。瓦当部裏面に溝を付し丸瓦を挿入する。胎土は硬質で、石粒を多く含み粗い。井戸 3-313 から出土した。森ヶ東瓦窯産。平安時代中期。

三巴文 (瓦 6 ~ 12) 瓦 6 ~ 9・11・12 は右巻き三巴文である。いずれも瓦当面の復元径 10.5 ~ 11.5 cmの小型の軒丸瓦である。丸瓦部は接合式である。瓦 6 ~ 8 はいずれも外区に珠文を配さず、巴文の頭部は離れ、尾部は互いに接しない同文とみられる。瓦当側面・裏面はナデ調整、裏面上端をやや窪ませ丸瓦を充てる。いずれも胎土はやや軟質である。瓦 9・11・12 は外区に珠文を密に配する。巴文の頭部は離れ、尾部は互いに接しない。瓦 12 の瓦当面には縦方向に範の木目が残る。いずれも胎土は硬質である。瓦 10 は左巻き三巴文である。頭部は離れ、尾部は周縁と接しない。瓦当部側面はナデ調整、裏面はオサエ後にナデ調整。胎土はやや軟質である。瓦 6・8・9・11 は土坑 3-841 から、瓦 10・12 は集石遺構 3-316 から、瓦 7 は土坑 3-286 から出土した。いずれも山城産とみられる。平安時代後期から鎌倉時代。

四葉花文 (瓦 13) 楕円形の花文を四葉配する。弁間文は小さな中房から十字に延び、先端は撥状に開く。外区には小粒の珠文を密に配する。胎土は硬質である。集石遺構 3-316 から出土した。山城産。平安時代後期。

複弁八葉蓮華文 (瓦 14) 中房は凸形で中央に「卍」を配する。珠文が密に巡る。胎土は硬質で粗い。集石遺構 3-316 から出土した。山城産。鎌倉時代。

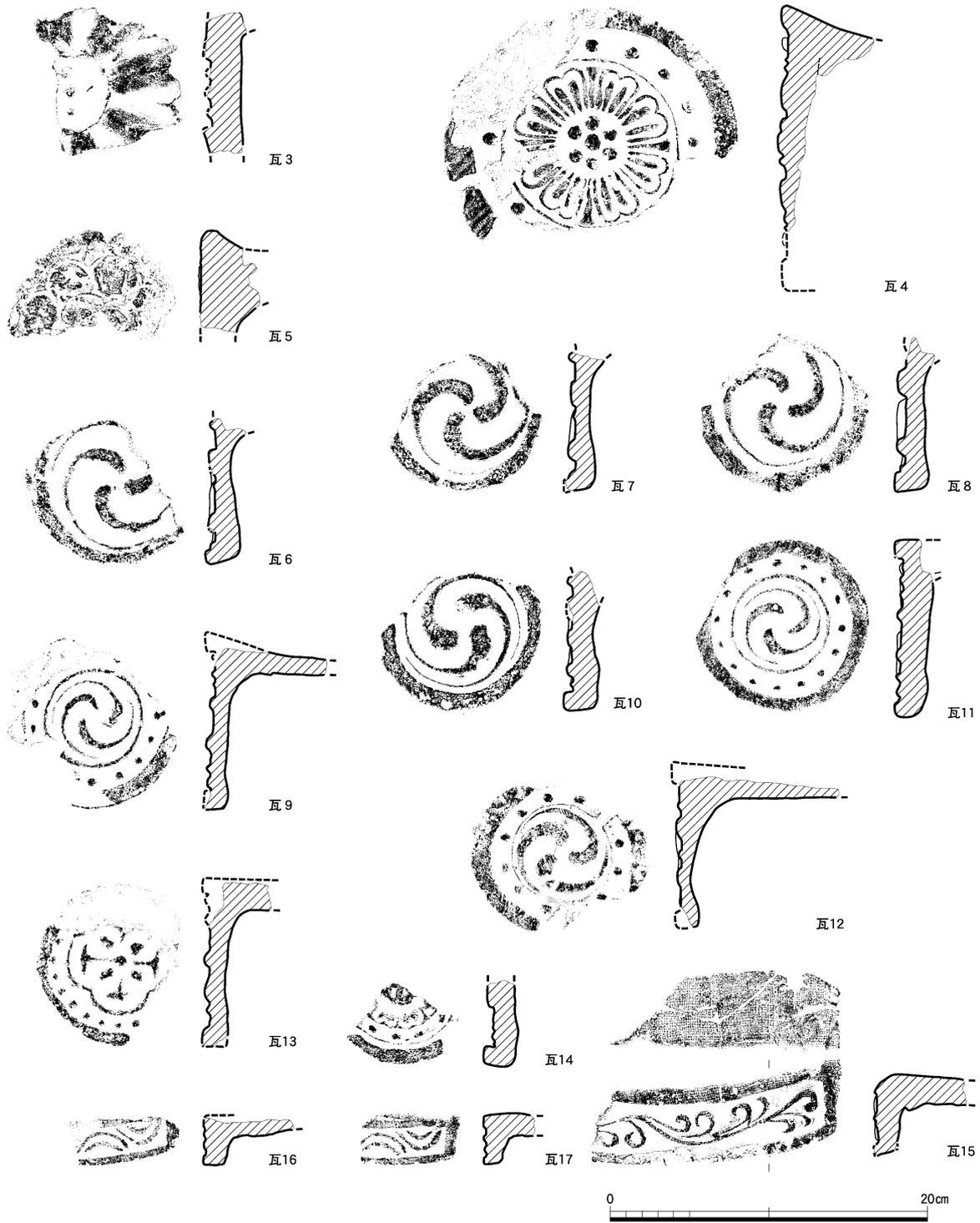


図 51 3区出土軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)

軒平瓦 (図版 21、図 51)

右行偏向唐草文 (瓦 15) 瓦当面は折曲げ式である。平瓦凹面には布目痕がみられ、瓦当面にも残る。裏面はナデで調整する。胎土は硬質である。土坑 3-534 から出土した。山城産。平安時代後期。

水波文 (瓦 16・17) いずれも 2 条の凸線で水波文を表す。瓦当部は折曲げ式で成形する。胎

土はいずれも軟質である。集石遺構 3-316 から出土した。山城産。平安時代後期から鎌倉時代。

3) 石製品 (図版 22、図 52)

石 3・4 いずれも石臼である。石 3 は唐臼とみられ 1/4 程度残存する。長さ 29.0 cm、幅 28.1 cm、厚さ 20.8 cm、重量 23.5 kg である。外側は打ち欠いたままの未調整で、内面は粗く調整している。花崗岩製である。溝 3-140 から出土した。石 4 は茶臼の下臼で 1/3 程度残存する。長さ 17.7 cm、幅 24.0 cm、厚さ 10.7 cm、重量 5.0 kg である。臼目は 8 分画で 6 本溝である。裏面は面取りの整痕がみられる。側面には縦 2 cm、横 4 cm の孔を穿つ。花崗岩製。溝 3-556 から出土した。

石 5・6 いずれも砥石である。石 5 は形状が不定形で長さ 21.0 cm、幅 15.0 cm、厚さ 7.5 cm、重量 2.5kg である。両面に使用による擦痕が多くみられる。被熱により灰赤色に変色している箇所もみられる。砂岩製である。溝 3-140 から出土した。石 6 は一部欠損しているが形状は直方体で、長さ 6.7 cm、幅 4.0 cm、厚さ 3.0 cm、重量 143 g である。使用により上・下面には線状の擦痕が多くみられる。土坑 3-538 から出土した。

石 7・8 五輪塔の笠石である。石 7 は長さ 21.6 cm、幅 21.8 cm、厚さ 13.0 cm、重量 8.8 kg である。石 8 は長さ 24 cm、幅 24 cm、厚さ 15 cm、重量 13kg である。いずれも上面は窪みをもち、

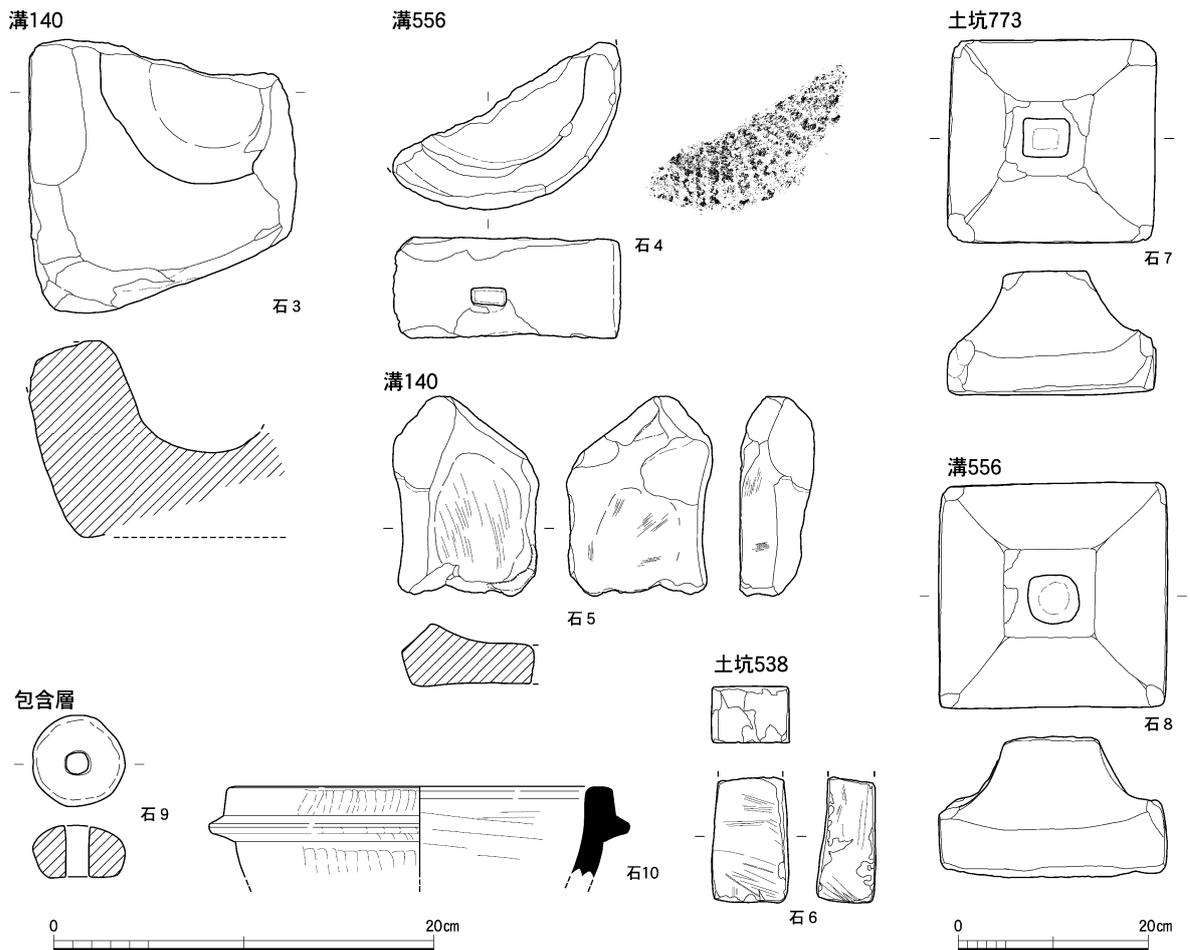


図 52 3区出土石製品実測図 (石 6・9・10 は 1:4、他は 1:8)

下面はやや湾曲する。花崗岩製。石7は土坑3-773、石8は溝3-149から出土した。

石9 紡錘車の完形品である。径4.9 cm、高さ2.8 cmである。中央部の穿孔は頂部径1.4 cm、底部径1.3 cmである。側面は丸みをもち、底部が平坦で断面形状が算盤玉形を呈する。砂岩製である。第2面包含層から出土した。

石10 石釜である。口径20.2 cm、残存高5.0 cmである。口縁部外面に鏝が巡る。内外面には加工痕が残る。外面には煤が付着する。滑石製。溝3-140から出土した。

4) 土製品 (図版22、図53)

土1 瓦経である。残存長10.5 cm、残存幅6.5 cm、厚さ3.0 cmの粘土板である。焼成は堅緻で灰白色を呈し、胎土は粗い。縁は面取りを施す。粘土板の表裏には罫線が縦横に引かれ、枠の中に『妙法蓮華経』「第六法師功德品第十」の一部が書写印刻³⁾されていた。表は枠外にも印刻されている箇所がある。罫線は裏表とも縦線と横線は交わらない。経文は次の通りで、太字部が残存する。

(表) 所應瞻奉應以如来供養而供養之富知此人

是大菩薩成就阿耨多羅三藐菩提哀愁衆生
願生此間廣演分別妙法華經何況盡能受持
種種供養者藥王富知是人自捨清淨業報

(裏) 上饌衆甘美及種種衣服供養是佛子冀得須臾聞

若能於後世受持是經者我遣在人中行於如來事
若於一劫中常懷不善心作色而罵佛獲無量重罪
其有讀誦持是法華經者須臾惡言其罪復過彼

経典どおりには経文が印刻されているが、経典同様には改行されず、一行の字詰めは不規則で、ばらつきがある。土坑3-683から出土した。

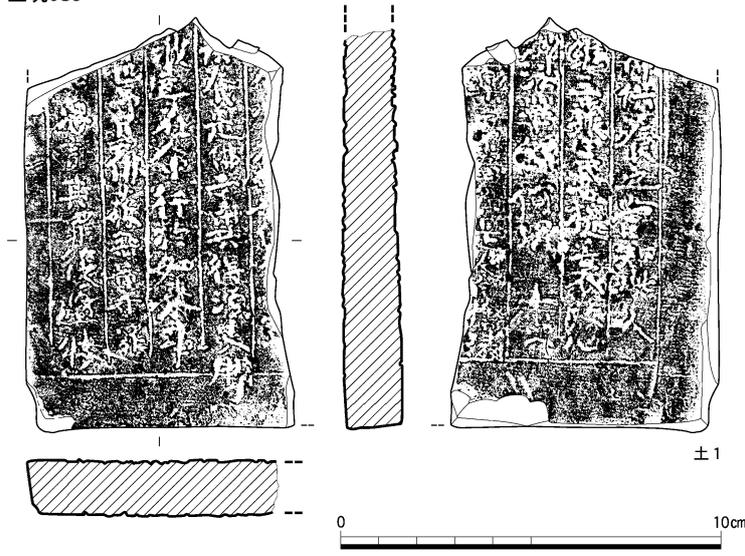
土2 土錘である。長さ5.0 cm、幅1.6 cmである。中央に径0.5 cmの孔を穿つ。形状は両端がすぼまる円筒形で芯材に粘土を巻き上げてナデで成形する。溝3-824から出土した。

土3 埴塙である。口径19.0 cm、残存高3.2 cmである。平坦な底部から口縁部が内湾する。端部は丸みをおびる。内外面ともにナデで調整している。口縁内面に融解物が付着する。口縁外面は被熱を受け赤変している。土坑3-313から出土した。

5) 金属製品 (図版22、図54)

金1 小型の海獣葡萄鏡である。径3.8 cm、高さ0.3 cm、重量13gである。海獣葡萄文様の内区のみを独立させたもので、背面中央に角張った鈕が付く。鈕の周囲に四獣を配し葡萄唐草が取り巻くが、文様はかなり不鮮明である。蛍光X線分析によりアンチモンを含有することが判明した(付章参照)。海獣葡萄鏡の内区のみを独立させた小型鏡はこれまでに6遺跡・8面の出土が知られており、本例が7遺跡・9面目の出土である。これまでの供伴遺物の検討や成分組成に一定程度のアンチモンを含むことなどから、鑄造年代は奈良時代から平安時代初頭に限定されるとみ

土坑683



溝824

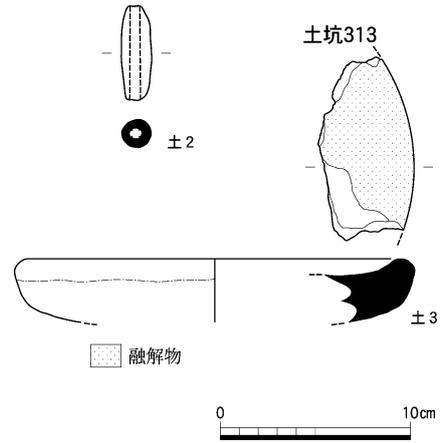
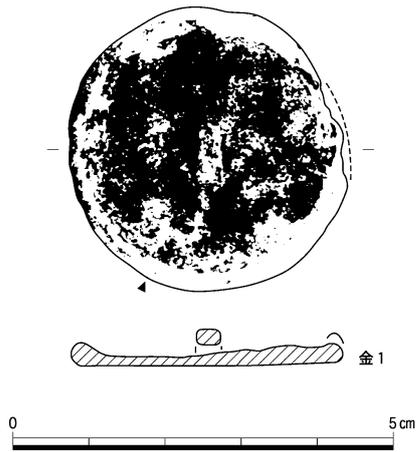
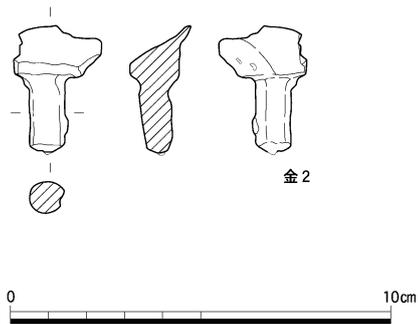


图 53 3区出土土製品実測図 (1 : 2、1 : 4)

溝556



土坑1538



溝523

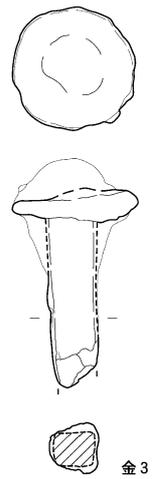


图 54 3区出土金属製品実測図 (1 : 1、1 : 2)

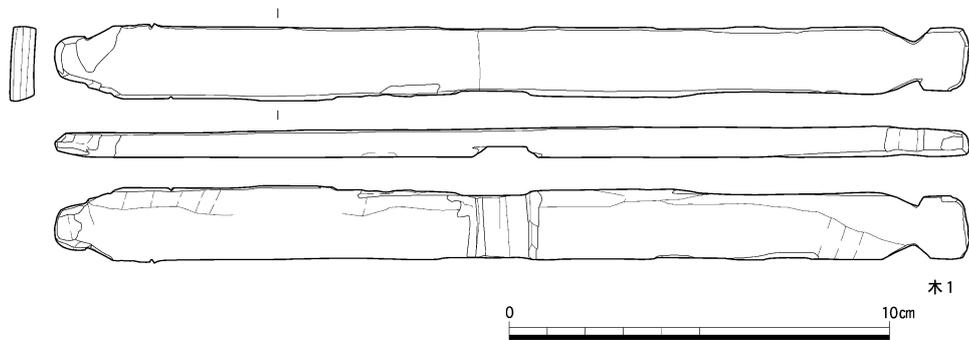


图 55 3区出土木製品実測図 (1 : 2)

られている。⁴⁾溝 3-149 の南辺で出土した。便宜上、鈕の方向にあわせ図化したが、本来の天は「▲」の位置である。

金 2 香炉脚の一部である。残存長 3.4 cm、残存幅 2.3 cm、幅 0.8 cm である。青銅製品。土坑 3-538 から出土した。

金 3 大型の鉄釘である。頭径 3.3 cm、身幅 0.9 cm、残存長 6.0 cm である。頭部は丸みをもち、身は方形である。溝 3-523 から出土した。

6) 木製品 (図版 22、図 55)

木 1 曲物の杵材である。長さ 24.1 cm、幅 2.1 cm、厚さ 0.8 cm である。両端は出柄状につくり、内側上面のほぼ中央に幅 1.6 cm の切り込みを彫りこむ。この切り込みはもう 1 枚を嵌め込んで、「十」字形に組み合わせるためのものである。材質はスギ。井戸 3-3 曲物内から出土した。

註

- 1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981 年
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都市の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』3、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996 年
- 3) 坂本幸男・岩本裕(翻訳)『法華経(中)』岩波文庫、1964 年
- 4) 本小型鏡の評価については、京都国立博物館・久保智保氏に御教示いただいた。杉山洋「古代の鏡」『日本の美術』393、至文堂、1999 年。奈良国立文化財研究所編『西隆寺跡発掘調査報告書』、奈良市教育委員会、2001 年

5. ま と め

本調査は、城北街道（市道梅津太秦線）の拡幅工事に先立つ発掘調査として、2008年度からの継続事業の5次調査である。対象とした遺跡は、古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした集落遺跡である常盤仲之町遺跡である。また、JR嵯峨野線を挟んだ北側に設定した1・2区は古墳時代後期の常盤東ノ町古墳群に含まれ、南側に設けた3区は飛鳥時代創建の広隆寺旧境内の東端に隣接している。

1・2区では、鎌倉時代から室町時代の柱穴・土坑・土壇墓・井戸など、飛鳥時代以前の土坑・溝などを検出した。

3区では、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物や柱穴列・柱穴・溝・土坑・井戸・集石遺構など、平安時代の掘立柱建物・溝・井戸・土坑など、古墳時代末葉から飛鳥時代の竪穴住居・土坑などを検出した。

以下に時代別に本調査の成果をまとめる。なお、3区については、図55にJR嵯峨野線以南の既往の調査27～29とともに検出した主要以降を時代別に示した。

古墳時代後期から飛鳥時代

1区で土坑、2区で溝状遺構、3区では竪穴住居や土坑などを検出した。2区の溝状遺構（溝2-125）は弧状をなしており、これが円墳の周溝であれば、常盤東ノ町古墳群の分布はやや南に広がることになる。3区で検出した竪穴住居3-1139は、調査28・29で検出しているものや周囲の調査でも当該期の竪穴住居が多数検出されており、飛鳥時代の広隆寺旧境内の創建との関連が考えられる。

平安時代中期

1・2区では当該期の遺構が検出できなかった。3区では北半で掘立柱建物や井戸、土坑など、南半で井戸を検出した。遺構は中期のものが主体であり、前期に遡るものも少量ながらみられる。井戸はいずれも検出面から3m以上深く掘り下げて造られた大規模なものであり、現・城北街道に沿うようにほぼ同じ南北軸線上に並べて造られている。街道沿いの地下の一定の深さに良好な水脈があったようである。これらの井戸は井戸3-3→井戸3-313→井戸3-309と時期を少しずつ違えて造られている。建物は3区北半北部で検出し、調査29で検出した建物群と同様、座標北に対してやや西へ振れる方位を持つ建物群である。3区の南半では遺構面の残存状況が悪く、建物を認識できたのは北部北半のみであったが、南部にも井戸を検出しており生活域が展開していたことを示すものと思われる。

調査28で検出されている東西方向の築地状の高まり遺構は、この下層に飛鳥時代のほぼ同じ方向の溝が検出されており、飛鳥時代から踏襲された当期以前の広隆寺に関する区画の施設で、造営当初からの寺域の北限を示す遺構ではないかとも考えられる。

鎌倉時代から室町時代

1・2区は城北街道の東側で、東西道の北嵯峨街道を南北に挟んだ位置にあり、1区の南端で

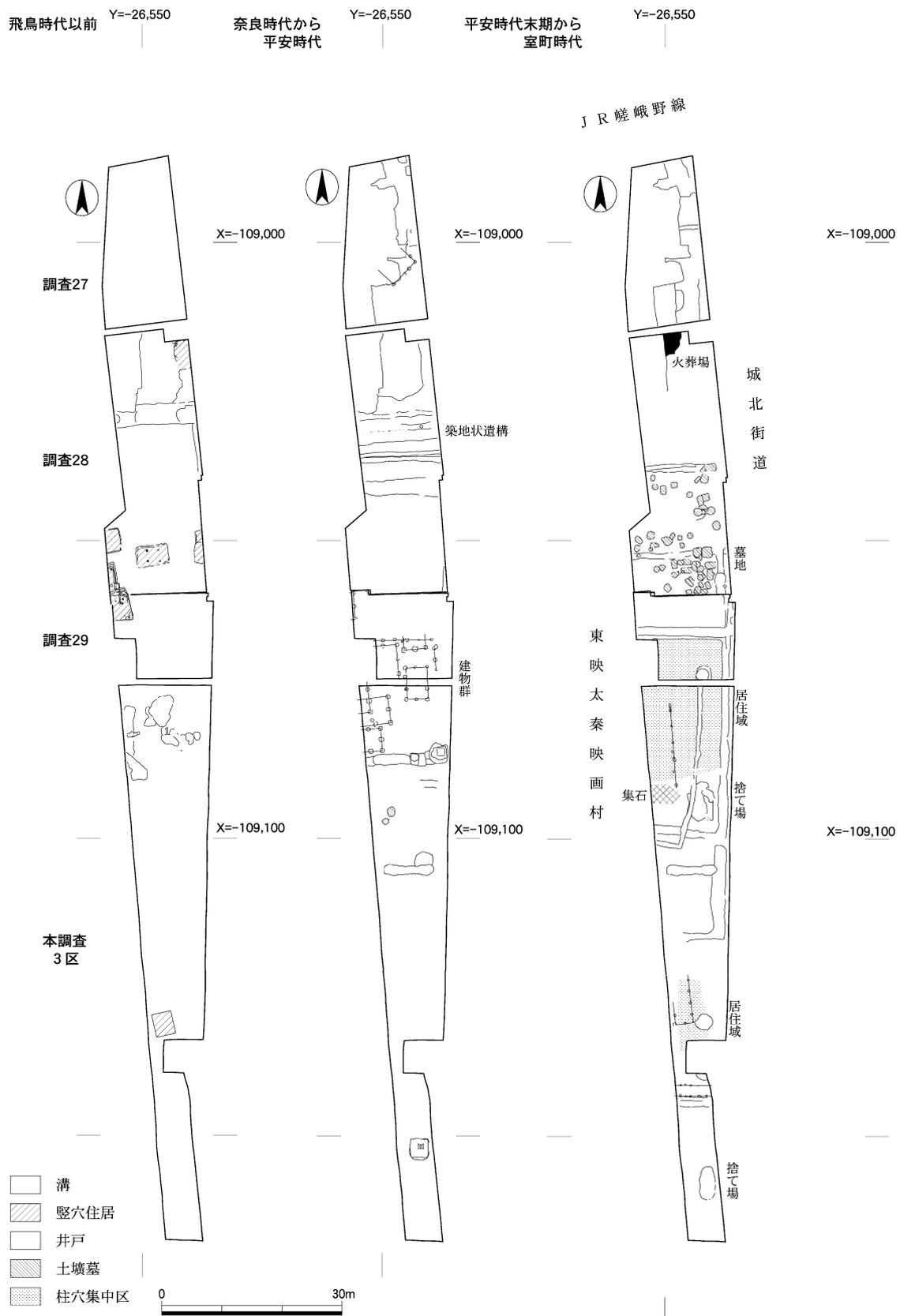


図 56 3区周辺遺構変遷図 (1 : 1,000)

は嵯峨街道の北側溝と考えられる溝（溝 1-344）を検出した。両調査区では多くの柱穴を中心に土坑、溝、井戸などかなり高密度に検出され、街道を挟んだ両側で活発に繰り返された活動の痕跡を示している。

3区では、城北街道の西側溝とこれに直交して東面する土地の区画のための東西溝を検出した（溝 3-149・312 や溝 3-9）。溝 3-149 に区画された地区には、柱穴や土坑などを多数検出し、居住域と推定される。この区画の南端では礫や瓦の廃棄坑である集石遺構 3-316 や土器の廃棄坑である土坑 3-286 が検出され、居住区に南接する不用品の捨て場として利用されていたとみられる。捨て場一帯からは瓦経や五輪塔の部材などや、奈良時代から平安時代初頭に铸造されたと考えられる内区のみ的小型海獣葡萄鏡が出土しており、当期以前に周辺にあった広隆寺に関連する墓や経塚などが整理されて廃棄されたものと考えられる。

図 56 に示したように、南北方向の城北街道に東面する当地周辺は直交する数条の東西溝で土地が区画されており、火葬場や墓地（調査 28）、居住域や空地（不用品の捨て場）など、それぞれの区画によって利用状況が異なっていたことが明らかになった。少なくとも城北街道にあたる南北道路が当期まで遡り、当時の広隆寺の境内の東限を示す道路とみられる。

本調査 3区では、上述の遺構群を覆う包含層の上面で区画溝とみられる溝 3-150 と東西に並ぶ南北方向の小溝を数条検出しており、室町時代の後半頃にはこれら区画内の施設は廃絶して耕作地として利用されたと考えられる。

さて、図 57 には現況の 1：5,000 地形図に、『社寺境内外区取調』（京都府立総合資料館蔵）に掲載された明治 29 年「山城国葛野郡太秦村 広隆寺境内内外区別実測図」をトレースして縮尺をあわせて、さらに周辺の調査の調査区と常盤東ノ町古墳群の分布を重ねた図を示した。方形の太線は、京都市遺跡地図による広隆寺旧境内遺跡の推定範囲である。この「山城国葛野郡太秦村 広隆寺境内内外区別実測図」は明治期の境内を実測し、利用状況を色分けして示したものである。周囲に示された藪・林や畑はすっかり様変わりしているが、測量は比較的正確で周囲の道路や現境内の状況はほぼ合致する。

「山城国葛野郡太秦村 広隆寺境内内外区別実測図」は明治時代の境内の状況を示しているが、寺域の四圍の道路が明示されていて、当時の寺域の東限が城北街道に及んでいたことがわかる。これまでに記してきたように、一連の調査では現在の城北街道の西側溝に重なる南北溝が鎌倉時代から室町時代に遡ることを明らかにし、これに面する地域が直交する東西溝で区画され利用されていることがわかった。このことは広隆寺の東限が城北街道であるということが、少なくとも鎌倉時代から室町時代にまでは遡れることを示している。さらに平安時代の北限と考えられる築地状遺構（調査 28）や建物群と規模の大きな井戸などの存在（調査 29、本調査 3区）から、平安時代から広隆寺境内が城北街道に東面する当地まで及んでいたことが、上述した明治時代の地籍図に該当する実測図にも反映されており、さらに図に示された区画が、広隆寺旧境内に存在した院・坊を示唆している。今回検出した建物や井戸、区画溝群は、旧境内の変遷を考える上で、良資料を得られたと評価できる。

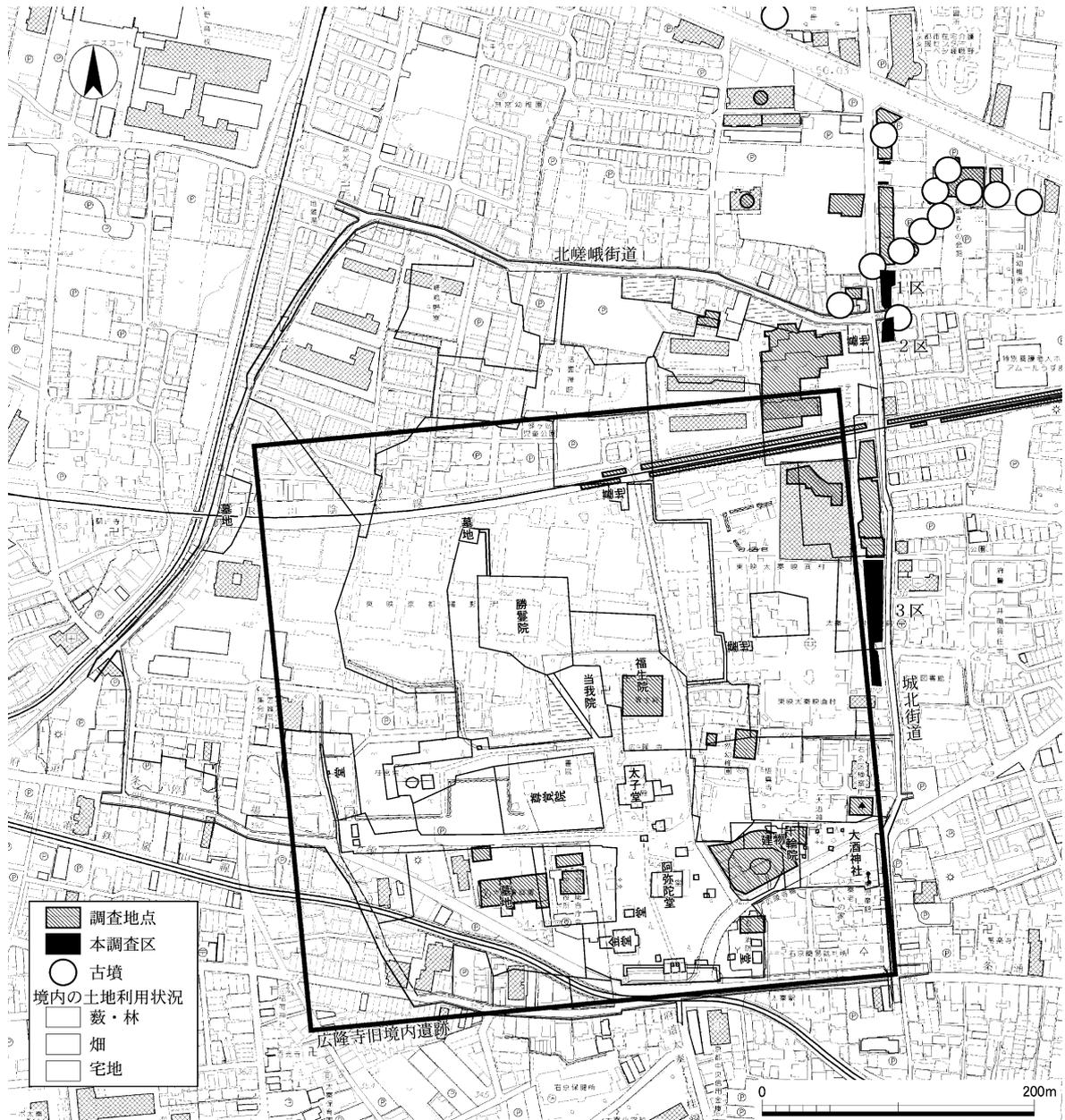


図 57 広隆寺境内内外区別実測図および周辺調査位置図（1：5,000）

6. 付章 小型海獣葡萄鏡の分析調査

東京文化財研究所 保存修復科学センター
北野信彦・犬塚将英・吉田直人

1 はじめに

城北街道5次調査地点（常盤仲之町遺跡）からは、内区部分を独立させた特異な形態を有する小型鏡が1点出土した。今回、この資料の分析調査を行ったので結果を報告する。

2 調査方法

(1) X線透過写真撮影

本資料の基本的な構造と劣化状態の確認をするために、東京文化財研究所 保存修復科学センター設置の（株）エクスロン社製 MG325 型 X線透過写真撮影装置を用いて X線透過写真撮影を行った。撮影条件は、管電圧 = 100kV、管電流 = 3 mA、照射時間 = 30 秒、照射距離 = 150 cm である。

(2) 無機元素の定性分析

本資料の材質分析をするために、東京文化財研究所 保存修復科学センター設置の（株）堀場製作所 MESA-500 型の蛍光 X線分析装置を用いて無機元素の定性分析を行った。設定条件は、分析時間 = 600 秒、試料室内 = 真空状態、X線管電圧 = 15kV および 50kV、X線管ターゲットは Rh、電流 = 240 μ A および 20 μ A、検出強度 = 200,0 ~ 250,0cps、定量補正法 = スタンダードレス FP である。

3 調査結果

本資料は直径約 3 cm 程度の内区部分を独立させた小型の海獣葡萄鏡である。これは鑄造時に外区まで青銅が廻らず、鑄込みに失敗した鏡を内区のみ独立させて製品に仕上げたものであるとされている。本資料の目視観察では、図様や紐の形が極めて不明瞭であり、鑄造後の調整や鏡面の研磨が施された形跡がない。基本的には祭祀遺跡と考えられる 7 世紀中頃から 8 世紀頃の遺跡からこれまで 8 面（奈良県下 7 面、石川県下 1 面）の同様の小型鏡の出土例が報告されている。

本調査では、まず本資料の X線透過写真撮影を行った。調査の結果、この鏡面の中央に位置する紐の穿孔は認められるものの、図様表面に著しい劣化による薄離現象は観察されなかった（図 58）。そのため、本資料は使用時や土中埋没中に図様の表面が崩れかかったものではなく、何回か踏み返し鑄造されたため図様自体が不明瞭な

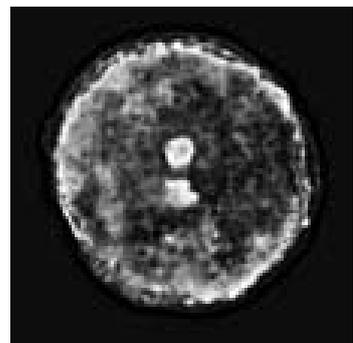


図 58 X線透過写真

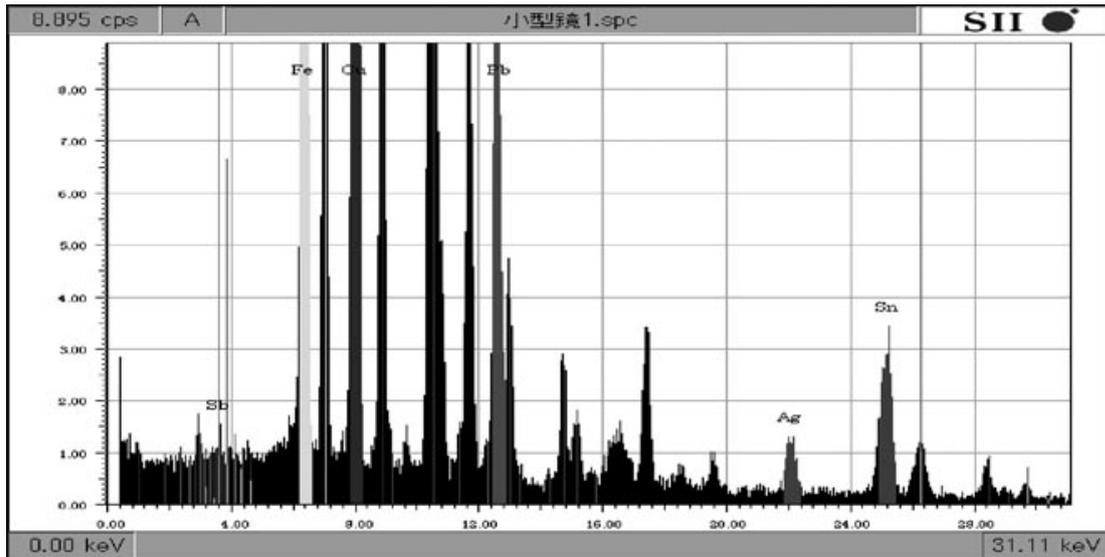


図 59 分析結果

鋳放しの鏡であると考えられる。これは、同形態の小型海獣葡萄鏡とも類似した傾向である。

次に本資料の材質分析を行った。調査の結果、本資料からは無機元素の主成分として銅 (Cu)、錫 (Sn)、鉛 (Pb) のピークが強く検出された (図 59)。そのため、本資料は基本的には青銅鏡であることが確認された。さらに本資料に含まれる微量元素を検討した結果、アンチモン (Sb)、銀 (Ag) のピークも微量ながら確認された。

このような微量のアンチモンおよび銀の由来は、青銅鏡の原材料の一つである錫鉱石の不純物として含まれていたものであるとされている。とりわけアンチモンの含有に関連した先行研究では、飛鳥池跡に代表される 7 世紀中から 8 世紀にかけての藤原京期の遺跡出土の青銅器に同様のアンチモンを含む類例が多いとされている。そのため、このような青銅を「アンチモン青銅」と呼称して、藤原京期の指標資料とされている。本資料と類似した他遺跡出土の小型海獣葡萄鏡においても、同様の微量のアンチモンを含む青銅が原材料であるとの分析結果が報告されている。

さて、本資料が出土した常盤仲之町遺跡周辺は、広隆寺境内にもほど近い桂川沿いに所在しており、古代においては京都盆地内では早くから秦氏などの渡来系氏族の根拠地として開けた地域でもある。その意味では、水との関連性が指摘されている祭祀遺跡からの出土例が多い踏み返し鋳造に拠る内区のみ的小型海獣葡萄鏡の出土は、本遺跡周辺地域の当該年代における性格を考える上で示唆的な考古学的成果であるといえよう。

参考資料

- 杉山洋 (2001) 「小型海獣葡萄鏡について」『日本文化史研究 第 33 号』帝塚山大学
- 奈良文化財研究所 (1999) 「鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として」『飛鳥資料館図録 34 冊』
- 久保智康 (1999) 『中世・近世の鏡：日本の美術 No.394』至文堂

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき・ときわひがしのちょうこふんぐん							
書名	常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-15							
編著者名	高橋 潔・加納敬二							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区	26100	908	35度 01分 06秒	135度 46分 30秒	2010年11月 22日～2011 年3月11日	1,343m ²	道路拡幅 工事
ときわひがしのちょうこふんぐん 常盤東ノ町古墳群	うづまさひがしほちおちちょう 太秦東蜂岡町 ほか ちない 他 地内		874					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤仲之町遺跡	集落跡 ・墓跡	飛鳥時代以前	竪穴住居、土坑、 溝（古墳周溝か）	土師器、須恵器、瓦		飛鳥時代の竪穴住居を遺跡内の最も南で検出した。 平安時代の掘立柱建物、井戸などを検出した。 鎌倉時代から室町時代の城北街道・北嵯峨街道および区画に関連する溝を検出した。 いずれも広隆寺の東限に関する遺構である可能性がある。		
常盤東ノ町古墳群	古墳	平安時代	掘立柱建物、井戸、 土坑、溝、柱穴群	土師器、須恵器、黒色土器、 緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦、銅鏡				
		鎌倉時代 ～室町時代	掘立柱建物、柱穴列、 土坑、溝、集石遺構、柱穴群	土師器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、輸入陶磁器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-15
常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群

発行日 2011年3月31日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961